令和２年度
自己点検・評価「年次報告書」

長崎女子短期大学
自己点検評価室

【目次】

部　署　名	職　名	氏　名	頁
学長	学長	玉島　健二	1
栄養士コース	コース長	太田　美代	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濵口　なぎさ	5
幼児教育学科	学科長	本村　弥寿子	7
学生部	部長	織田　芳人	9
図書館	館長	森　弘行	11
自己点検評価室	室長	武藤　玲路	13
入試広報室	室長	髙井　達司	15
キャリア支援センター	センター長	原田　実輝	17
ＦＤ・ＳＤ委員会	委員長	武藤　玲路	19
教務・ＩＲ推進室	室長	蛯原　正貴	21
教職課程委員会	委員長	本村　弥寿子	23
特色化推進 PT 会議	会議長	玉島　健二	25
募集・広報委員会	委員長	髙井　達司	27
紀要・図書委員会	委員長	中村　浩美	29
学生委員会	委員長	古賀　克彦	31
障がい学生支援委員会	委員長	織田　芳人	33
学生相談室	室長	福井　謙一郎	35
地域連携・子育て支援センター	センター長	荒木　正平	37
寮務委員会	委員長	桑原　倫子	39
事務局	局長	前田　功	41

職　名	氏　名	頁
学長	玉島　健二	43
教授	森　弘行	44
	織田　芳人	45
	中澤　伸元	46
	松尾　公則	47
	福井　昭史	48
准教授	武藤　玲路	49
	濵口　なぎさ	50
	島田　幸一郎	51
	中村　浩美	52
	本村　弥寿子	53
	光武　きよみ	54
講師	古賀　克彦	55
	荒木　正平	56
	福井　謙一郎	57
	蛯原　正貴	58
	太田　美代	59
	江頭　万里子	60

職　名	氏　名	頁
助教	船勢　肇	61
	桑原　倫子	62
	桑原　真美	63
	山中　慶子	64
実習助手	守山　優美	65
	黒田　真衣	66
	内山　美保	67
事務局長	前田　功	68
入試広報室長	髙井　達司	69
キャリア支援センター長	原田　実輝	70
事務（会計）	宮﨑　伸一郎	71
〃　（会計）	一瀬　章子	72
〃　（教務）	森口　和美	73
〃　（教務）	林田　翔太郎	74
〃　（学生）	櫻井　縁	75
〃　（入試広報・庶務）	作本　栞里	76
司書	伊藤　理恵子	77

令和２年度

「部署別報告書」

令和２年度　「学長・運営委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（学長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．令和２年度の学長運営方針（４項目）の実現に向け、入試・運営委員会等での協議を推進する。入試・運営委員会が単なる報告、連絡事項の伝達の場にならないようにリーダーシップをとる。

２．入試・運営委員会やプロジェクト会議において、本学の課題を明らかにし、課題解決に向けた協議を定期的に行う。また、学科・コースの特色化、魅力化について、学科長・コース長との協議を通じて、実現化の道を模索する。

３．積極的な学生募集活動に取り組み、定員充足率の向上に努力する。また、きめ細かな対応による学生満足度の向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学長運営方針の実現

①学長運営方針を学長室に掲示し、常に意識して業務や会議に臨むようにする。

②学長運営方針の進捗状況、達成状況を進行管理し、確認しながら業務を進める。

２．本学の課題解決・特色化の推進

①本学の課題を常に意識化し、定期的にプロジェクト会議を開催する。また、必要に応じ理事長等の学園関係者、教職員の報告等を行う。

②必要に応じ、学科・コース会議に出席するとともに、学科長・コース長とは定期的に協議したり、進捗状況の報告を求めたりして、実現化の可能性を探る。

３．定員充足率や学生満足度の向上

①進学ガイダンス、高校訪問等に積極的に参加し、本学の良さを直接伝える。

②学友自治会役員との意見交換を定期的に行い、学生の要望等を把握するとともに、大学の取組について評価してもらい、今後の参考にする。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」

今年度に取り組み、一定の成果を上げた事項もあるが、その一方で十分に取り組んでいない事項や取り組んだが一定の成果を上げられていない事項もあり、次年度に持ち越す事項が多いと判断した。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

プロジェクト会議は１回しか開催しなかった。大きな課題は耐震化やバリアフリー化等の校舎改修である。ビジネス医療秘書コースの実践型教育プログラムは原案が提示されたが、幼児教育学科の長期履修制度については他学の情報収集ができていないこともあり、次年度に持ち越すことになる。なお、幼児教育学科の３班体制から２班体制の授業は次年度から実施することになった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

①については、コロナ禍の中にあってできることはやった。次年度入学予定者は、最終的に今年度より＋１０名の１４９名となった。

②については、学園祭関係で自治会役員に集まってもらったが、十分な意見交換はできなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学長運営方針の実現

年度末のみならず、年度途中のチェックを行うこととする。

２．本学の課題解決・特色化の推進

プロジェクト会議の開催も必要だが、学園本部が動くことが更に重要と考えるので、本部との協議を加速化させたい。

３．定員充足率や学生満足度の向上

学生募集については、生活創造学科の志願者を増加させることが求められる。次年度は学友自治会役員との意見交換を積極的に行い、指摘された事項に取り組むことにより、満足度の向上に努めたい。

令和２年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1．令和２年度学長運営方針の実現に向け、入試・運営委員会等での協議を推進する。
2．入試・運営委員会、プロジェクト会議において、課題解決に向けた協議を行う。
3．積極的な学生募集活動を行い、定員充足率向上に努力する。また、学生満足度の向上に努める。

Do 実行

1．学長運営方針の進捗状況、達成状況を進行管理し、確認の上、業務を進める。
2．プロジェクト会議の開催、必要に応じて学園関係者と協議する。
3．進学ガイダンスや高校訪問等に積極的に参加するとともに、学友自治会役員等との協議を行い、要望等を把握する。

Check 検証

1．一定の成果を上げた事項もあるが、十分に取り組まなかった事項や成果を上げていない事項がある。→　自己評価「Ｃ」
2．プロジェクト会議の開催は１回のみ。ビジネス医療秘書コースの実践型教育プログラムは原案が提示されたが、幼児教育学科の長期履修制度は次年度に持ち越しとなった。
→　自己評価「Ｂ」
3．学生募集活動はコロナ禍にあって可能な範囲で努力した。入学予定者数は前年度比＋10名となった。学友自治会役員との協議は十分にはできなかった。→　自己評価「Ｂ」

Act 改善

1．学長運営方針の実現
年度末のみならず、年度途中にもチェックを行うようにする。
2．本学の課題解決・特色化推進
大きな課題は、耐震化・バリアフリー化、男女共学化等である。学園本部との協議を深めていく。
3．定員充足率・学生満足度の向上
・生活創造学科の魅力向上と周知
・学友自治会役員との協議、学生の要望に応える短期大学を目指す

令和２年度　「栄養士コース」年次報告書

区分：　学科コース　・委員会等　・事務局等　・教職員個人　・その他（　　）

氏名：太田　美代（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　コース職員が協働し、４項目の努力目標にチームとして取り組む態勢をつくる。
２．「長崎食育学」、卒業研究を核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。
３．専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験のＡ認定６０％以上を目指す。
４．学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度９０％（肯定的な評価の合計）を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　定期的にコース会議を行い、報告・連絡・相談を密にして課題を共有し、協力して課題解決にあたる。
２．「長崎食育学」と卒業研究を連動し、「卓袱料理試食会」をはじめとして学生の主体的な活動を促し、活動の様子や成果を積極的に情報発信する。
３．日頃の授業で栄養士実力認定試験を意識させ学習習慣を身につけさせるとともに、２年次後期に「栄養士スキルアップ特講」を開催する。
４．一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　コース会議は週一回定期的に開催。意思の疎通を図って学務を遂行し、課題解決に当たることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　「卓袱料理試食会」では、２年生が高い意識を持って取り組むことができた（意欲度・連帯感・達成感ともに肯定的評価が１００％）。また、卒業研究の一環として実施した公開講座では講話や料理の説明など学生の出番があり、主体的に活動することができた。
　今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、参加者を学内に限ったが、次年度は学外からも関係者をお招きして会の充実を図りたい。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　栄養士実力認定試験のＡ判定は 53.6%（28 名中 15 名）。目標の 60%にわずかに届かなかったが、得点は全国平均点 51.1 点を 1.8 ポイント上回ることができた。
　次年度の２年生は、ほとんどの学生が適性検査における基礎能力が３以下であるため、いかにして学力の向上を図るかが課題となる。可能な限り個別対応も行い、学生が自ら学ぶ姿勢をもつよう支援するとともに、学力向上対策として教育サポートシステムの構築を図りたい。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　卒業時アンケートでは、「本学に入学して学んだことをどう思うか」という質問に 89. 3%の学生が肯定的な評価を行っている。特に、「本学での学びが進路に役立つと思うか。」「将来に生きると思うか」という質問では、全ての学生が肯定的な回答を行った。
　次年度の２年生は、理系の科目の修得に苦慮している一方で、学生生活の中でイベント的な体験をする機会がほとんどなかったため、本学に対する愛校心が十分に育っていないように思われる。短大生活全般についてのアンケートで「やや不満」と回答した卒業生がのべ４名だったのに対し、新２年生はのべ６名の学生が「やや不満」１名の学生が「不満」と回答している。
　学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会として自己肯定感を高め、学習意欲を喚起する取組を実施したい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．定期的なコース会議の開催は継続して実施し、円滑な意思の疎通、協働体制の維持に努める。
２．「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は２年生から１年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして１・２年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。１年生はプレ・ゼミナールとして取り扱い、先輩から栄養士コースの伝統を引き継ぎ「長崎食育学」での学びを生かす場とする。
３．「栄養士スキルアップ特講」と並行して学力向上の強化策として学生による学習会を支援し、ＴＡ（ティーチングアシスタント）の活用を図る。

４．女子中高生を対象とした料理教室の情宣活動を充実させ、参加者を増やす。そこに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

令和２年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む態勢をつくる。
   ・選ばれる短大づくり　・満足度の高い短大づくり
   ・地域に愛され、地域の発展に貢献する短大づくり
   ・教職員が一丸となって挑戦する短大づくり
2. 「長崎食育学」、卒業研究を核として本学栄養士コースならではの特色ある教育活動に取り組む。
3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験のA認定60%以上を目指す。
4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的評価の合計)を目指す。

Do 実行

1. 定期的にコース会議を行い、報告・連絡・相談を密にして課題を共有し、協力して課題解決にあたる。
2. 「長崎食育学」と卒業研究を連動し、「卓袱料理試食会」をはじめとして学生の主体的な活動を促し、活動の様子や成果を積極的に情報発信する。
3. 日頃の授業で栄養士実力認定試験を意識させ学習習慣を身につけさせるとともに、2年次後期に「栄養士スキルアップ特講」を開催する。
4. 一人一人を大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図る。

Check 検証

1. 毎週コース会議をもち、意思の疎通を図って課題解決に当たることができた。
2. 「卓袱料理試食会」では、2年生が高い意識を持って取り組むことができた。また、卒業研究の一環として実施した公開講座では講話や料理の説明など学生の出番があり、主体的に活動することができた。
3. 栄養士実力認定試験のA判定は53.6%(28名中15名)。目標の60%にわずかに届かなかったが、得点は全国平均点51.1点を1.8ポイント上回ることができた。
4. 卒業時アンケートでは、「本学に入学して学んだことをどう思うか」という質問に89.3%の学生が肯定的な評価を行っている。特に、「本学での学びが進路に役立つと思うか。」「将来に生きると思うか」という質問では、全ての学生が肯定的な回答を行った。

Act 改善

1. 定期的なコース会議の開催は継続して実施する。
2. 「卓袱料理試食会」を年間二回実施し、一回目は2年生から1年生への伝承。二回目はお客様をお迎えして1・2年生が協力しておもてなしをし、学修の成果を発表する機会とする。1年生はプレ・ゼミナールとして取り扱い、先輩から栄養士コースの伝統を引き継ぎ「長崎食育学」での学びを生かす場とする。
3. 「栄養士スキルアップ特講」と並行して学力向上の強化策として学生による学習会を支援し、TA(ティーチングアシスタント)の活用を図る。
4. 女子中高生を対象とした料理教室の情宣活動を充実させ、参加者を増やす。そこに学生の活躍の場を作り、自らの成長を実感できる機会とする。

令和２年度　「ビジネス・医療秘書コース」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：濵口　なぎさ（コース長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）
２．学生が入学時に希望している資格・検定の取得の意欲を継続するための方策を立て、卒業時の満足度アップを図る（創造）
３．「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけるとともに、学生の実践力が向上するような指導を心掛ける。（実践）
４．ビジネス・医療秘書コースの特色化を図るため、クォーター制導入を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．チューターによる二者面談や、各教員の担当授業時に各学生の状況を確認する。月 2～3 回実施するコース会議にて情報共有を図り、課題を抱えた学生の早期発見とコース全体での課題解決を目指す。
２．卒業までに秘書検定２級と日商 PC 検定（文書作成）３級全員合格をコース目標として設定するとともに、２年間の理想的な検定受験スケジュールを検定用掲示板に掲示し、学生への意識づけを図る。
３．１年次のプレゼミナール、２年次のゼミナールにて、昨年度までの「地域交流・地域貢献」をさらに発展させた「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組む。
４．１単位を２か月で取得できるようなクォーター制導入が可能かカリキュラム編成を検討する。学生たちが２年前期までに卒業必修の科目の履修を終了し、２年後期は長期インターンシップ、長期留学、就職活動、アルバイトなどで学びの実践に専念し、社会にとって有用な人材の育成を目指す。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各学年で前期２回、後期２回のチューターによる二者面談を実施し学生の状況の把握に努めた。また、体調不良等で欠席した学生については教員・教務課間で情報共有を図った。後期試験後に単位履修が保留となった学生が出たが、兆候が全くなかったため、同様の事例を出さないためにどのような対応策があるか検討する必要がある。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍により秘書検定が実施されないなど、年度当初に予定していた受験スケジュールの修正が余儀なくされた年度ではあったが、19LA については秘書検定２級の取得率が 71.4%（前年度 46.2%）、日商 PC 検定（文書作成）３級の取得率が 67.9%（前年度 61.5%）と前年度を上回った。
３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
１年次のプレゼミナールでは、「長崎県内企業・事業所魅力発見事業」に取り組み、成果発表と報告書の発行を行うことができた。２年次のゼミナールでは、コロナ禍の影響を受けながらも可能な限り学外との交流に取り組み、新聞などのマスコミにも取り上げられ、一定の成果を出すことができた。
４．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
クォーター制ではなく「実践型教育プログラム」として、２年前期までに卒業に必要な単位の９割弱が取得できるようカリキュラムを編成し、２年後期を長期インターンシップ等、短大での１年半の学びの実践期間とする計画が立案できた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．合理的配慮が必要な学生、課題を抱えた学生に対し、コース全体で情報共有を密にして早期の問題発見を心がけ、きめ細やかに対応して卒業まで支援する。

２．学生の卒業時の満足度を向上させるために、特に①資格・検定取得の支援、②就職活動の支援、の２つの充実を図る。

３．コロナ禍に対応した「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組み、「実践型教育プログラム」の実現に向けた具体的な内容・評価方法等について検討を進める。

令和２年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 合理的配慮が必要な学生、勉学意欲が乏しい学生にコース全体できめ細やかに対応し、卒業まで支援する（尽心）
2. 学生が入学時に希望している資格・検定の取得の意欲を継続するための方策を立て、卒業時の満足度アップを図る（創造）
3. 「地域交流・地域貢献」を意識して学内外での活動に取り組むよう働きかけるとともに、学生の実践力が向上するような指導を心掛ける。（実践）
4. ビジネス・医療秘書コースの特色化を図るため、クォーター制導入を検討する。

Do 実行

1. チューターによる二者面談や、授業時に各学生の状況を確認する。月2～3回実施するコース会議にて情報共有を図り、課題を抱えた学生の早期発見とコース全体での課題解決を目指す。
2. 卒業までに秘書検定2級と日商PC検定（文書作成）3級全員合格をコース目標として設定するとともに、2年間の理想的な検定受験スケジュールを検定用掲示板に掲示し、学生への意識づけを図る。
3. 1年次のプレゼミナール、2年次のゼミナールにて、昨年度までの「地域交流・地域貢献」をさらに発展させた「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組む。
4. クォーター制導入が可能かカリキュラム編成を検討する。学生たちが2年前期までに卒業必修の科目の履修を終了し、2年後期は長期インターンシップ、長期留学、就職活動、アルバイトなどで学びの実践に専念し、社会にとって有用な人材の育成を目指す。

Act 改善

1. 合理的配慮が必要な学生、課題を抱えた学生に対し、コース全体で情報共有を密にして早期の問題発見を心がけ、きめ細やかに対応して卒業まで支援する。
2. 学生の卒業時の満足度を向上させるために、特に①資格・検定取得の支援、②就職活動の支援、の2つの充実を図る。
3. コロナ禍に対応した「コミュニティ・サービス・ラーニング」に取り組み、「実践型教育プログラム」の実現に向けた具体的な内容・評価方法等について検討を進める。

Check 検証

1. 各学年で前期2回、後期2回のチューターによる二者面談を実施し、体調不良等で欠席した学生については教員・教務課間で情報共有を図った。後期試験後に単位履修が保留となった学生が出たが、兆候が全くなかったため、同様の事例を出さないためにどのような対応策があるか検討する必要がある。
2. コロナ禍により年度当初に予定していた受験スケジュールの修正が余儀なくされた年度ではあったが、19LAについては秘書検定2級の取得率が71.4%（前年度46.2%）、日商PC検定（文書作成）3級の取得率が67.9%（前年度61.5%）と前年度を上回った。
3. 1年次のプレゼミナールで「長崎県内企業・事業所魅力発見事業」に取り組み、成果発表と報告書の発行を行うことができた。2年次のゼミナールは、コロナ禍の影響を受けながらも可能な限り学外との交流に取り組み、新聞などのマスコミにも取り上げられ、一定の成果を出すことができた。
4. 「実践型教育プログラム」として、2年前期までに卒業に必要な単位の9割弱が取得できるようカリキュラムを編成し、2年後期を長期インターンシップ等、短大での1年半の学びの実践期間とする計画が立案できた。

令和２年度　「幼児教育学科」年次報告書

区分：　学科コース　・委員会等　・事務局等　・教職員個人　・その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（学科長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　遠隔授業導入による教育方法の工夫及び教育効果の検討を行い、教育改善を図る。

２．　３年コース開設のためのカリキュラム検討・準備を行う。

３．３班分け授業を２班分け授業への変更を検討し、カリキュラムのスリム化を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　成績、授業評価アンケート等により対面授業と遠隔授業の差異を見出し、教育効果を検討する。

２．　学科長及び教務担当が中心となって方策の提案を行い学科会議ごとに意見を出し合う。意見をまとめたものを次回の学科会議で検討し、具体化する。

３．３班分け授業担当教員を中心に、班分け変更に係る障壁事項解決案を模索する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
１年後期末及び２年卒業時調査結果より、６項目の学習成果すべての項目でポイントが同じもしくは最大 0.3 高くなっていた。遠隔授業導入が学びの質を低下させることはなかったと考えられる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
検討を重ねることで、学外実習の実施時期、時間割、教員の多忙化等、さらに検討を進めるべき事項が多々見いだされ、先に進まない状態であった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
授業担当教員、教務課等の模索により、３班分けの音楽・体育関係の授業とマナー学が２班分け体制で授業可能となり、令和３年度から２班分けで授業を実施できるようになった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　対面授業と遠隔授業のそれぞれの良さを生かし、二元体制で学びの充実を図る。

２．　専門的な知識・技能を高めるゼミナールの在り方について模索する。

３．　基礎学力を高める授業について検討する。

４．３年コース開設のためのカリキュラム検討を進める。

令和２年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1．　オンライン授業導入による教育方法の工夫及び教育効果の検討を行い、教育改善を図る。

2．　3年コース開設のためのカリキュラム検討・準備を行う。

3．3班分け授業を2班分け授業への変更を検討し、カリキュラムのスリム化を図る。

Do 実行

1．成績、授業評価アンケート等により対面授業と遠隔授業の差異を見出し、教育効果を検討する。

2．　学科長及び教務担当が中心となって方策の提案を行い学科会議ごとに意見を出し合う。意見をまとめたものを次回の学科会議で検討し、具体化する。

3．3班分け授業担当教員を中心に、班分け変更に係る障壁事項解決案を模索する。

Act 改善

1．対面授業と遠隔授業のそれぞれの良さを生かし、二元体制で学びの充実を図る。

2．　専門的な知識・技能を高めるゼミナールの在り方について模索する。

3．　基礎学力を高める授業について検討する。

4．3年コース開設のためのカリキュラム検討を進める。

Check 検証

1．1年後期末及び2年卒業時調査結果より、6項目の学習成果すべての項目でポイントが同じもしくは最大0.3高くなっていた。遠隔授業導入が学びの質を低下させることはなかったと考えられる。

2．検討を重ねることで、学外実習の実施時期、時間割、教員の多忙化等、さらに検討を進めるべき事項が多々見いだされ、先に進まない状態であった。

3．授業担当教員、教務課等の模索により、3班分けの音楽・体育関係の授業とマナー学が2班分け体制で授業可能となり、令和3年度から2班分けで授業を実施できるようになった。

令和２年度　「学生部」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：織田　芳人（学生部長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生委員会と緊密に連携しながら円滑な運営に努める。

２．寮務委員会の一員として学科の他の寮務委員と緊密に連携しながら、寮務委員長に協力して円滑な運営に努める。

３．学科長・コース長と連携して、個々の学生の課題解決に取り組むとともに、学生委員会の協力の下に通学時のバスマナーの周知等に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生委員会に出席して、可能な範囲の限りで意見を述べ、円滑な運営に協力した。

２．寮務委員会に出席し、日々の寮務日誌のチェックも行った。短大寮生４名が就寝前に騒いだという事案があり、寮務委員長と緊密に連携して指導を行った。その後、特に大きな問題はなかった。

３．教務・IR 委員会に出席して可能な範囲で意見を述べた。幼児教育学科のカリキュラム変更、教員変更等の文科省への届に協力した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、委員会の時間の大半を弥生祭関連の議題に費やすことになり、学生委員長とは異なる意見を述べることもあったが、概ね円滑な運営に協力できた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　短大の寮生に関しては特に大きな問題もなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　教務・IR 委員会に出席し、円滑な運営に協力できた。幼児教育学科のカリキュラム変更、教員変更等の文部科学省への届に協力した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生委員会に出席して、可能な範囲の限りで意見を述べ、円滑な運営に協力する。

２．寮務委員長と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力する。

３．教務・IR 委員会に出席し、円滑な運営に努める。

。

令和２年度 学生部 年次報告

Plan 計画

１．学生委員会と緊密に連携しながら円滑な運営に努める。

２．寮務委員会の一員として学科の他の寮務委員と緊密に連携しながら、寮務委員長に協力して円滑な運営に努める。

３．教務・IR委員会の一員として教務・IR委員長に協力しながら、委員会の円滑な運営に努める。

Do 実行

１．学生委員会に出席して、可能な範囲の限りで意見を述べた。

２．寮務委員会に出席し、日々の寮務日誌のチェックも行った。短大寮生4名が就寝前に騒いだという事案に対して、寮務委員長と緊密に連携して指導を行った。その後、特に大きな問題はなかった。

３．教務・IR委員会出席して可能な範囲で意見を述べた。幼児教育学科のカリキュラム変更、教員変更等の文科省への届に協力した。

Check 検証

１．新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、委員会の時間の大半を弥生祭関連の議題に費やすことになり、学生委員長とは異なる意見を述べることもあったが、概ね円滑な運営に協力できた。

２．短大の寮生に関しては特に大きな問題もなかった。

３．教務・IR委員会に出席し、円滑な運営に協力できた。幼児教育学科のカリキュラム変更、教員変更等の文部科学省への届に協力した。

Act 改善

１．学生委員会に出席して、可能な範囲の限り控えて、学生委員会の円滑な運営に協力する。

２．寮務委員長と緊密に連携しながら、寮務の円滑な運営に協力する。

３．教務・IR委員会に出席し、円滑な運営に努める。

令和２年度　「図書館」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：森　弘行（図書館長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 図書館内サービスの改善、利用規定の見直し

2. 図書館ウェブサイトのコンテンツ整備

3. 図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. バッグ類の持ち込みを禁止しているので、筆記用具等の小物を入れられる透明バックの貸し出しサービス
   紙芝居、大型絵本の貸し出し
   飲料の持ち込み許可（実施済み）
   SARTRAS 届け出の調査検討
2. 図書館ブログの定期更新
   学生や紀要・図書委員による図書紹介
3. ライブラリーラバーズ
   マスコットキャラクター公募、グッズ制作
   学生による図書選定

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
   図書館利用規定の改訂によりサービス改善を行った。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響か、学生来館者は延べ 4,612 人（前年比 63%）、貸し出し冊数は 2,173（前年比 73%）であった。
   紙芝居、大型絵本の貸し出しについては実習の際活用している学生が見受けられた。
   SARTRAS の利用料については国による予算化が検討されている模様。
2. 自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
   月 1 回のペースで図書館ブログやサイネージを利用して新着図書の紹介や利用案内を発信した。
3. 自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
   ライブラリーラバーズのイベントをとしてクイズラリーを実施。
   マスコットキャラクターの公募には 7 人 10 点の応募があり、最優秀には 2S の学生の作品「ぶんこさん」が選ばれた。図書館入り口に掲示したりシールを作成したりした。
   学生による図書選定は春、秋の 2 回実施し、259 点の書籍を購入、学生のポップを入れたディスプレイを行った。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 九州地区や長崎県の図書館協議会の会議や研修会が新型コロナウイルス感染症の影響で中止や書面会議、オンラインと直接情報交換をする機会がなくなってしまった。他館のコロナウイルス対策も参考にし、安心して図書館を利用できる環境を整える。

2. 書庫狭隘化に伴う対策
   研究費枠蔵書、紀要・卒業研究報告書の保存冊数削減、学生による図書選定の見直し

3. ライブラリーラバーズ
   マスコットキャラクターの活用
   学生による図書選定

令和２年度 図書館 年次報告

Plan 計画

1. 図書館内サービスの改善、利用規定の見直し
2. 図書館ウェブサイトのコンテンツ整備
3. 図書館利用拡大のためのイベント開催（紀要・図書委員会と連携）

Do 実行

1. 筆記用具等の小物を入れ透明バックの貸し出し
   紙芝居、大型絵本の貸し出し
   飲料の持ち込み許可（実施済み）
   SARTRAS届け出の調査検討
2. 図書館ブログの定期更新
   学生や紀要・図書委員による図書紹介
3. 長崎県大学図書館協議会ライブラリーラバーズへの参加
   マスコットキャラクター公募、グッズ制作
   学生による図書選定

Check 検証

1. 図書館利用規定の改訂によりサービス改善を行った。
   新型コロナウイルス感染症の影響か、来館者のべ人数6233人、貸し出し冊数は2,815（2021.3.5時点）。
   紙芝居、大型絵本の貸し出しは実習で活用。
   SARTRASの利用料は国による予算化を検討。
2. 月1回のペースで図書館ブログやサイネージを利用し、新着図書の紹介や利用案内を発信。
3. ライブラリーラバーズのイベントをとしてクイズラリーを実施。
   マスコットキャラクターの公募に7人10点の応募あり。最優秀には2Sの学生の作品「ぶんこさん」を選出。図書館入り口への掲示、シールの作成などに活用。
   学生による図書選定は春、秋の2回実施し、259点の書籍を購入。学生のポップを入れたディスプレイを行った。

Act 改善

1. 九州地区や長崎県の図書館協議会の会議や研修会が新型コロナウイルス感染症の影響で中止や書面会議、オンラインと直接情報交換をする機会がなくなってしまった。他館のコロナウイルス対策も参考にし、安心して図書館を利用できる環境を整える。
2. 書庫狭隘化に伴う対策
   研究費枠蔵書、紀要・卒業研究報告書の保存冊数削減、学生による図書選定の見直し
3. ライブラリーラバーズ
   マスコットキャラクターの活用

令和２年度　「自己点検評価室」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の６つの評価項目について、改定案を作成する。

２．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進を目的として、評価基準のルーブリックを作成する。

３．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」の素案を作成する。

４．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システムの構成図の案を作成する。

５．今年度の本学全体の「年次報告書」を作成して、全教職員に配付する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の８つの評価項目について、改定案を作成した。

２．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成できなかった。

３．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成できなかった。

４．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成できなかった。

５．今年度の本学全体の「年次報告書」を作成して、全教職員に配付した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の８つの評価項目について改定案を作成したが、その妥当性については疑問が残り、他校の先行事例や文科省の動向を踏まえて、再度十分検討する必要があると思う。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・[Ｄ] 」
教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成できなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・[Ｄ] 」
学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成できなかった。

４．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・[Ｄ] 」
教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成できなかった。

５．自己評価「 [Ｓ]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
今年度の「年次報告書」を作成して全教職員に配付し、部署別・個人別活動、研究活動・研究状況を公表した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学習成果の８つの評価項目について、他校の先行事例や文科省の動向を踏まえて、再度十分検討したい。
２．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成したい。
３．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成したい。
４．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成したい。
５．次年度も継続して「年次報告書」を作成・配付し、改革・改善の根拠資料としての活用を促進したい。

令和２年度 自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1．各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の６つの評価項目について、改定案を作成する。
2．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進を目的として、評価基準のルーブリックを作成する。
3．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」の素案を作成する。
4．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システムの構成図の案を作成する。
5．今年度の本学全体の「年次報告書」を作成して、全教職員に配付する。

Do 実行

1．各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の８つの評価項目について、改定案を作成した。
2．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成できなかった。
3．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成できなかった。
4．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成できなかった。
5．今年度の本学全体の「年次報告書」を作成して、全教職員に配付した。

Check 検証

1．自己評価「 S・***A***・B・C・D 」
各学科・コースの３つのディプロマポリシーと学習成果の８つの評価項目について改定案を作成したが、その妥当性については疑問が残り、他校の先行事例や文科省の動向を踏まえて、再度十分検討する必要があると思う。
2．自己評価「 S・A・B・C・***D*** 」
教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成できなかった。
3．自己評価「 S・A・B・C・***D*** 」
学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成できなかった。
4．自己評価「 S・A・B・C・***D*** 」
教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成できなかった。
5．自己評価「 ***S***・A・B・C・D 」
今年度の「年次報告書」を作成して全教職員に配付し、部署別・個人別活動、研究活動・研究状況を公表した。

Act 改善

1．学習成果の８つの評価項目について、他校の先行事例や文科省の動向を踏まえて、再度十分検討したい。

2．教員間の成績評価の平準化と学生の学習意欲の促進のため、評価基準のルーブリックを作成したい。

3．学生個人の学習成果を可視化したディプロマサプリメント「学びのポートフォリオ」を作成したい。

4．教学マネジメント体制とエンロールメントマネジメント体制について、システム構成図を作成したい。

5．次年度も継続して「年次報告書」を作成・配付し、改革・改善の根拠資料としての活用を促進したい。

令和２年度　「入試広報室・入試委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（室長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．長崎女子高校との連携強化による、志願者数の積み上げを図る。

２．県内高校在籍者数（３年生）の減少に対し具体的対策を講ずる。

３．進学説明会への積極参加を維持し、対面接触した生徒の、一人でも多くの志願増を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「コロナ問題」により年度当初の連携行事が一部縮小されるなど、年度当初に大きな躓きを見たが、代替措置として急遽保護者対象の面談会を６月に開くなど、志願者確保に努めた。また本年度の連携事業推進に当たり、高大連携の連絡協議会を双方の関係者出席のもと開催した。なお本年度より進路指導部長が変更したので、本学生活創造学科の志願者増加を強く要請し理解を得た。

２．全体的に在籍生徒数の減少が見られるが、特に減少幅の大きな学校には慎重な対応を図るよう、本学担当者に依頼する。併せてこれらの学校には、在学生の協力を得、「在学生のメッセージ」を作成することで、在学生を巻き込んだ広報活動に取り組んだ。

３．３月から４ヵ月継続して、これらのイベントが中止された。短大の広報活動に最も重要な時期であったがために、その影響は想像以上に大きいことが予想された。急遽動画を活用した情報戦略に切り替え対応してきたが、イベント再開後は、エリア内の高校を中心に昨年度を上回る延べ 54 校に参加した。対面接触した生徒へのプレゼンは、これまで以上の魅力発信と信頼関係の構築に努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・(Ｃ)・Ｄ 」
昨年比+3 名の実績を残したものの、志願者 34 名は、学年在籍数から、決して満足のいく数値ではなかった。高大連携事業の有効性が問われる事態へと年々推移している。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
送付した多くの高校において、進路指導室掲示板への掲出がなされた。入学生のメッセージや先輩の姿を多くの高校生の目に留めたことは、どのようなパンフレットにも負けない広告効果を導いたものと思料する。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
依頼のあった高等学校の殆どに参加した。学校推薦型選抜出願者の内、50.0%が進学説明会への参加者であることは、一定の効果と評価できる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度は、過去最低の内部進学者数になることが懸念される。
もともと当該年度の在籍生徒数が極端に少ないうえに、本学志望者自体も例年より大きく減少させている。一人でも多くの学生確保に努めることは勿論であるが、寧ろ生徒数の増加した 2 年生への対応に傾注したい。

２．何れも継続実施を前提に、高校生の「入学したい」気持ちにより近づく取組みを研究したい。

３．蓄積されたデータの信ぴょう性に疑問はあるものの、説明会参加者の出願率が若干の減少を見た。何れにせよ、これの向上を図ることは必定である。

令和２年度 入試広報室・入試委員会 年次報告

Plan 計画

1、長崎女子高校との連携強化による、志願者数の積み上げを図る。
2、県内高校在籍者数（３年生）の減少に対し具体的対策を講ずる。
3、進学説明会への積極参加を維持し、対面接触した生徒の、一人でも多くの志願増を目指す。

Do 実行

1、本年度の連携事業推進に当たり、高大連携の連絡協議会を双方の関係者出席のもと開催した。
2、特に減少幅の大きな学校には、在学生の協力を得、「在学生のメッセージ」を配布した。
3、3月から4ヵ月継続して、これが中止されたので、急遽動画を活用した情報戦略に切り替え対応した。イベント再開後は、エリア内の高校を中心に昨年度を上回る延べ54校に参加した。対面接触した生徒へのプレゼンは、これまで以上の魅力発信と信頼関係の構築に努めた。

Check 検証

1、昨年比+3名の実績を残したものの、志願者34名は、学年在籍数から、決して満足のいく数値ではなかった。高大連携事業の有効性が問われる事態へと年々推移している。
2、送付した多くの高校において、進路指導室掲示板への掲出がなされた。入学生のメッセージや先輩の姿を多くの高校生の目に留めたことは、どのようなパンフレットにも負けない広告効果を導いたものと思料する。
3、依頼のあった高等学校の殆どに参加した。学校推薦型選抜出願者の内、50.0％が進学説明会への参加者であることは、一定の効果と評価できる。。

Act 改善

1、次年度は、過去最低の内部進学者数になることが懸念される。もともと当該年度の在籍生徒数が極端に少ないうえに、本学志望者自体も例年より大きく減少させている。一人でも多くの学生確保に努めることは勿論であるが、寧ろ生徒数の増加した2年生への対応に傾注したい。
2、何れも継続実施を前提に、高校生の「入学したい」気持ちにより近づく取組みを研究したい。
3、蓄積されたデータの信ぴょう性に疑問はあるものの、説明会参加者の出願率が若干の減少を見た。何れにせよ、これの向上を図ることは必定である。

令和２年度　「キャリア支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：原田　実輝（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　最終就職率 100%を目指す。

２．　平成 30 年度入学生（R2 年３月卒業者）を対象に就職先調査を実施する。

３．　キャリア支援体制の見直しを図り、学生の満足度の向上に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　各学科・コースの年間計画に基づき、効果的なガイダンスを検討し、学生の就職意識を高める支援を行う。就活に消極的な学生の支援体制を検討する。

２．　前回調査時の改善点を踏まえ、キャリア支援委員会の中でより良い方法を検討する。

３．全体的なガイダンスと個別支援のバランスを取りながら、キャリア支援担当者のみならず、学生に関わる教職員と情報を共有して多面的な支援を心掛ける。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１.自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
3 月 8 日現在の全体の内定率は 95.4%で、コロナ禍で大変な 1 年ではあったが前年同期と同率である。
引き続き未内定者 7 名の支援を行っていく。

２.自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
卒業生調査の回答率は 88.1%で、前回より 4.8 ポイント増加した。　このような調査を行っていることに対し概ね好評であったが、点数化する評価方法がわかりづらいとの指摘もあった。

３.自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍で休校やリモート授業が増え、学生と直接関わる時間が減り例年並みの十分な支援が行えたか疑問が残る点もあったが、就職支援に関する卒業生調査の結果では、全体の平均は昨年比より 0.4 ポイント増であった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次年度も引き続き就職率 100%を目指す。特にＬの学生が早い時期から活動するよう働きかけていく。

２．　就職が難しいであろうと思われる学生の情報を全体で共有し、早めに対策を立てて支援していく。

３．　適切なタイミングでの声掛け、励まし等の個別支援を強化し、学生の満足度の向上に努める。

令和２年度 キャリア支援 年次報告

Plan　計画

1　最終就職率100％を目指す。

2　平成30年度入学生（R2.3卒業）を対象に、就職先調査を行う。

3　キャリア支援体制の見直しを図り、学生の満足度の向上に努める。

Do　実行

1 ①各学科・コースの年間計画に基づき、効果的なガイダンスを検討し、学生の就職意識を高める支援を行う。
②就活に消極的な学生の支援体制を検討する。

2　前回調査時の改善点を踏まえ、より良い調査方法をキャリア支援委員会で検討し実行する。

3 キャリア担当者のみならず、他の教職員とも情報を共有して多面的な支援を心掛ける

Check　検証

1. 3月8日現在の全体の就職率は　**95.4％**と、前年同期と同率である。引き続き**未内定者7名**の支援を行っていく。
2. 平成30年度入学生156名に対し郵送による就職先調査を実施。
   実施期間　R2.10　　**回答率　88.1％**

3.コロナ禍で学外実習時期、就活時期がずれ込み一気に集中した為、十分な情報を共有する時間的余裕がなかった。しかしながら卒業生調査によると就職支援に関する**満足度平均は4.3で、昨年比0.4ポイント増**であった。

Act　改善

1. 次年度も引き続き就職率100％を目指す。特にLの学生が早い時期から活動するよう働きかけていく。

2. 就職が難しいと思われる学生の情報を全体で共有し、早めに対策を立て支援していく。

3. 適切なタイミングでの声掛け、励まし等の個別支援の強化

令和２年度　「ＦＤ・ＳＤ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：武藤　玲路（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．ＦＤ研修会で、コロナ禍での授業を可能とする「遠隔授業の進め方」について研修会を実施する。

２．ＦＤ研修会で、学習成果の「６項目」の評価項目とその到達目標について見直した改定案を作成する。

３．ＳＤ研修会で、学務システムの機能について「新機能の操作方法とその活用方法」を説明する。

４．ＳＤ研修会で、学生への対応力を向上させるための「学校カウンセリング」の研修会を実施する。

５．多くの教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して、短大教育の先行事例や動向について情報収集をする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．ＦＤ研修会で、コロナ禍の授業対応として、福井謙一郎氏による「遠隔授業の進め方」の事例紹介を行った。

２．ＦＤ研修会で、学習成果の評価項目を「８項目」に変更してその到達目標を定めた改定案を検討した。

３．ＳＤ研修会で、学務システムの「新機能の操作方法と活用方法」を説明するＰＣ技術講習会を実施した。

４．ＳＤ研修会で、学生対応力の向上として、福井謙一郎氏による「学校カウンセリングの心得」を説明した。

５．残念ながら多くの教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して情報収集をすることはできなかった。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
福井謙一郎氏による「遠隔授業の進め方」の研修を行った結果、多くの教員から高い有用性の評価を得た。

２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学習成果の評価項目を「８項目」に変更してその到達目標を定めた改定案を検討した。

３．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学務システムの「新機能の操作方法と活用方法」を説明するＰＣ技術講習会を実施した。

４．自己評価「 S・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
福井謙一郎氏による「学校カウンセリング」の研修を行った結果、多くの教職員から高い有用性の評価を得た。

５．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・D 」
Web を含む学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して短大教育や業務の知見を広めた教職員は数名しかいなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．次世代の社会で貢献できる人材育成を目的とした特色ある教育の教授法について勉強会を実施したい。
２．学習成果の評価基準（ルーブリック）、学びのポートフォリオ、教学マネジメント体制の検討をしたい。
３．学務システムのバージョンアップと新機能の操作方法・活用方法について演習形式の研修を実施したい。
４．教職員へのアンケートで学生対応力の研修に関するニーズが高いため同様の研修を定期的に実施したい。
５．教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して次世代の社会に対応できる教育力や業務力を習得して欲しい。

令和２年度 ＦＤ・ＳＤ委員会 年次報告

Plan 計画

1．ＦＤ研修会で、コロナ禍での授業を可能とする「遠隔授業の進め方」について研修会を実施する。
2．ＦＤ研修会で、学習成果の「６項目」の評価項目とその到達目標について見直した改定案を作成する。
3．ＳＤ研修会で、学務システムの機能について「新機能の操作方法とその活用方法」を説明する。
4．ＳＤ研修会で、学生への対応力を向上させるための「学校カウンセリング」の研修会を実施する。
5．多くの教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して、短大教育の先行事例や動向について情報収集をする。

Do 実行

1．ＦＤ研修会で、コロナ禍の授業対応として、福井謙一郎氏による「遠隔授業の進め方」の事例紹介を行った。
2．ＦＤ研修会で、学習成果の評価項目を「８項目」に変更してその到達目標を定めた改定案を検討した。
3．ＳＤ研修会で、学務システムの「新機能の操作方法と活用方法」を説明するＰＣ技術講習会を実施した。
4．ＳＤ研修会で、学生対応力の向上として、福井謙一郎氏による「学校カウンセリングの心得」を説明した。
5．残念ながら多くの教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して情報収集をすることはできなかった。

Act 改善

1．次世代の社会で貢献できる人材育成を目的とした特色ある教育の教授法について勉強会を実施したい。

2．学習成果の評価基準（ルーブリック）、学びのポートフォリオ、教学マネジメント体制の検討をしたい。

3．学務システムのバージョンアップと新機能の操作方法・活用方法について演習形式の研修を実施したい。

4．教職員へのアンケートで学生対応力の研修に関するニーズが高いため同様の研修を定期的に実施したい。

5．教職員が学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して次世代の社会に対応できる教育力や業務力を習得して欲しい。

Check 検証

1．自己評価「 ***S***・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
福井謙一郎氏による「遠隔授業の進め方」の研修を行った結果、多くの教員から高い有用性の評価を得た。
2．自己評価「 Ｓ・***A***・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学習成果の評価項目を「８項目」に変更してその到達目標を定めた改定案を検討した。
3．自己評価「 Ｓ・***A***・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学務システムの「新機能の操作方法と活用方法」を説明するＰＣ技術講習会を実施した。
4．自己評価「 ***S***・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
福井謙一郎氏による「学校カウンセリング」の研修を行った結果、多くの教職員から高い有用性の評価を得た。
5．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・***D*** 」
Webを含む学外のＦＤ・ＳＤ研修会に参加して短大教育や業務の知見を広めた教職員は数名しかいなかった。

令和２年度　「教務・ＩＲ委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：蛯原　正貴（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1.履修登録、授業評価アンケート及びシラバス等を含めた、学務システムに関する項目の見直しを行う。

2.履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

3.IR に関する環境整備推進及び、学修成果における 6 つの項目の見直しを行う。

4.長期履修制度に関する学則、規程等の整備を行う。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.各アンケートや履修が終了した後に状況確認を行い、学務システムの使用状況について検討する。特に、授業評価アンケートの文言については修正を行い、その結果を検証する。
2.各期における履修状況を確認し、基礎科目の必要性について検討する。
3.Wi-Fi 環境やソフトウェアのアップデートなど、IR に関する環境整備を行うとともに、他大学の取組等を参考にしながら、学修成果における 6 つの項目の見直しを図る。
4.各学科・コース及び各委員会との連携をとりながら、学則、規程等の整備を図る。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1.自己評価「S・A・Ⓑ・C・D 」

授業評価アンケートにおける質問項目の見直しを行ったが、見直しを行う時期が遅かったため、年度当初の確認を今後徹底する必要がある。学務システムの活用については問題なかったと思われる。

2.自己評価「S・A・B・Ⓒ・D 」

一部の基礎科目については履修者がほとんどいない授業もあるが、その必要性についてまでは十分に議論できていない。学生の学びの選択肢を狭めてしまわないよう注意しつつ、今後も検討が必要である。

3.自己評価「S・A・Ⓑ・C・D 」

Wi-Fi 環境については年々改善されてはいるが、場所によっては使用できない場所もあり、今後も整備を進める必要がある。また、学修成果の 6 項目に関しては、完全にとまではいかないものの見直しを進めることができた。

4.自己評価「S・Ⓐ・B・C・D 」

様々な規程及び細則の見直しに着手し、学内の現状に合った改訂を進めることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.学務システムの効果的な活用法について検討し、改善を図る。

2. 履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

3. IR に関する環境整備推進及び、アセスメントポリシーの見直しを行う。

4. 学内の状況に応じて学則、規程等の整備を行う。

令和２年度 教務・IR委員会 年次報告

Plan 計画

1.履修登録、授業評価アンケート及びシラバス等を含　めた、学務システムに関する項目の見直しを行う。

2.履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

3.IRに関する環境整備推進及び、学修成果における6つの項目の見直しを行う。

4.長期履修制度に関する学則、規程等の整備を行う。

Do 実行

1.各アンケートや履修が終了した後に状況確認を行い、学務システムの使用状況について検討する。特に、授業評価アンケートの文言については修正を行い、その結果を検証する。

2.各期における履修状況を確認し、基礎科目の必要性について検討する。

3.Wi-Fi環境やソフトウェアのアップデートなど、IRに関する環境整備を行うとともに、他大学の取組等を参考にしながら、学修成果における6つの項目の見直しを図る。

4.各学科・コース及び各委員会との連携をとりながら、学則、規程等の整備を図る。

Check 検証

1.授業評価アンケートにおける質問項目の見直しを行ったが、見直しを行う時期が遅かったため、年度当初の確認を今後徹底する必要がある。学務システムの活用については問題なかったと思われる。

2.一部の基礎科目については履修者がほとんどいない授業もあるが、その必要性についてまでは十分に議論できていない。学生の学びの選択肢を狭めてしまわないよう注意しつつ、今後も検討が必要である。

3.Wi-Fi環境については年々改善されてはいるが、場所によっては使用できない場所もあり、今後も整備を進める必要がある。また、学修成果の6項目に関しては、完全にとまではいかないものの見直しを進めることができた。

4.様々な規程及び細則の見直しに着手し、学内の現状に合った改訂を進めることができた。

Act 改善

1.学務システムの効果的な活用法について検討し、改善を図る。

2.履修状況とシラバスを参考に、基礎科目の確認及び見直しを行う。

3.IRに関する環境整備推進及び、アセスメントポリシーの見直しを行う。

4.学内の状況に応じて学則、規程等の整備を行う。

令和２年度　「教職課程委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：本村　弥寿子（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．新カリキュラムによる教育体制での教育効果について、評価・改善を図る。

２．文部科学省及び厚生労働省からの通知内容に速やかに対応し、免許・資格取得のための学修が確実なものとなるよう努める。

３．教職課程に関する研修会や報告会に積極的に参加し、最新の情報収集に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　学生の日ごろの授業への取り組みや成績、授業評価アンケート等により各授業の評価を日常的に行い、改善に取り組む。

２．　各省庁のホームページや県からの通知に細やかに目を通し、内容を精査して関係教員で即時対応する。

３．　全国保育士養成協議会等が開催する研修会・説明会や保育学会などの関係学会に積極的に参加し、そこで得た情報を学科会議等で報告する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各授業担当教員が授業改善を図り、教育効果を高めるよう取り組んだ。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
関係教職員間で連携を図り、速やかに対応した。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
研修会等がオンラインで開催されたが、日程の調整がつかず参加ができなかったものが多かった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．令和３年度入学生より 保育士養成に係る新カリキュラムが適用されるため、さらに授業評価を進め改善を図る。

２．関係省庁からの事務連絡等を関係教職員で共有し、迅速な対応を図る。

３．関係省庁主催の説明会・研修会へ積極的に参加する。

令和２年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

１．新カリキュラムによる教育体制での教育効果について、評価・改善を図る。

２．文部科学省及び厚生労働省からの通知内容に速やかに対応し、免許・資格取得のための学修が確実なものとなるよう努める。

３．教職課程に関する研修会や報告会に積極的に参加し、最新の情報収集に努める。

Do 実行

１．学生の日ごろの授業への取り組みや成績、授業評価アンケート等により各授業の評価を日常的に行い、改善に取り組む。

２．各省庁のホームページや県からの通知に細やかに目を通し、内容を精査して関係教員で即時対応する。

３．保育学会などの関係学会や全国保育士養成協議会等が開催する研修会・説明会に積極的に参加し、そこで得た情報を学科会議等で報告する。

Check 検証

１．各授業担当教員が授業改善を図り、教育効果を高めるよう取り組んだ。

２．関係教職員間で連携を図り、速やかに対応した。

３．研修会等がオンラインで開催されたが、日程の調整がつかず参加ができなかったものが多かった

Act 改善

１、令和3年度入学生より 保育士養成に係る新カリキュラムが適用されるため、さらに授業評価を進め改善を図る。

２.関係省庁からの事務連絡等を関係教職員で共有し、迅速な対応を図る。

３、関係省庁主催の説明会・研修会へ積極的に参加する。

令和２年度　「特色化推進ＰＴ会議」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：玉島　健二（会議長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　２０１９年度に取り組んだ成果及び今後の課題をメンバー全員で洗い出し、今年度以降の特色化に関する方向性を分野・項目ごとに決定する。

２．　学生支援対策として、施設・設備、奨学金、通学関係の分野で新たな取組等を模索する。

３．　教務関係として、長期履修制度の次年度導入を目指して協議する。その際、時間割のスリム化、遠隔授業の推進、ビジネス医療秘書コースの１．５年制度についても併せて協議し、特色化の推進を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　新メンバーを含む全教職員に対し、新たなアンケートを実施するとともに、６月以降、月１回のペースで会議を開き、方向性を決定する。

２．　会議の中で「学生支援対策」としてテーマを設定して協議するとともに、学友自治会役員とのヒヤリングを行い、学生の要望を聴取し、協議の参考資料とする。

３．　会議の中で「教務関係」としてテーマを設定して協議する。長期履修制度と時間割のスリム化、遠隔授業の推進は表裏一体をなすものであり、セットとして協議を進めていく。併せて、学科・コースの協議を加速化させる。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　会議は１０月２２日に１回しか実施しなかった。また、メンバー９名に対し、男女共学化に関するアンケートを行い、集約したものを学園本部に提出した。今年度の成果としては、①幼児教育学科の次年度からの２班体制での授業実施が決定。そのためのピアノの授業体制も見直した。②ビジネス医療秘書コースのクォーター制（実践型教育プログラム）は原案が確定し、次年度入学生からの実施が決定。③大村地区からの入学予定者は今年度より４名増加。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・$\boxed{\text{D}}$ 」
　「学生支援対策」としての協議及び学友自治会役員からのヒヤリングは全くできていない。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　長期履修制度の検討は次年度に持ち越し。ビジネス医療秘書コースの実践型教育プログラムは原案が策定された。幼児教育学科の２班体制も次年度から実施する。ただし、時間割のスリム化には繋がっているかは実態を把握する必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　プロジェクト会議は次年度も継続し、校舎や施設設備等の提案を行う。

２．「学生支援対策」は次年度に持ち越して協議する。

３．幼児教育学科の長期履修制度、ビジネス医療秘書コースの実践型教育プログラムについては、内容を含めて形をつくる。

令和２年度 特色化推進PT会議　年次報告

Plan 計画

①2019年度の成果と課題を洗い出し、今年度以降の特色化に関する方向性を分野・項目毎に決定する。

②学生支援対策として、施設・設備、奨学金、通学関係の分野で新たな取組を模索する。

③教務関係として長期履修制度の次年度導入を目指して協議する。時間割のスリム化、遠隔授業の推進、Ｌの1.5年制についても併せて協議し、特色化の推進を図る。

Do 実行

①新メンバーを含む全教職員へのアンケート実施。6月以降に月1回のペースで会議を開催する。

②会議の中で「学生支援対策」に絞って協議する。また、学友自治会役員とのヒヤリングを行い、参考資料とする。

③会議の中で「教務関係」に絞って協議する。長期履修制度の協議の際、時間割のスリム化、遠隔授業の推進は表裏一体として協議する。

Check 検証

①会議は１０月に１回実施。アンケートは男女共学化に関するものをメンバー９名に実施し、集約結果を学園本部に提出。成果は幼児教育学科の次年度からの２班体制での授業実施、ビジネス医療秘書コースの実践型プログラムの原案策定、大村地区からの入学予定者４名増加

②全くできていない。

③長期履修制度は次年度に持ち越し、実践型教育プログラムは原案策定、２班体制での授業も次年度から実施。

※自己評価は①がＢ、②がＤ、③がＢ

Act 改善

①プロジェクト会議は次年度も継続し、校舎や施設設備等の提案を行う。

②「学生支援対策」は次年度に持ち越して協議を行う。

③幼児教育学科の長期履修制度、ビジネス医療秘書コースの実践型教育プログラムは内容を含めて形をつくる。

令和２年度　「募集・広報委員会」年次報告書

区分：　学科専攻　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：髙井　達司（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。

２．　SNS や映像型媒体を活用したメディア発信を積極的に発信する。

３．　予算管理の徹底と適正な資金投入を目指すことで、その有効活用を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１.「コロナ問題」により開催是非が当初の課題となったが、一部時間短縮を図りながら、ほぼ例年通りの完全対面実施を行うこととした。準備が大幅に遅れてしまったが、全ての機会を通して高校、生徒、保護者への参加要請を徹底した。実施に当たっては、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を各コースに要請するとともに、学生スタッフには、ホスピタリティーマインドの徹底を依頼する。またオープンキャンパス終了後、参加が出来なかった者を対象とした「個別進学相談会」を毎週土曜日に開催した。

２．教職員による Instagram 発信に加え、学生スタッフを巻き込んだ情報発信は順調に実施されている。また、本年度より YouTube 広告を導入したほか、各コースの紹介動画を作成したことで、所謂短大進学潜在層への直接的広告効果に期待した。またスマホ版公式ウェブサイトを制作したことに加え、現行サイトのリニューアルをも行い、学外者が閲覧しやすい環境を作ることとした。

３．昨年度末に発生した「コロナ問題」により予算執行対象のイベントが中止となり、これが継続された。このことにより本年度は執行率が下がらないよう、代替の対策を臨機応変に行った。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
実参加者数の減少は社会情勢より仕方のないことであるが、3 年生及び社会人の実数は概ね昨年並みの数値を残した。他学が大幅に実施規模を縮小したことで、県外進学への流出に歯止めがかかったものと推察される。参加者の満足度は、例年同様に高い数値を残した。「個別進学相談会」には、延べ 13 名が申込み、大半が出願に繋がった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
学生を巻き込んだ情報発信は、学科間の差異は見られるものの一定の実績を残した。映像による学校紹介は多くのコンテンツを揃え、場面に応じた情報発信が可能とされた。またこれらの技術に明るい教員の協力により、進学説明会のオンライン配信も可能となったことで、他学に引けを取らない体制となった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
動画配信による情報発信に予算資源を配分した。本学全体の紹介動画作成のほか、コース毎の動画作成を行い、大半のイベント時に活用した。またイベントのほか、進学説明会や個人相談会などあらゆる場面においてこれを視聴させることで、より直接的に高校生への情報発信に努めた。
最終的には、当初予定された予算執行が充分に実施できなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．コロナ禍による影響は今年も継続することが予想され、本年度同様に充分な感染対策を講じたうえで開催するものとする。「個別進学相談会」の歩留は高いので、更なる周知徹底を図り、オープンキャンパス同様の動員向上に尽くす。

２．SNS や映像型媒体を活用したメディア発信は、コロナ禍の推移により今暫くは大きな情報発信ツールとしての重要な役割を果たすものと思われる。差ほど経費を要さない、更に踏み込んだ情報発信ツールに挑戦したい。

３．コロナ禍の状況は次年度も継続することが予想される。動画作成やオンラインによる募集活動への資源投入は今後も避けられないので、資金の適正管理に努める。

令和２年度 募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1、オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させる。

2、 SNSや映像型媒体を活用したメディア発信を積極的に発信する。

3、 予算管理の徹底と適正な資金投入を目指すことで、その有効活用を図る。

Do 実行

1、開催の是非が当初課題となったが、ほぼ例年通りの対面実施を行うこととした。実施に当たっては、高校生の興味関心を惹くプログラム構成を要請するとともに、学生スタッフには、ホスピタリティーマインドの徹底を依頼する。またオープンキャンパス終了後、参加が出来なかった者を対象とした「個別進学相談会」を毎週土曜日に開催した。

2、Instagram発信に加えYouTube広告を導入した他、各コースの紹介動画を作成し、所謂短大進学潜在層への直接的広告効果に期待した。スマホ版公式ウェブサイト制作及び現行サイトのリニューアルを行った。

3、「コロナ問題」により予算執行率が下がらないよう、代替の対策を臨機応変に行った。

Check 検証

1、3年生及び社会人の実数は、概ね昨年並みの数値を残した。他学が大幅に規模を縮小したことで、県外進学への流出に歯止めがかかったものと推察される。参加者の満足度は、例年同様に高い数値を残した。「個別進学相談会」には、延べ13名が申込み、大半が出願に繋がった。

2、 映像による学校紹介は多くのコンテンツを揃え、場面に応じた情報発信が可能とされた。またこれらの技術に明るい教員の協力により、進学説明会のオンライン配信も可能となった。

3、 動画配信による情報発信に予算資源を配分した。

Act 改善

1、本年度同様に充分な感染対策を講じたうえで、開催するものとする。「個別進学相談会」の歩留は高いので、更なる周知徹底を図り、オープンキャンパス同様の動員向上に尽くす。

2、SNSや映像型媒体を活用したメディア発信は、コロナ禍の推移により、今暫くは大きな情報発信ツールとしての重要な役割を果たすものと思われる。差ほど経費を要さない、更に踏み込んだ情報発信ツールに挑戦したい。

3、コロナ禍の状況は次年度も継続することが予想される。動画作成やオンラインによる募集活動への資源投入は今後も避けられないので、資金の適正管理に努める。

令和２年度　「紀要・図書委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：中村　浩美（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．図書館の利用規則を少し緩和させて、気楽に利用する形態を取る。

２．図書館利用者は昨年度より若干増えたが、貸し出しは減少し、入館者数・貸し出し数共に増加する取り組みを行う。

３．紀要について、掲載内容・執筆要綱と電子公開など令和１年度と同様とする。発行のタイムスケジュールも令和１年度と同様とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．従来は筆記用具以外の持参物をロッカーに入れてから入館していたが、透明の小さなポーチを準備し、それに必需品を入れて、飲み物も持参しての入館の許可をする。(すでに取り組んでいる)

２．学生・教職員に図書館をより身近に気楽に利用してもらうための PR として、マスコットキャラクターのデザインとその名前を学生より応募して、応募作品をロビーや図書館など学内に展示する。最優秀作品のマスコット作製を行い、学生達の興味を惹きながら図書に対しての突破口とする。

３．教員へはメールにて投稿を呼びかけ、６月頃に教授会等で周知し、10 月頃投稿を希望する教員を調査し、12 月頃に業者へ見積もりを依頼する。１月連休明けに投稿１回目を締め切り、３月初旬に完成予定

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１.自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
参物についての工夫は学生にとって図書館を利用しやすくなっていた。
図書館入口や利用者の机などの消毒をして、コロナ感染対策を行えた。

２．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
マスコットキャラクターの募集には図書館によく通っているイラストに興味がある学生 10 人が応募し、最優秀作品には「ぶんこさん」と言うネーミングの作品となり掲示もできた。
しかし、コロナ渦中も含めて利用する学生は少なく、オンライン授業の影響か教員の利用者が増えた。

３．自己評価「Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」
例年通り１月中旬の原稿提出締め切りとし、雪の影響で納品が少し遅れたが問題はなかった。提出期限を遅延し、論文内容がなく用紙の枚数分のみを提出する教員がいた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度同様、コロナ感染対策を徹底して図書館を利用してもらう。
２．学生から募ったマスコットキャラクターをどのように活かすか。マスコットキャラクターをスタンプにする、ティッシュの裏面、付箋紙などに印刷したりなど、図書館への興味の一部として使用すし、利用者を増やす。
３．今年度同様、１月中旬に原稿提出日とし、納品までのスケジュールも同様とする。
提出期限の徹底を行う。

令和２年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1.図書館が準備した透明ポーチに、筆記用具以外の必需品の持ち込み、飲料水の持ち込みも許可する事とし、4月より実施している。

2.図書館を身近に感じて利用してもらう事や、本に対する抵抗感の突破口となるよう、学生にマスコットキャラクターの応募を行い、最優秀作品のマスコット作製を完成させる。

3.メールにて投稿を呼びかけ、6月頃に教授会で周知し,10月頃投稿希望教員の調査をし、12月頃に業者へ見積もりを依頼する。1月連休明けに投稿1回目を締め切り、3月初旬に完成予定。

Do 実行

1.図書館の利用規則を緩和させて、気楽に利用する形態を取る。

2.図書館の入館者数、貸し出し数を増加するための取り組みを行う。

3.紀要について、掲載内容・執筆要綱と電子公開など、令和1年度同様とする。発行タイムスケジュールも令和1年度同様とする。

Check 検証

1.コロナ感染対策を第一に図書館の利用者を制限する事もなかったが、決まった学生の利用が多かった。また、オンライン授業の取り組みが影響してか教職員の利用が多かった。

2.学生の入館者数は63%、教職員は104％であった。コロナ感染対策をしていても、図書館での学習や本を借りる事にも抵抗があった学生が多かった。

3.例年通りのスケジュールで進め、大きな問題はなく納品できた。しかし期限厳守の点で協力が見られない事もあった。　第46号紀要は共著も含めて21件であった。若干だが昨年度より少なかった。

Act 改善

1.飲料水の持ち込みは、コロナ渦でのマスク着用で口が乾きや易くなる事、飲料水を欲し易くなる事があるため、この試みは良く次年度も継続する。

2.マスコットキャラクターの完成品を、どのような形で浸透させて学生の周知度と、利用者を増加させられるかを検討して実践する。

3.納品までのスケジュールは例年通りとする。投稿数の増加に協力して頂く呼びかけをする。また、提出期限、執筆に注意・喚起を促す。

令和２年度　「学生委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：古賀　克彦（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。

2. 学友自治会活動に関する指導・援助は、教職員全員が学友自治会行事に関わることができるように配慮する。

3. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。

DO（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 入学記念パーティ、総会、スポーツフェスタ、弥生祭、学友自治会選挙等の学友自治会行事については、担当教員の指導の下、学生の主体性を尊重し実施する。またイベント実施時は新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防に配慮し出来るように指導を行う。

2. 教職員に対しては、学友自治会行事への参加依頼を積極的に行う。具体的には事務局掲示板・教授会・メール等で積極的に行い、多くの方に参加してもらう。

3. 学友自治会役員が行事を行う際には、担当教員と密に連絡を取り、協議の上行事を実施するように学生に指導を行う。また、毎週開催される学友自治会総務委員会に学生委員長も出席し、自治会役員と教員の信頼関係構築を目指す。

CHECK（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

1. 自己評価「 S・A・B・Ⓒ・D 」
今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、入学記念パーティ、スポーツフェスタ、卒業記念パーティが中止となり、弥生祭も当初の予定を変更し日程を２日から１日に変更し、参加者も学生と保護者のみで実施した。新型コロナウイルス感染症予防の為仕方ない点もあったが、スポーツフェスタ等、実施方法を工夫すれば実施できたと思われる行事もあった点が反省点である。

2. 自己評価「 S・A・B・Ⓒ・D 」
今年度は多くの学友自治会行事が実施できず、実施可能であった弥生祭に関しても教職員は自主参加になったため、全教職員が学友自治会活動に積極的に参加する状況とは言えなかった。

3. 自己評価「 S・A・Ⓑ・C・D 」
学生委員長として学友自治会役員との連絡や連携はスムーズに行えたと思われた。ただ、学生委員会レベルや各教職員レベルで学友自治会役員との連絡や各行事への参加がスムーズにできたと思えなかった。

ACT（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 来年度は学友自治会行事の実施時期や実施方法を見直し、新型コロナウイルス感染症が流行している状況下でも実施可能な計画を作成や指導を行い、学友自治会行事を可能な限り実施していく。

2. 学友自治会活動に関する指導・援助は、教職員全員が学友自治会行事に関わることができるように配慮する。

3. 学友自治会役員から各担当教職員への報告・連絡・相談を徹底させる。また、学生委員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。

4. 来年度、学友自治会が弥生祭等の学友自治会行事以外に、社会貢献活動も実施できるように指導を行う。

令和２年度 学生委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生生活全般並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し、支援活動を行なう。
2. 学友自治会活動に関する指導・援助は、教職員全員が学友自治会行事に関わることができるように配慮する。
3. 自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底させる。また、教員間のコミュニケーションも緊密にし、スムーズな活動ができるような協力体制を確立する。

Do 実行

1. 学友自治会行事については、担当教員の指導の下、学生の主体性を尊重し実施する。またイベント実施時は新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防に配慮し出来るように指導を行う。
2. 教職員に対しては、学友自治会行事への参加依頼を掲示板・教授会・メール等で積極的に行う。
3. 学友自治会役員が行事を行う際には、担当教員と密に連絡を取り、協議の上行事を実施するように学生に指導を行う。また、毎週開催される学友自治会総務委員会に学生委員長も出席する。

Check 検証

1. 今年度は新型の影響もあり、入学記念パーティ、スポフェス、卒業記念パーティが中止となり、弥生祭も縮小開催となった。スポフェス等、実施方法を工夫すれば実施できたと思われた。
2. 今年度は多くの学友自治会行事が実施できず、実施した弥生祭に関しても教職員は自主参加になったため、全教職員が学友自治会活動に積極的に参加する状況とは言えなかった。
3. 学生委員会レベルや各教職員レベルで学友自治会役員との連絡や各行事への参加がスムーズにできたと思えなかった。

Act 改善

1. 来年度は学友自治会行事の実施時期や実施方法を見直し、新型コロナが流行下でも実施可能な計画を作成や指導を行い、学友自治会行事を可能な限り実施していく。
2. 来年度は新型コロナ流行下でも実施可能な計画を作成し、全教職員の参加を目指す。
3. 学友自治会役員から各担当委員への報告・連絡・相談を徹底及び、学生委員会教職員と学友自治会役員とのコミュニケーションも緊密にし、スムーズな連携を目指す。
4. 来年度、学友自治会が社会貢献活動も実施できるように指導を行う。

令和２年度　「障がい学生支援委員会」年次報告書

区分：　学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（　　）

氏名：織田　芳人（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．合理的配慮申請書の提出後、配慮が必要な学生を選別して各学科コースへの情報提供を行う。

２．それぞれの配慮事項を把握して各学科コースでできる範囲の対応が行えているか、また他に気になる学生がいないか確認し、配慮事項の追加等を随時行う。

３．現行の「合理的配慮申請書」を「配慮事項申請書」へ名称変更し、内容ももう少しわかりやすくなるように検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．配慮が必要な学生に関して、各学科コースへ情報提供を行った。

２．各学科コースですでに連絡した配慮が必要な学生以外には、各学科・コースから連絡がなかった。

３．現行の「合理的配慮申請書」を「合理的配慮事項申請書」へ名称を変更し、記入漏れにならないような記入方法等、申請書の様式も変更した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
年度始めに各学科コースから申請のあった学生を整理し、情報提供した。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
各学科コースで、年度始めの申請者に止まり、特に大きな問題もなかった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
現行の「合理的配慮申請書」を「合理的配慮事項申請書」へ名称を変更した。さらに、学生本人や保護者にわかりやすく、記入漏れ等も生じにくいような様式に変更することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．年度始めに、各学科コースで回収した申請書を整理し分類して、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供する。

２．「合理的配慮事項申請書」の様式を変更したことによる不都合や不便等が生じたかどうかを確認し、もしあれば随時修正して、次年度に反映させる準備をしていく。

３．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、配慮の追加等を随時行う。

令和２年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

１．合理的配慮申請書の提出後、配慮が必要な学生を選別して各学科コースへの情報提供を行う。

２．それぞれの配慮事項を把握して各学科コースでできる範囲の対応が行えているか、また他に気になる学生がいないか確認し、配慮事項の追加等を随時行う。

３．現行の「合理的配慮申請書」を「配慮事項申請書」へ名称変更し、内容ももう少しわかりやすくなるように検討する。

Do 実行

１．配慮が必要な学生に関して、各学科コースへ情報提供を行った。

２．各学科コースですでに連絡した配慮が必要な学生以外には、学科コースから連絡がなかった。

３．現行の「合理的配慮申請書」を「配慮事項申請書」へ名称変更し、記入漏れにならないような記入方法等、進士署の様式も変更した。

Check 検証

１．年度始めに各学科コースから申請のあった学生を整理し、情報提供した。

２．各学科コースで、年度始めの申請者に止まり、特に大きな問題もなかった。

３．現行の「合理的配慮申請書」を「配慮事項申請書」へ名称変更した。さらに、学生本人や保護者がわかりやすく、記入漏れ等も生じにくいような様式に変更することができた。

Act 改善

１．年度始めに、各学科コースで回収した申請書を整理し分類して、合理的配慮が必要な学生に関する情報を提供する。

２．「合理的配慮事項申請書」の様式を変更したことによる不都合や不便等が生じたかどうかを確認し、もしあれば随時修正して次年度に反映させる準備をしていく。

３．各学科コースで可能な範囲の合理的配慮が行われているか、また、申請者以外に気になる学生がいないかを確認し、配慮の追加等を随時行う。

令和２年度　「学生相談室」年次報告書
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）
氏名：福井　謙一郎（室長）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
１．　各学科コースとの情報共有を充実させる ２．　学生相談室の広報を充実させる ３．学生に対する支援を充実させる
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。
１．　必要に応じ、各学科コース長と情報を共有している ２．　オリエンテーション時の説明内容の改善、ならびに学生相談室用の広報チラシを作成している（途中）。 ３．学生に対し、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 相談内容の状況に応じて各学科コースの教員と連絡をとり、学生本人の許諾を得たうえで情報の開示を行った。また、SD 研修会にて学生支援の方法に関する研修を行った。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生相談員と情報を共有し、相談室を広報するためのポスターを作製した。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学生の主体性を尊重した受容的アプローチを実践した。
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
１．来年度は相談室広報にさらに力を入れる。 ２．SD では学生支援に関する研修の要望が多かったため、事例を用いた検討会を開催する。

令和２年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

１． 各学科コースとの情報共有を充実させる

２． 学生相談室の広報を充実させる
３．学生にする支援を充実させる。

Do 実行

１．必要に応じ、各学科コース長と情報を共有している
２． オリエンテーション時の説明内容の改善、ならびに学生相談室用の広報チラシを作成している（途中）。
３．学生に対し、受容的・共感的態度で支援に臨んでいる

Check 検証

１．相談内容の状況に応じて各学科コースの教員と連絡をとり、学生本人の許諾を得たうえで情報の開示を行った。また、SD研修会にて学生支援の方法に関する研修を行った。

２．学生相談員と情報を共有し、相談室を広報するためのポスターを作製した。

３．学生の主体性を尊重した受容的アプローチを実践した。

Act 改善

１．来年度は相談室広報にさらに力を入れる。

２．SDでは学生支援に関する研修の要望が多かったため、事例を用いた検討会を開催する。

令和２年度　「地域連携・子育て支援センター」年次報告書

区分：　学科コース　・ 委員会等 ・ 事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：荒木　正平（センター長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめ、参加人数の増加や満足度向上につなげる。

２．地域連携活動やプラットフォーム事業については、学内全体として取組む意識の共有を図り、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。

３．ボランティア担当委員を配置し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、活動のさらなる充実を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．各種媒体を活用し効果的な広報活動を実施した。但し今年度は新型コロナ感染拡大の影響もあり、参加者数の確保が困難であった講座や開催自体が不可能となった講座もあった。

２．親育ち講座については、コロナ禍での困難な状況の中、web を活用するなどして講座を実施することができた。高大連携については、県内３高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との間で連携体制を整備し、実施までつなげることができた。
学内全体での取り組みの推進に向けた実践として、PC 上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備を進めることができた。情報共有のための定期的な会議の実施、進捗の確認と情報共有も併せて実施できた。

３．担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等についてもスムーズな実施が可能な体制は整えている。但し、今年度は新型コロナ感染拡大の影響もあり、ボランティア募集自体がほとんどない状況であった。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
新型コロナ禍の現状ではあるが、広報活動体制の見直し・強化を行った。また講座についても、予定の９講座のうち、実施可能な４講座については実施できた。飛沫感染リスクが高い残りの５講座等は（計画時点で新型コロナ対応を想定してなかったため）実施ができなかった。開催講座についての満足度は高かった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
上述の通り、地域連携活動やプラットフォーム事業については、親育ち講座についても高大連携事業についても、コロナ禍の困難な状況においては出来る限りの取組みができた。学内外の担当者（他大学含む）の協力と、関係者間での連携体制の強化に向けた継続的な取り組みが奏功したと考えている。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
上述の通りである。支援体制については整えることができたが、新型コロナ感染拡大の影響もあり、ボランティア募集自体が少ない状況ではあったが、愛宕小の見守り活動や社協大掃除等には参加できた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．公開講座については、引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行う。あわせて、新型コロナ禍の現状を踏まえた講座形態や時期（7～11 月ごろ？）についても検討を進めたい。（各学科コース２講座以上の予定）

２．引き続き学内外の取組推進体制の強化を図る。また新型コロナ禍の現状を踏まえてこれまで実施してきた結果得られた web 講義（オンライン開催）のノウハウ等も活かしつつ、各学科・コースの特色を形で提供できるような、魅力ある企画の立案・実施につなげたい。

３．　ここまでの取り組みを継続し、ボランティア参加を希望する学生が新型コロナ禍においても安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和２年度 地域連携・子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

１．公開講座については、地域ニーズの把握・精緻化をすすめ、参加人数の増加や満足度向上につなげる。

２．地域連携活動やプラットフォーム事業については、学内全体として取組む意識の共有を図り、各学科・コースの特色を生かした事業の実施のみならず、実施した活動についての情報共有・公開体制の整備を進める。

３．ボランティア担当委員を配置し、スムーズな受付・活動支援の実施が可能な体制を定着させ、活動のさらなる充実を図る。

Do 実行

１．各種媒体を活用し効果的な広報活動を実施した。但し今年度は新型コロナ感染拡大の影響もあり、参加者数の確保が困難であった講座や開催自体が不可能となった講座もあった。

２．親育ち講座については、コロナ禍での困難な状況の中、webを活用するなどして講座を実施することができた。高大連携については、県内３高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との間で連携体制を整備し、実施までつなげることができた。
学内全体での取り組みの推進に向けた実践として、PC上の学内ネットワークを活用した情報共有体制の整備を進めることができた。情報共有のための定期的な会議の実施、進捗の確認と情報共有も併せて実施できた。

３．担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等についてもスムーズな実施が可能な体制は整えている。但し、今年度は新型コロナ感染拡大の影響で、募集自体がほとんどない状況であった。

Check 検証

１．新型コロナ禍の現状ではあるが、広報活動体制の見直し・強化を行った。また講座についても、予定の9講座のうち、実施可能な4講座については実施できた。飛沫感染リスクが高い残りの5講座等は（計画時点で新型コロナ対応を想定してなかったため）実施ができなかった。開催講座についての満足度は高かった。

２．上述の通り、地域連携活動やプラットフォーム事業については、親育ち講座についても高大連携事業についても、コロナ禍の困難な状況においては出来る限りの取組みができた。学内外の担当者（他大学含む）の協力と、関係者間での連携体制の強化に向けた継続的な取組みが奏功したといえる。

３．上述の通りである。支援体制については整えることができたが、新型コロナ感染拡大の影響もあり、ボランティア募集自体が少ない状況ではあったが、愛宕小の見守り活動や社協大掃除等には参加できた。

Act 改善

１．公開講座については、引き続き地域ニーズの把握・精緻化を行う。あわせて、新型コロナ禍の現状を踏まえた講座形態や時期（7～11月ごろ？）についても検討を進めたい。（各学科コース2講座以上の予定）

２．引き続き学内外の取組推進体制の強化を図る。また新型コロナ禍の現状を踏まえてこれまで実施してきた結果得られたweb講義（オンライン開催）のノウハウ等も活かしつつ、各学科・コースの特色を形で提供できるような、魅力ある企画の立案・実施につなげたい。

３．ここまでの取り組みを継続し、ボランティア参加を希望する学生が新型コロナ禍においても安心して参加できるような支援体制の整備・連携強化を進めたい。

令和２年度　「寮務委員会」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：桑原　倫子（委員長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．寮務委員及び関係教職員の情報共有による支援体制を充実させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。

２．高大連携による寮運営の充実を図る。

３．寮内での省エネルギー推進に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．問題のケースに応じ具体的に相談し、中心となって解決に導く担当寮務委員を決め、適切に対応をする。

２．長崎女子高の林田教頭と三根事務長に可能な限り寮務委員会に出席してもらい、生徒の生活の様子を把握する機会を設ける。引き続き、寮務日誌を毎日 FAX で女子高に送り、情報を共有する。

３．寮のみの電気使用量の値に注目し、寮生全員に省エネへの協力を促す。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
学生寮や学生たちに大きな問題はなかったが、寮務委員長の職務に慣れておらず、他の寮務委員との連携や情報共有等が十分であったとは言えない。しかし、寮生間の些細な問題についてはチューターや寮務委員、寮務委員長とで連絡を取り合い、直ぐに対応ができていたと思われる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
長崎女子高からは、今年度の寮務委員会４回の内、３回の出席があった。全会に出席してもらうには、寮務委員会開催の日程調整をより早期に行う必要がある。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
昨年度の年間電気料金と比較すると、今年度は－111,429 円であった。省エネ活動の効果は見られるものの、寮監長からは『洗面所やトイレの電気が夜中もつけっ放しであった』などの意見もあったため、まだまだ電気料金を削減できる余地は十分にあると思われる。省エネ推進員の寮生を中心に、次年度も地道に活動を続けていく必要がある。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．問題が起こっても直ぐに対応ができるよう、寮務委員やチューターとの連携や情報共有を密に行う。

２．長崎女子高の先生が寮務委員会に出席できるよう、日程調整等を計画的に行い、高校生の寮内での様子を把握してもらう。寮務日誌も毎日 FAX で女子高に送り、情報を共有する。

３．省エネ推進員の寮生を中心に省エネ活動を行い、電気のつけっ放しを減らして電気料金の削減に努める。

令和２年度 寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1．寮務委員及び関係教職員の情報共有による支援体制を充実させ、安全・快適な寮生活の提供を図る。

2．高大連携による寮運営の充実を図る。

3．寮内での省エネルギー推進に努める。

Do 実行

1．問題のケースに応じ具体的に相談し、中心となって解決に導く担当寮務委員を決め、適切に対応をする。
2．長崎女子高の林田教頭と三根事務長に可能な限り寮務委員会に出席してもらい、生徒の生活の様子を把握する機会を設ける。引き続き、寮務日誌を毎日FAXで女子高に送り、情報を共有する。
3．寮のみの電気使用量の値に注目し、寮生全員に省エネへの協力を促す。

Check 検証

1．学生寮や学生たちに大きな問題はなかったが、他の寮務委員との連携や情報共有等が十分であったとは言えない。しかし、寮生間の些細な問題についてはチューターや寮務委員、寮務委員長とで連絡を取り合い、直ぐに対応ができていた。
2．長崎女子高からは、今年度の寮務委員会4回の内、3回の出席があった。全会に出席してもらうには、寮務委員会開催の日程調整をより早期に行う必要がある。
3．昨年度の年間電気料金と比較すると、今年度は－111,429円であった。省エネ活動の効果は見られるものの、まだまだ電気料金を削減できる余地は十分にあると思われる。省エネ推進員の寮生を中心に、次年度も地道に活動を続けていく必要がある。

Act 改善

1．問題が起こっても直ぐに対応ができるよう、寮務委員やチューターとの連携や情報共有を密に行う。

2．長崎女子高の先生が寮務委員会に出席できるよう、日程調整等を計画的に行い、高校生の寮内での様子を把握してもらう。寮務日誌も毎日FAXで女子高に送り、情報を共有する。

3．省エネ推進員の寮生を中心に省エネ活動を行い、電気のつけっ放しを減らして電気料金の削減に努める。

令和２年度　「事務局」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）

氏名：前田　功（事務局長）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　円滑な事務局運営のために各種取り組みを行っていく。特に今後長く問題が続いていくと思われる、新型コロナ感染症対策として「3密」を避ける取組を強化していく。

２．　教務システムの完成が目標であるが、日々使い勝手がいいシステムとするために工夫を行っていく。

３．　ＳＤ研修会の計画的な実施と朝礼及び週計画を結び付けた運営を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　日々の感染症対策として手指の消毒、体温チェックなどの徹底を図るとともに、「3密」を避けるための時宜に応じた指導を行っていく。

２．　システム開発先と連携を強化し、システムの完成を目指すための工夫を行っていく。開発先とは情報交換を欠かさず、常にシステムを更新していくこととする。

３．課題解決に向けたＳＤ研修会を実施するために、朝礼での情報交換を強化し、個々の事務職員のレベルアップにつなげていく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　各職員の仕事内容の精査を行うために、業務の洗い出しを行うことから始めた。業務内容を知ることで担当者がどういうところで停滞しているか理解できる。コロナ感染症対策としては、マスクの購入配付や消毒液及び容器の配付など、やれることやらねばならないことについては十分やり通すことができたのではないか。

２．自己評価「 Ｓ・A・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　システム先との連携は担当を通じて行い、十分とは言えないながらもある程度は効果が上がったのではないかと考えている。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・C・Ｄ 」
　朝礼における情報交換は積極的に行ったが、一段進んで各担当からの現状の報告、進捗状況の共有というところまでには至っていない。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度はそれぞれの担当する業務を変更するということよりも、いくつかの業務を複数で担当し、効率よく遂行していくという目的の元、兼務者を増やしていく。業務分担を固定化せずにできるだけ複数の視点から見ていくこととする。

２．システム先との連携は時間をかけながらじっくり行っていくこととする。徐々にではあるが連携の輪を広げてゆく。

３．　SD 研修会を頻繁に実施依していくことを目標として、局員たちがお互いの仕事内容に理解をするために、朝礼の時間を使って現状報告等を行うよう努めていく。

令和２年度 事務局 年次報告

Plan 計画

・円滑な事務局運営のために各種取り組みを行っていく。特に今後長く問題が続いていくと思われる、新型コロナ感染症対策として「3密」を避ける取組を強化していく。
・教務システムの完成が目標であるが、日々使い勝手のいいシステムとするために工夫をしていく。
・ＳＤ研修会の計画的な実施と朝礼及び週計画を結び付けた事務局運営を目指す。

Do 実行

・日々の感染症対策として手指の消毒、体温チェックなどの徹底を図るとともに、「3密」を避けるための時宜に応じた指導を行っていく。
・システム開発先と連携を強化し、システムの完成を目指すために工夫を行っていく。開発先とは情報交換を欠かさず、常にシステムを更新していく。
・課題解決に向けたＳＤ研修会を実施するために、朝礼での情報交換を強化し、個々の事務職員のレベルアップにつなげていく。

Check 検証

・各職員の仕事内容の精査を行うために業務の洗い出しを行うことから始めた。各自が他の局員の仕事内容を知ることからお互いの理解は深まり補完しあうことができる。コロナ感染症対策は、マスクの購入配付や消毒液・容器の購入配付などやれることやらねばならないことについて、できる範囲で実行できた。
・システム先との連携は徐々にではあるが担当者を通じてじっくり行うことができた。
・朝礼における情報交換は積極的に行ったが、一段進んで各担当からの現状報告や、進捗状況の共有などは思うように進まなかった。

Act 改善

・次年度はそれぞれの担当業務を変えるというよりも、複数で一つの仕事を担当することで、効率よく業務を遂行できるように努めていきたい。
・システム先との連携は、時間をかけながらじっくり行っていくこととする。徐々に連携の輪を広げていくことを目指す。
・朝礼における現状報告等を取り入れていく。局員たちがお互いの仕事内容に理解を示すように、朝礼の時間を使って現状報告等を行うよう努めていく。

令和２年度

「個人別報告書」

令和２年度　「玉島　健二」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：大学運営	職名：学長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．「現代社会と女性」及び「生涯学習論」の授業を通して、学生の基礎学力や社会人基礎力の向上を目指すともに、授業評価アンケート結果において「全体的な満足度」４．３以上を目指す。

２．令和２年度の学長運営方針における４つの努力目標について、実現に向けた取組を推進する。特に、学科・コースの特色化、魅力化推進に向け、学科長・コース長と連携して積極的に取り組む。

３．学生募集に繋がる取組（ガイダンス・高校訪問等）に積極的に関わり、令和３年度入学生１８０名の確保を目指す。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業運営

「現代社会と女性」においては、学科・コース担当教員との協議や共通理解を図りながら、教材の準備・運営等を実施する。「生涯学習論」においては、可能な限り「長崎」をテーマにした授業を展開する。両授業ともに各回のねらいや目的を明確に学生に示すとともに、可能な限り学生参加型の授業を心掛ける。

２．学長運営方針の４項目の努力目標の実現

①運営委員会、入試委員会及び教授会における協議の徹底・情報の共有により、その実現を図る。

②各委員長及び学科長・コース長に対し、会議開催後の報告を求め、学長の指示を徹底させる。

③学科・コースに対し、特色化や魅力化について協議させ、場合によっては学長も検討に加わる。

３．学生募集

①進路ガイダンス、高校訪問、高校からの本学見学会等に積極的に関わり、本学の良さ・強み等をアピールする。

②募集・広報委員会に参加し、可能な限りの助言を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

授業評価アンケートにおける「全体的な満足度」は、生涯学習論が４．１、現代社会と女性（２年）が４．４、現代社会と女性（１年）が４．３という結果であった。現代社会と女性の２年生が評価が高かったのは１５回を通して役に立つ講話等を行ったためと思われる。生涯学習論が４．３に届かなかった理由としては幼児教育学科の受講者が２名で平均３．５が影響したものと思われる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

運営委員会の開催により、学内での統一した考えにより対応できたと思うが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策で時間を取られた。学科・コースの特色化については、ビジネス医療秘書コースにおける実践型教育プログラムの原案が提示されたことは前進であった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

新型コロナウイルス感染症の影響で積極的な募集活動が展開できなかったことは残念であるが、学生募集については、最終的に前年比＋１０名の１４９名を確保できた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．授業運営

「現代社会と女性」は今年度と大きく変更はしない。「生涯学習論」は「長崎観光入門」に衣替えして観光に特化した授業を行う。さらに、「長崎観光概論」ではゼミナールとタイアップした授業を試みる予定。

２．学長運営方針の４項目の努力目標の実現

各学科長・コース長及び委員長に目標をしっかり立てさせ、学長運営方針の実現に取り組ませる。そのために、各長とのコミュニケーションを取ることを心掛ける。

３．学生募集

本学の強みや特色をパンフレットやチラシに折り込み、高校生に訴えられるように取り組む。

令和２年度　「森　弘行」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1.　学生データベースの機能強化と情報分析
　　学外との研究分担

2.　学内情報システムの環境整備

3.　授業での動画活用

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1.　処理能力改善のため現在、仮想計算機（VM）で稼働しているシステムを実環境へ移行したいと考えているが、廃物利用のサーバー機では新システムが古いデバイスを認識せず難航中。
　　学外との研究分担におけるシミュレーションプログラム開発。
2.　Windows Update サーバー導入によるネットワーク負荷の軽減。
　　インターネット回線高速化（5 月に変更済み）。
　　教職員用無線 LAN アクセスポイントを学生用に切り替え学生用無線 LAN エリアの拡大
　　短大 Web サイトのセキュリティ強化（https 化）の提案（要予算）。
3.　ウェブサイトで公開されている教材動画の視聴を課題にすることで、自宅学習の機会を増やす。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学生データベースの機能強化については、サーバー機への移行はあきらめ、不要 PC に CentOS を導入することでシステム移行を行った。VM のオーバーヘッドがなくなり、処理能力は向上したもののバックアップ機能がなくなり、代替機能を検討中。
　学外との研究分担におけるシミュレーションプログラム開発は、SAS University Edition を導入（紀要で報告）しすることでほぼ要求に応じることができた。また、マクロ機能を利用することで条件を変えたシミュレーションも簡略化できた。

２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　インターネット回線の高速化、Windows Update サーバーの導入により情報演習室の PC 保守に要する時間を短縮することができた。
　無線 LAN エリアの拡大については、141、142、133 教室の無線 LAN 機器を学生用に切り替えられる機能が無く断念。私物中古機材を提供することで、情報演習室 1・2、221 教室、図書館、2 号館ロビーでの学生用無線 LAN の電波状況を改善できた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　教材動画の活用については、当初想定していた情報リテラシーの遠隔授業の機会があまりなかったが、介護・救急法の日赤講習会がコロナウイルス感染症の拡大により中止となったことで、代替として日赤が公開している救急法の Youtube 動画を活用した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.　学生データベースの機能強化と情報分析（継続）
　　学外との研究分担（COVID-19 関連）

2.　学内ネットワークのセキュリティ対策

3.　教材動画の利用

令和２年度　「織田　芳人」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．動画製作及び受講生用配付資料の作成等 ICT 活用を検討して、遠隔授業等の可能性を模索する。

２．障がい学生支援委員会の業務を引き継ぎ、必要な改善策を進める。

３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業を実践して、二つの学修間の関連性を統計的手法等によって数値化することを試みる。
②すでに得られている「頻出 150 語」と「共起ネットワーク」を組み合わせて、漢字力向上のための学修資料の作成を試み、次年度での「漢字書き取り」等の時間を検討する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　前期授業の「生活とアート」で第 3 回～第 15 回を YouTube による遠隔授業で実施した。また、前期授業の「保育方法論」においても分担部分を YouTube による方法で実施した。さらに、後期授業の「情報科学」で導入部分と振り返りの一部で動画を活用した。

２．障がい学生支援委員会の業務を引き継ぎ、特に合理的配慮事項申請書の様式を見直した。

３．①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業を実践した。
②本学幼児教育学科学生の実習日誌の一部を計量テキスト分析ソフトで分析した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
前期授業の「生活とアート」で第 3 回～第 15 回を YouTube による遠隔授業に切り替えて実施することができた。その経験をもとに、後期授業の「情報科学」で導入部分と振り返りの一部で動画を活用したことによって、授業内容を整理し増やすことができた。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
合理的配慮事項申請書の様式を見直すことができたので、従来の様式よりも記述しやすく、また、提出された申請書も整理しやすくなったと思われる。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業を実践して、アンケート調査を行うことができたが、調査結果をまとめるまでに至らなかった。
②本学幼児教育学科学生の実習日誌の一部を計量テキスト分析ソフトで分析し、分析結果を令和 2 年度の本学紀要に発表することができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．動画製作及び受講生用配付資料の作成等、ICT 活用によって、オンラインと対面を組み合わせたブレンド型授業の可能性を模索する。

２．障がい学生支援委員会の業務を引き続き継ぎ進める。

３．
①知育玩具による体験学修とヴィジュアル・プログラミング学修を組み合わせた授業のアンケート調査ををまとめて、紀要に発表する。
②幼児教育学科学生の漢字力向上に資する学修資料の作成を試みる。

令和２年度　「中澤　伸元」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

学生のやる気を引き出すコーチング法の研究・実践をさらに深化させる。　今年度は特に下記の三位一体を重点に行う。

1.　理想意識イメージ作り

２　イメージにつなげる言葉による表現

３．言葉に合った身体表現の一致

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　学生にアンケートを行い、そこから自分の判断や行動の基準となる自分の価値観、ありたい姿のイメージを作りあげる。

２．　見えない意識と言葉が一体化され、感情が溢れてくるよう、言葉表現の中に意識イメージが宿っているか、一人ひとり、繰り返し訓練していく。

３．毎回心の状態と体の状態を記録して数値化し、なぜ伝わるのか？　なぜ伝わらないのか？　意見交換を繰り返しながら無限の可能性を引き出していく。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　学生一人一人を満点として、それぞれが理想の姿をイメージさせ、臨場感をかんじるまで導いてやることに成功した。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　人間は言葉によって生きている。仮想世界に臨場感を感じる訓練をした。表現したい人格に変身する訓練等、繰り返しの訓練に成功した。

３．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　今の心の状態を表現したい世界に移行し、なぜ伝わらないかをそれぞれが課題として考え、言葉に合った身体表現の繰り返しの訓練に成功した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　自分が満点からのスタートだということのセルフイメージの徹底。

２．　仮想世界に臨場感リアリティを感じることの徹底。
　変性意識状態にする。

３．　過去意識を捨て、無限の可能性のある未来意識を常に「今」であるとして行動することの訓練。
今のコンフォートゾーンを次々に次のコンフォートゾーンに移行していく。

令和２年度　「松尾　公則」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授　　特専教授　　松尾公則

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　１．「ヒトと生物」「栄養士の科学」は、現場で役立つ内容とし、興味関心を持たせる。

２．　卒研では環境教育が実践できるような人材の育成を目指す。

３．中庭庭園の池の管理を行い多様性を高めていく。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．毎時間、講義内容に関する資料やプリントを準備し、90 分間学生が集中できるようにした。

２．毎時間、自然と触れ合う内容を準備し実践した。野外活動や教育活動を重視した。

３．池の動物観察を実施したが、後半、アメリカザリガニの侵入により池の生態系が崩壊した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　栄養士の科学では、基礎的な化学の力を十分に確立させることができたと思うが、一部、基礎学力のない学生においては難しい面もあった。
　ヒトと生物では、現場で役立つ内容を資料や標本をもとに十分に理解させることができたと思う。

２．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　子どもと自然環境の卒研学生として、自然の楽しさ、自然との遊び方など多くの自然体験を通して学ばせることができた。学生の興味関心も高く、積極的に学ぶ姿勢もあったので予定以上の成果を上げることができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　アメリカザリガニ撲滅作戦により多くの個体を捕獲し池の正常化に勤めたがうまくいかなかった。毎年、ヒキガエルが産卵し、多くの幼生が育つ池であったが、今年は、産卵はしたものの幼生は一匹も育たなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学力差が大きいため、基礎学力のない学生に対する指導を徹底していきたい。

２．来年度はゼミナール形式となり時間数が半減するが、今年度通りの内容を消化していきたい。

３．池の藻がアメリカザリガニによって全滅したため水を浄化できずに汚れている。昨年度同様、駆除に勤め、同時にごみの回収を行い、捨てられることのない池を維持していきたい。

令和２年度　「福井　昭史」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．保育者養成における音楽教育の課題とその解決のための指導方法を研究する。 ２．音楽の実技科目において、学生の技能に対応した指導の在り方、教材の開発を行う。 ３．各種楽曲の特質を明らかにし、音楽教育における教材性を究明する。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．保育者として身につけるべき音楽の能力を明らかにし、その育成のためのシステムを考察する。 ２．歌唱力とピアノ伴奏技能の向上を目指した、個に応じた指導方法とそれに適した教材の在り方を、教育実践を通して研究する。 ３．音楽の表現と鑑賞の活動において、教材として取り上げられる楽曲を選択しその特質を究明する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 保育者養成における音楽教育について、先行研究をもとにその現状と課題を分析した。その内容を論文として著述した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ピアノ実技の指導に関する研究を行った。とくに初心者用の教材開発に努め、それらを基にしたカリキュラム改善の試案を作成した。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各種学校での音楽鑑賞教育に用いられる教材楽曲の研究を行った。成果は季刊誌「音楽鑑賞教育」に掲載されている。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．本年度の研究により明らかになった保育者養成における音楽教育の課題をもとに、教育実践を通してその改善に努める。 ２．本年度の研究を継続させ、ピアノ実技など音楽技能の育成に資する教育方法の開発に努める。とくにピアノ初心者のためのカリキュラム開発を行う。 ３，引き続き、音楽科教育のための教材の研究と開発に努める。	

令和２年度　「武藤　玲路」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業について

担当科目の授業評価アンケートで、「5」と「4」の評価が全学生の９０％以上になるようにする。

担当科目の成績評価の度数分布で、「S」と「A」の評価が全学生の６０％以上になるようにする。

２．学務について

自己点検評価室とＦＤ・ＳＤ委員会では、学習成果６項目を見直し、教育システム総覧とアセスメントポリシー（評価項目、点数配分、評価基準・ルーブリック）を改定する。

キャリア支援では、就職率９５％以上を達成する。

３．研究活動について

「女子短大生の学習意欲の規定要因」をテーマとして、紀要等で３本以上発表する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業について

アクティブラーニングを活用として、心理学の講義科目では毎回の授業の最後に理解度と感想を確認するミニレポートの提出を求め、さらに、授業の冒頭では前回の授業に関する質問をして授業への関心を高めた。また、エクセルの演習科目では応用問題や自由課題を与えて、主体性や問題解決能力、学習意欲の育成に努めた。

２．学務について

学習成果の評価項目を現行の６項目から８項目に変更して到達目標を示した改定案を作成した。また、８項目の到達目標と各科目における８項目の点数配分を検討した。

就職支援では、一斉支援の就活セミナーと個別支援の２者面談を効果的なタイミングを考慮して実施した。

３．研究活動について

女子短大生の学習意欲を研究テーマとして、アルバイトにおける学習意欲の規定要因について調査した。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

社会心理学と臨床心理学、ビジネスデータ活用１・２・３（エクセルの演習）の授業において、授業評価アンケートの「内容・レベル」、「教え方」、「学習意欲」、「内容の理解」、「総合的な満足度」がすべて４．２以上であった。また、「授業外学習時間」はほぼすべての科目が設定した６０分程度であった。

しかし、成績評価では、１年前期のビジネスデータ活用１のＳとＡの割合が４０％程度とかなり低かった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」

評価項目を８項目に変更して、学科・コース別に到達目標を示した改定案を作成することはできたが、具体的な評価方法や評価基準（ルーブリック）を作成するところまでには至らなかった。

就職支援では、３月末現在で８０％程度の低い就職率であった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

研究の本数は３本で妥当であると言えるが、研究のレベルが研究報告や資料であり、学術性に欠けている。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．授業について、

ビジネスデータ活用１のように１年前期のＰＣの授業では、学生の習熟度に応じた個別支援にも努めたい。

２．学務について、

今後は、成績評価基準のルーブリック、学習成果を多角的に可視化したディプロマサプリメント、学びのポートフォリオ（e ポートフォリオ）の開発に取り組んでいきたい。

３．研究活動について

今後は学習意欲に関する先行研究や多変量の統計処理を踏まえた学術論文を執筆したい。

令和２年度　「濵口　なぎさ」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．演習科目では、一人一人の学生の進捗状況の把握に努め、学生のレベルに合わせた指導を心掛ける。講義科目では、双方向の授業となるよう、学生の反応を確認できる方法を研究し、実践する。

２．配慮が必要な学生や基礎学力の低い学生に対して、コース内で協力して対応できるよう心がける。

３．学生の実践力の向上を図ることを目的として、検定試験の受験対策に力を入れる。日商 PC 検定３級の全員合格と、昨年度に引き続き登録販売者試験の合格者が出るよう、学生サポートに尽力する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．レベルを分けて実施しているビジネス文書作成１では、学生個人カードを作成し、課題の進捗状況を可視化し、演習科目全体としては課題チェックを綿密に行うことで、学生へのフィードバックに努める。講義科目ではリアクションペーパーにより、学生の興味関心や疑問・質問を把握し、授業内容へのフィードバックに生かす。

２．担当授業やチューター面談での学生の状況把握と、空き時間等での学生の動向に注意を払い、気になる学生がいた場合は、コース会議にて情報共有を図り、対応を協議する。

３．登録販売者試験対策については、栄養士コースの教員と協力して合格者が出るような指導に努める。日商 PC 検定については、対策講座及び試験日の告知を早めに行い、受験希望者の状況を把握し個別に対応する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　演習科目では課題チェックとともにリアクションペーパーも併用したことで、学生個人の進捗状況の確認と苦手部分の把握ができた。講義科目についてはリアクションペーパーの活用が不十分であったが、ノートと期末試験によって学生の理解度を確認することはできた。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　新型コロナ対策を徹底しながら、定例のチューター面談を実施し、学生の動向にも気をくばり、欠席した学生についてはコース間での情報共有を図りながら対応することができた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　今年度から栄養士コースの古賀・桑原真両教員と協力して対策講座を実施し、最終的に 2S が３名、1L3 名が受験したが残念ながら合格に至らなかった。次年度は、実施回数を増やして講義も実施するとともに、受験まで学生のモチベーションを維持するための方策が必要である。
　日商 PC 検定は、随時試験を７回実施し、３級は 19LA の希望者全員が合格して卒業できた。19LA の取得率は 67.9%であったため、20LA は 80%以上を目指したい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．演習科目は、今年度同様課題チェックとリアクションペーパーを併用する。講義科目は単元の区切りを目安にリアクションペーパーを活用し、学生の理解度を確認する。

２．配慮が必要な学生や基礎学力の低い学生に対して、コース内で協力して対応できるよう心がける。

３．日商 PC 検定３級の全員合格と２級合格者を出すこと、登録販売者試験の合格者が出るよう、学生サポートに尽力する。

令和２年度　「島田　幸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．コロナ感染防止に留意しつつ、グループ協議・発表、プリント記入等を工夫してアクティブ・ラーニングを更に充実する。 ２．授業内容や実習指導の充実を図り、保育者としての資質向上に努める ３．過去５年間の学生アンケートデータを整理し、保育・教育現場での「合理的配慮」の実状をまとめる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．感染防止のために当面グループ協議は実施しないが、毎時間３名程度個人発表を行わせる。また、前時の復習として提出させたプリントの中から１名の感想を紹介する。 ２．常に実習や卒業後を念頭におき特別なニーズ保育・教育の重要性を理解させるとともに、教育実習において事前事後及び巡回指導を細やかに行う。 ３．アンケートデータを再検証し、「合理的配慮」の実情を分野別に系統的かつ具体的に詳述する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 自主的に発表する学生が少なくなり後期には指名したが、発表内容が表面的になりやすかった。プリントの感想発表はほぼ達成できた。 ２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 視聴覚教材の利用については、学習内容が理解しやすいと好評であった。しかし、コロナ対応策の影響で教室変更があり、機器の操作に手間取ったことが反省点である。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」 データの整理は行ったが、分析が不十分で論文提出に至らなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．コロナ感染対策に留意するとともに、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の要素を取り入れた学習活動（課題提起のプリント学習等）に取り組む ２．教育実習（事前・事後指導を含む）を通して、特別な教育的ニーズのある子どもの理解と関わり方を具体的に指導する。 ３．引き続き保育現場における「合理的配慮」について、研究を進め論文にまとめる。	

令和２年度　「中村　浩美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．ピアノ初心者及びそれに近い技術レベルの学生への対応と指導の在り方を研究し、進度や達成度を高める。

２．声や歌唱にコンプレックスを持っている学生、また声の出し方、特にチェンジ音域の悩みや疑問を持ち自信がない学生への個別指導を行う。

３．保育者になる自覚と意識向上を常に持つための、学生が自ら積極的な取り組みを行える指導をする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．緊張感をほぐし信頼関係を築きながら、個人の性格を早く把握してレベルに沿った指導をする。毎回のテストでは進度に重視をおく事よりも、多くを求めず学生自身の到達目標を聞きながらそれを補える指導をする。目標の到達度合を確認し合いながら次に向かう意欲を持たせる。テスト前にはグループで発表会をしながら、それぞれの良い点・課題点を述べながらグループでも協力し合って上達するための方法も促すようにする。

２．声にも当然個性があり、その個性を受け入れて伸びる可能性を持っている事、勇気の積み重ねが実力・自信に繋がる事を気付かせる指導を行う。特に自分の歌声を否定する学生への指導には、少しでもコンプレックスをなくすための方法を研究する。個別よりグループレッスンによって人前で声を出す羞恥心を少しずつ取り除き、自分のレッスンだけではなく他の学生のレッスン見学によって、声の出し方の違いを理解させ、改善できた事への喜びを認め合い、それを生かせるための指導をする。声を出す事・歌う事に必要な要素を個々に見合った方法を工夫する。特にチェンジの声がそれぞれ違うため、一音一音丁寧に直接体に触れながらの指導を強化する。

３．「先生」と言われる立場上人前に出ると言うことに対して、何を意識してどう振舞うかを考えさせそれぞれに実践させる。イメージ力に乏しくなっている学生の変化を考えながら、先生になっているイメージ、子どもが傍にいるイメージ、一緒に歌う子どもの歌のイメージを持てるための導く言葉を研究する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。

※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

コロナ感染対策のために、ピアノ練習室エリアと研究室、音楽室、音楽あそび室の衛生管理に気をつけた。学生の緊張感をほぐしながらピアノへの抵抗を少しずつ除去していく指導に神経をかなり使った。初心者やレベルに達していない学生には授業外でも教員と学生間のスケジュールを検討しながらレッスンを行った。グループごとの発表会はコロナ渦のためできなかった。コロナ渦によって学生達の意識、モチベーションを高めるのは難しかった。また、初心者やレベルが低い学生でもプライドが高く、選曲やコード譜の音の組み合わせにもかなり気を使った。学生達の進度状況を優先するより基本的な技術を重点的に指導した事は、２年次での授業に活かされると考える。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」

コロナ渦であったが、例年より個人的に自らレッスンを希望する学生が多かった。音楽室の椅子を取り払って広い空間を作り換気をし、密にならない事を第一に、２人～5 人一組でレッスンを行った。歌は好きでも自分の声や出し方に自信がなくコンプレックスを持っている学生が多い。個人では自分の声の出し方への不安や苦手な音域の改善は出来にくく、一人ずつの声・歌唱を直接聴いて指導する事が学生達のコンプレックスを除去する事となった。今まで出した事がない良い声に指導者としても喜ばしい事でもあった。共に指導を受けている他の学生もその成長ある声に感激し刺激を受けていた。グループレッスンによって自分の声の出し方の良し悪しがお互い聴きあえて効果があった。地声・ミックスボイス・ファルセット、移行の仕方など、学生個人の癖を早く知ってあらゆる方法を考えトライし、継続的なレッスンをすると常に考えている。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」

今年度はコロナ渦中のため、例年取り組んでいる「先生」になりきるための「お集まり」、「世界でたった一つの手作り手遊び歌」、を軸にした「歌唱」と「手遊び歌」が行えなかった。２年生全員を対象に記念ホールで「生活の歌」「季節の子どもの歌」「季節にとらわれない子どもの歌」「手遊び歌」に取り組んだ。少人数制の授業とは違うため、前に出る事が一層の羞恥心やモチベーションを低くしてしまう事を認識した。学生全員に対しての教員からの発信となった事は、学生を受け身にさせてしまったと考える。また、マスク着用での「歌唱」や「表現」に於いては、度々の注意指導が必要とされ、本来の「子どもに対する音楽指導者」を目指す学生への指導に苦戦した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．密室のためドアと窓は常に開けたまま、コロナ感染対策に気を配りながらレッスンを行った。次年度も同じく感染対策を徹底しながらレッスンを行う。研究室でのレッスンはマンツーマンで行うため、緊張感を緩和させながらこれからも一層の丁寧なレッスン指導をし、学生と共に達成感や成長を感じながらレッスンの希望をたくさん受け入れる。

２．歌唱レッスンに於いてはコロナ感染対策さらに強化する。学生が自分の声に未知の発見や成長が少しずつでもあること、コンプレックスを解消できて楽しむ歌になるため今までの指導の在り方を活かしつつ、さらに追及しながら工夫して実践する。

３．次年度も注意すべくコロナ渦の授業の取り組みを検討する。マスク着用でも笑顔を表現できる指導を強化する。音楽・表現を通して保育者になるための意識改革や人前に出る事に於いて何が大切かを考えて実践する積極的な受講の取り組みになるよう、教員としての配慮や導き方を研究する。

令和２年度　「本村　弥寿子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　担当科目において、学生の到達度が 60 パーセント以上 S、A、B 評価になるようにする。 ２．担当科目において、教育効果の高い遠隔による授業の方法を模索する。 ３．学科教員と情報交換を密にし、各教員が効率的に仕事に集中できる環境づくりに努める。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．体験学習での学び以外に、保育現場の VTR を多数視聴する機会を作り、子どもと保育者のかかわりの様子を見るようにする。さらに、視聴する際の視点をはっきりと学生に伝えることで学習のねらいを踏まえて視聴できるようにする。 ２．　講義形式のもの、演習形式のもの、また、作業が取り入れられているものと、学生にとって学習内容が理解しやすい遠隔授業の内容を工夫する。 ３．準備室の掲示板や回覧物の設置方法を工夫したり、ライン等を使用して情報を素早く提供し合ったりできるようにする。また、日ごろから声を掛け合い、些細な情報でも気軽に伝え合う雰囲気づくりを行う。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 遠隔授業が主となった科目においても、集中して DVD を視聴する時間を設けた。教員の教授内容と合わせて DVD 視聴で学んだことを定期試験の問題としたこともあって内容の理解が進み、B 評価以上のものが 70%越えの科目が多かった。保育内容総論は、令和１年度に B 以上が約 40%であったが、令和２年度は 50%代まで伸びた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 教員が見本を示してカメラを寄せて見せたり、作業している手元を拡大して撮ったりと、動画であるからできることを多用した。対面であれば、後方に座している学生には伝わりにくいことも、動画であったから伝わったといえるものが多かった。「何度も見返して確認した」「手元が上から映してあったのでわかりやすかった」という感想が聞かれ、遠隔授業ならではの良さが活かせたと考える。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 専任教員のみと特別専任も加えたものと、2 種類のライングループを作り、準備室のホワイトボードと併用して連絡を取り合った。臨時の会議も招集がかけやすかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．対面授業に遠隔授業の良さを取り入れながら、理解の深まる授業を模索する。 ２．　保育現場で即活用できる実践力を身に付けるためのゼミナールについて模索する。 ３．学生対応、授業内容や進め方等、学生の成長につながる学科内の情報交換や情報共有を丁寧に行う。	

令和２年度　「光武　きよみ」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：准教授
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．満足度を高めるために、学生の興味を引くような授業の工夫ができる。 ２．さらに積極的に授業に参加し、自ら考え意見が述べられるような授業を展開する。 ３．保健・安全に関する研究を継続できる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．課題などを通して自主的な学習を進め、その後授業で復習をしながら内容を深める。 ・演習科目では振り返りシートを活用し、座学では課題を通して家庭での予習等ができるよう配慮する。 ２．グループワークや個人作業を行ってもらい、毎授業ごとに自分の意見を述べる時間を作る。 ・授業の中では必ず意見交換の場を設け、他者の意見を聞きながら学生自身が意見を述べるように授業を展開する。 ３．病児保育または保健安全に関しての研究を実際の現場や学生アンケートを通して継続する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 ２年生に関しては、実際の業務を考えて課題提出等も実施しながら進めることができ、予習復習の時間も確保できていたが、１年生に関してはアンケート結果から家庭学習時間が比較的短かったことから、少々不足していたと考える。ただ、１・２年生の総合評価として、９割強の学生が理解できた・ほぼ理解できたと回答していることから授業内容等に関しては問題ないと考える。 ２．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 １・２年生問わず、個人作業やコロナ禍での少人数のグループワークから発表につなげていくことができた。対人職ということもあり、大人・子ども問わず人前で話をしたり、説明をする機会が多い。そのため、正しい情報を他人にわかりやすく説明するという機会がつくれたものと考える。 またアンケート結果からも、「他の学生の意見を聞くことができた。流れを把握できた。子どもたちの病気について学ぶことができた。」との回答が多数あり進め方としては良かったと考える。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」 今回は学生の実習に関する調査研究のみとなってしまった。年度当初は病児保育等の現場についての研究を計画していたが、その機会を作ることができなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
退職のため、行動計画については未記入とする。	

令和２年度　「古賀　克彦」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース　　職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上（短大平均を上回ることが目標）。
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上（A 評価の学生が 80%以上）
3. 長崎食育学の円滑な運営と授業評価向上

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上
   - 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し解説を実施。また、授業において頻出分野の解説強化
   - 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用
   - スキルアップ特講の内容充実
2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上
   - 学外実習総合演習での指導強化
   - 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化
3. 長崎食育学の円滑な運営と授業評価向上
   - 外部講師の依頼の引継ぎ
   - 学名講師陣の実習内容充実

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

令和２年度栄養士実力認定試験の結果は昨年度よりわずかに向上し、臨床栄養学は短大平均と同じ点数、栄養指導論は短大平均を上回る結果となった。成績が昨年度より向上した理由として普段の授業や定期試験において栄養士実力認定試験に取り組む機会を増やし、多くの問題を溶かしたためだと思われる。次年度は全国平均を超える成績を目指し、今年度の対策に加え、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。

科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)
臨床栄養学（6 点満点）	3.2 点（53.3%）	2.7 点（45.0%）	2.7 点（45.0%）
栄養指導論（6 点満点）	3.9 点（78.7%）	3.5 点（58.3%）	3.8 点（63.3%）
全体（85 点満点）	47.2 点（55.5%）	42.2 点（49.6%）	42.3 点（49.8%）

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの評価は以下のとおりとなった。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響の為学外実習Ⅰは学内で実施した為、A 評価の割合が高くなった。学外で実習を行った学外実習Ⅱでは昨年度より S 評価の割合が増加した。来年度も B 評価の学生を減らし、S 評価、A 評価を増やせるように、評価が低くなりそうなグループの指導にも注力していきたい。

	S	A	B	C
学外実習総合演習	13名(46.43%)	10 名(35.71%)	4 名(14.29%)	1 名(3.57%)
学外実習Ⅰ	1 名(3.57%)	22 名(78.57%)	5 名(17.86%)	0 名(0%)
学外実習Ⅱ	12 名(42.86%)	13 名(46.43%)	3 名(10.71%)	0 名(0.0%)

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」

今年度の長崎食育学は前任者からの引継ぎが無い状況での実施であったため、授業の円滑な運営と、授業評価の向上を目標として授業を実施した。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、一部内容を変更しての実施であったが、各外部講師の講義・実習も、学内講師の講義実習も問題なく実施することが出来た。。学生の授業内容の評価に関しては、十分に適当であったが 45.5%、適当であったが 27.3%であり問題は少なかったと思われた。また、満足度（総合評価）も十分に満足できたが 52.4%、満足できたが 23.8%であり多くの学生に満足してもらえる結果となった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 令和３年度は担当科目の得点を全国平均上回るために、授業内容の見直しを行うと同時に、教えている内容の取捨選択を行い、重要な部分は確実に修得させていきたい。また過去問を用いた試験対策に合わせて、授業内容の理解度を上げていきたい。
2. 令和３年度も学外実習Ⅰは学名で実施予定であるので、評価方法が適正になるように見直していきたい。また学外実習Ⅱでは今年度同様にＳ・Ａ評価が増加するように学生にはなぜ学外実習を行うのか理由や目的納得するまで説明していきたい。また、評価が低くなりそうなグループの学生の成績向上の為、個々の特性に応じた指導を行っていきたい。
3. 令和 3 年度の長崎食育学も新型コロナウイルス感染症流行の実施になるため、感染予防に配慮し学内外講師の授業を実施していきたい。また学生の満足度向上の為にも、講義内容は常に見直し満足度の向上を図っていきたい。

令和２年度　「荒木　正平」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上（評価アンケート 4.0 以上をめざす） ２．施設実習担当の配置替えに伴う、学内外の連携体制の確認と学生指導の充実 ３．地域連携・子育て支援センターにおける業務の充実化に向けた体制の整備 ４．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図った。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう保育現場での支援を具体的に想定した資料の配付のほか、DVD などの教材も活用した。演習系の授業では、学生がより能動的に考えるためにグループ演習なども取り入れて実施した。レポート課題もあわせて活用した。 ２．他の担当教員との連携、協力施設との情報共有を適切に実施しながら、指導内容のさらなる充実を図ることができた。個別での対応が必要な学生については、特に支援を強化して実施した。新型コロナによる実習施設との連携やお断りいただいた施設などの対応や学生支援に迅速に当たった。 ３．センター業務各担当教職員間での情報共有体制（会議の定期的な実施を含む）の構築を図ることができた。 ４．前年度に報告した「特別な支援が必要な幼児の教育・保育」テーマで引き続き研究を進め、紀要にて論文化したほか、関連テーマでもう一本紀要論文として発表した。そのほか、学会発表も２件実施することができた。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナ禍で対応に苦慮する部分はあったが、適宜遠隔授業も取り入れつつ、個人演習形式での実践やグループ演習も取り入れた。テーマ学習の実施により、学生自ら考える姿勢を促すことも出来た。 ２．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 学内での情報共有・連携ももちろんであるが、今年度は新型コロナ対応のための学外協力施設との調整に非常に苦慮しつつも、最終的に施設実習希望の全学生が学外実習に臨むことができた。学生指導についても、学内授業と実習の連動性を意識づけることで、ほとんどの学生が充実した実習を行えた様子であり、個別の対応についても適宜実施した。 ３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 センター業務各担当教職員間で情報共有体制の構築を進めることができた。またキャリア支援との横断的業務として、私立幼稚園連合会と連携しての県内就職に関する事業も新たに実施し成功させることができた。 ４．自己評価「 [S]・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 紀要論文２本の報告を行った。学会発表は２件実施することができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．担当授業の内容充実と、学習成果の向上（評価アンケート 4.0 以上をめざす） ２．　施設実習に関する学内外の連携体制の確認と、学生指導の充実（実習先ごとに異なる仔細な対応に関する共通理解をよりスムーズにするための支援方法の対応）。 ３．「地域連携・子育て支援センター」「キャリア支援」における業務の充実化に向けた体制の整備 ４．学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）	

令和２年度　「福井　謙一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　個人研究の充実を図る（保育者養成課程に関する研究） ２．遠隔授業の方法を確立させる ３．ICT 教材を用いた授業を充実させる	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　博士課程に在籍しつつ、研究の充実を図っている ２．　YouTube や Zoom 等を用いた授業展開を行っている ３．スマートフォンやタブレットを用いた授業展開を行っている	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 本年度は、今まで行ってきた研究内容を総括し、レビューを行った。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 Zoom を用いることはなく、YouTube のみのリモート授業となったが、学生から特に不満の声はなく、滞りなく実践できた。 ３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 本年度も学生のロールプレイを撮影しつつ、モニタリングできる機会を設け、学習内容理解に努めた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．来年度はオンデマンドではなく、リアルタイムの配信を行えるような授業展開を行う。 ２．学生理解が深まるような ICT 授業を展開する。	

令和２年度　「蛯原　正貴」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：講師
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　実技科目における技能及び講義科目における知識習得に関して、スモールステップによる向上を図る。具体的には、小テストを細かく行い、習得状況の確認を行いながら授業を進める。 ２．　教務・IR 委員会の運営に関して、各種データ収集率の向上を図るとともに、集計したデータを授業等に活用できるよう、その活用法について検討する。 ３．　比較教育研究に力を入れ、海外と日本の体育科教育を比較しながら、日本において活用できる新たな形の体育授業法の検討を行う。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．期末試験のみならず、各回の授業において小テストを複数回行い、実技科目における技能及び講義科目における知識の確認を行う。 ２．授業評価アンケートの回答率を向上させるため、最終回における呼びかけを強化する。また、学習成果の 6 項目の見直しを行い、期末試験等の評価基準と関連させられるようルーブリック等の作成を進める。 ３．海外の文献を確認し、現在の日本における体育科教育との違いについて比較する。具体的には文献データベースを活用し、教育法やカリキュラム等の比較から、日本における学習指導への活用法を検討する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」 新型コロナウイルスの影響により、一部をオンライン授業としたため、各回の授業において小テストを行うという取り組みが実施できなかった。実技における技能テストにおいては、毎回とまではいかないものの、定期的に実施することができた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」 アセスメントポリシーの改訂とともに、評価基準の見直しについても検討することはできた。今年度中の完成は叶わなかったが、次年度に向けての基盤は作れたのではないかと思う。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ⓒ・Ｄ 」 目標としていた体育科教育から路線を変更し、保育者効力感についての研究を行ったため、当初の目標は達成できなかった。保育者効力感に関しては査読誌への投稿もできたことから、路線変更後の研究は進められたのではないかと感じる。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　今年度の目標が社会情勢の影響もあり、達成できていないため、次年度も同様のスモールステップを意識した授業構成を検討したい。 ２．　アセスメントポリシー完成を目指し、今年度同様、定期的に教務・IR 委員会等で検討を行う。 ３．　海外の文献検索がなかなかできていなかったため、海外の文献検索を主として、体育、保育に関する幅広い情報収集を行う。	

令和２年度　「太田　美代」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　専門職としての実務の基礎となる力を習得させるため、栄養士実力認定試験における担当科目の正解率アップを目指す。
２．働きやすい職場づくりに努め、栄養士コースの目標達成に向けてチームとして取り組む態勢をつくる。
３．食を通して社会に貢献し、自らも夢の実現に向けて前向きに努力することのできる学生を育てる。(就職率並びに学生アンケート等を指標とする)

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．「給食管理論」の昨年度の実績は 55.7%。機会をとらえて栄養士実力認定試験の過去問にあたらせ、理解不十分な分野を把握して指導を行う。１年生に対しても教材研究を丁寧に行い、授業のポイントを復習できるワークシートを作成して授業にあたる。
２．定期にコース会議を実施して報告・連絡・相談を密にし、円滑なコミュニケーションを図るとともに、協働して課題解決にあたるチームをつくる。
３．①教務 IR 委員会の先生方に学びながら大学におけるルーブリック評価の在り方について研修を深め、学生と目指す姿を共有できるようにする。
②実習演習の授業において、グループや個人での自己評価の場面をつくり、認め、励ますことを通して学びに向かう主体的な態度を育成する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 $\boxed{\text{S}}$ ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
「給食管理論」の今年度の正答率は 70.4%。昨年度実績（55.7%）を 14.7 ポイント上回ることができた。
２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
基本的に週１回のコース会議を開催し、意思の疎通を図って円滑に業務を推進することができた。気になる学生についての情報共有も早期に図ることができ、一人の脱落者も無く年度を終えることができた。健康上の理由で休学中の学生も次年度には復学の予定である。
３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
就職率は 100%を達成することができた。学生アンケートの結果では、本学での学びが将来に活きると思うかという設問に対して、2 年生は 100%が肯定的な評価であったのに対して、1 年生は 95.4%であった。給食経営管理論実習Ⅰの自己評価票ではほとんどが○◎だったが、一部△の評価をした学生が 22 名中 6 名いたので、次年度の給食経営管理論実習Ⅱでフォローすることとする。グループでの自己評価も、一人一人が当事者意識をもって話し合うことができ、どんなことが身についたか、何が足りなかったのか整理することができた。次年度の学びにつなげたい。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度の２年生は、理系の科目を苦手としており、ほとんどの学生が適性検査における基礎能力が３以下であるため、いかにして学力の向上を図るかが課題である。可能な限り個別対応を行い、学生が自ら学ぶ姿勢をもつよう支援するとともに学力向上対策として TA を活用した教育サポートシステムをつくる。
２．　定期的なコース会議の開催は、コース職員が一体となって目標達成に向けて努力する基盤となった。働き方改革で会議削減が推進される昨今ではあるが、執務室を共有しない短大では意図して一堂に会する機会を設けなければコミュニケーションをとる機会を得ることが難しい。できるだけ短時間で効率的に会議を進めるよう心掛け、定期開催を継続したい。真摯に職務と向き合う同僚に恵まれたことに感謝したいと思う。
３．学生の主体的な学びに向けての授業改善の試みは、次年度も継続して行い、授業評価アンケートの結果も参考にしながら方策を探っていく。

令和２年度　「江頭　万里子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：特別専任講師

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業：敬語の効果的な指導法を試みる

２．　研究：秘書検定の学習意欲に関する研究を行う。（共同研究）

３．　学生支援：研究室を訪問しやすい環境づくりに努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　言葉遣いについては、敬語の仕組みの理解に重点をおいた授業を行った。２年生には、授業内容の理解を深めるため、敬語の仕組みを他者に説明する課題を繰り返し与え、回収した課題にはコメントを書いて返却した。

２．秘書検定の学習意欲と自己調整学習に関する研究を行った。

３．　日常的に教員から声掛けして、訪問しやすい環境づくりに努めた。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
　１年生、２年生に対して敬語の授業前と最終回に実施したテストの結果から、敬語の知識と運用力の取得に授業の効果が見られた。しかし、２年生が行った他者に敬語の仕組みを説明する試みについては、敬語の学びを深めるために仕組みを説明する課題が有効であったという感想を持つ学生は多かったが、最終回に行った１年生と２年生のテスト結果に統計的に有意な差がなく、効果的な指導法であるとは言えなかった。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　秘書検定の合否を左右する学習意欲の規定要因には、自己調整学習の構成要素が関連していると仮説を立て研究を行ったが、仮設は指示されなかった。しかし、調査の結果、自己調整力の高い学生は低い学生より目標達成のために頑張れたと思っていることが分かった。また、検定試験の結果から、検定受験対策に自己調整力の低い学生でなければ自己調整学習法が効果的であることが窺えた。以上の結果は、今後の指導法を検討する上で有効な資料となった。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　授業外で個人指導を受けに訪問する学生もおり、日常的な声掛けによる一定の効果があったものと思われる。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　授業：学生の授業満足度を上げる。
２．　研究：検定合格に向けての指導法を検討する。
３．学生支援：質問しやすい環境作りに努める。

令和２年度　「船勢　肇」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：幼児教育学科	職名：助教
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．動画をはじめとした遠隔授業の方法を模索する。 ２．日本語の論述の向上をはかり、生涯をみすえた教養教育の一助とする。 ３．科学研究費の最終年になるため、これまでの成果発表を具体化させる。	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．　メールによる課題の内容の吟味・動画撮影の技術向上・映像資料の教材研究をおこない、さらに他の方法も模索しながら、より多彩な形態で講義をおこなえるようにする。 ２．論述を課し、丁寧な添削をおこない、日本語の基礎的な文法に対する注意を促す。それによって、日本語能力の向上と意識付けをはかる。 ３．現在の研究水準に耐えられるよう、共同研究者と綿密な議論を重ね、遅滞なく進めていく。さらに、研究期間終了後も共同研究者より学問的な知見を吸収できるよう、関係を構築する。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・$\boxed{\text{C}}$・Ｄ 」 メールによる課題提出について届かないメールがあり、最後まで解決できなかった。動画についても、環境が整っていない学生がわずかながら存在した。振り返りの授業をおこない理解を得られた。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 授業外で学生が自主的に文章の添削を求めてくることがあり、学生によっては意識の向上もみられた。しかし、段落分けを他の授業の論述では行っていない学生が多くみられた。その意義づけからより丁寧に説明する必要を感じた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」 共同研究の成果について、原稿を提出し、岩波書店からの出版が決定したものの、年度内の出版にはいたらなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．遠隔の授業は避けつつ、アクティブラーニングの形態をより模索する。 ２．就職後の評価においても、学生の文章力が指摘されているので、よりその意義を丁寧に説明し、理解を得られるように取り組む。 ３．実際に、自身の原稿が掲載されるか否かについては、これから審査される。一生に一度あるかどうかの機会なので、より校正などに注力していきたい。	

令和２年度　「桑原　倫子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．媒体の利用や授業内容のボリュームの検討をし、学生が興味を持つ授業方法を模索する。 子どもの食と栄養については、授業評価アンケート項目『この授業に満足できたか』で『十番満足できた』を五割以上に増やす。

２．２年後の論文執筆のため、データ収集などの準備を行う。紀要を１本執筆する。

３．栄養士コースの魅力や取組等を外部へ発信し、更なる周知に努める。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．授業のスピードやボリュームを見直し、動画等を活用して印象に残る内容にする。

２．夏前までに、論文執筆のための学生のデータをとる。

３．公開講座や一般向け料理教室を開催、イベント等への参加など、栄養士コースの宣伝広報に繋がることは積極的に企画・参加する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
子どもの食と栄養の授業評価アンケート項目『この授業に満足できたか』で、『十分満足できた』は 33.7%、『ある程度満足できた』は 48%だった。『十分満足できた』で 50%以上を占めることは難しかったが、全体の 80%以上の学生は満足度を得られる授業であったとの評価だった。今年度は授業の内容をやや絞り、学生にとって難しく感じられる分野は時間をとり、繰り返し授業を行ったこと、コロナ禍でもできる内容の実習を考え実践したことでこのような評価を得られたと考える。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
2020 年の春頃に、本学学生を対象にデータをとる予定であったが、コロナ禍の影響により実行できなかった。今年度は文献収集など、個人でできる範囲での活動を行った。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍により、公開講座や料理教室開催回数の減少と規模の縮小、イベントの中止など活動の制限が大きかったが、参加者へのアンケート調査によると講座や教室自体に対する満足度は高かった。また、料理教室参加者から来年度の本学への入学者も出ており、広報宣伝に繋がったと考える。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．今年度に引き続き『子どもの食と栄養』では、分野ごとの授業スピードやボリュームの調整、コロナ禍でも行える実習内容を検討し、授業評価アンケート項目『この授業に満足できたか』では『満足できた』を 80%以上にする。

２．夏前までに論文執筆のためのデータを収集し、紀要論文にまとめる。

３．公開講座や料理教室に加え、卓袱料理試食会についてもその内容をより洗練されたものにし、栄養士コースの魅力を広報宣伝する。

令和２年度　「桑原　真美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　食品衛生学実験の授業アンケートにおいて、総合評価「十分満足できた」の割合を 60%以上とする。
２．　キャリア支援担当として、卒業時の就職内定率 100%を目指す。
３．　紀要を最低１本執筆することを目標とする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　食品衛生学の講義の復習も兼ねた説明を実験前に行うが、昨年より時間をかけて説明し、学生ひとりひとりが目的を持って実験に取り組めるよう促す。
実験方法についてはデモを含め説明をしているが、昨年の授業アンケートで「器具の使い方を教えてほしい」との意見があったため、一度使用したことのある実験器具についても再度使用方法を説明する。

２．新型コロナウイルスの影響により就職活動のスケジュールが例年通りではない為、学生には常に情報収集に努め、積極的に就職活動を行うよう促す。
活動が積極的でない学生に関してはこちらから定期的に指導を行う。

３．学生の衛生意識に関する研究を食品衛生学実験と連動して行う。また、今年度より実施する女子高生対象の料理教室についての報告を紀要として発表する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
食品衛生学実験の総合評価は「十分満足できた」の割合が 54.5%であり目標の 60%には届かなかった。その原因として、学生の理解度の評価が他の科目に比べて低いことが挙げられる。実験内容を十分に把握していないまま実験を行ってしまっている学生がいることや、レポート作成時に結果に対する考察が上手くできない学生が多数見受けられることが理解度の低下に繋がっていると考えられる。また、教員の教え方や意欲の評価についてもやや低くなっている。わかりやすく、学生の興味を引くような授業ができていないことが考えられる。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
本年度の栄養士コース就職内定率は、令和３年３月２日に 100%を達成した。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、委託給食会社の就職活動は例年と比較して１か月程度遅れて開始となったが、積極的に就職活動を行う学生が多くみられた。中には年明けまであまり活動していない学生もいたが、コース教員それぞれの声掛けやサポート等により、卒業までに就職内定率 100%を達成することができた。

3. 自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
共著ではあるが、筆頭として２本の紀要を執筆した。計画の段階では、学生の衛生意識に関する研究を行うこととしていたが、新型コロナウイルス感染予防として手洗いや手指消毒等を頻繁に行っていたことにより、昨年度実施した研究との比較ができないと判断したため中止した。代わりに今年度から新規の科目として開講した栄養士スキルアップ特講と栄養士実力認定試験についての紀要を執筆した。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　次年度は、実験の導入部分をより丁寧に行うことを目標に指導の計画を立てる。導入部分で、日常生活や給食提供業務での衛生管理との関連を理解させ、学生が意欲的に授業に取り組めるようにする。

２．次年度も卒業時に就職内定率 100%を目指したい。また、３年次編入を考えている学生が例年より多いため、そちらのサポートも併せて行う。

３．今年度は女子中高生対象の料理教室および栄養士実力認定試験対策の実施報告としての紀要執筆となった。次年度は個人の研究での紀要が執筆できるよう努力したい。

令和２年度　「山中　慶子」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：幼児教育学科	職名：助教

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　授業：学生が現場の造形活動ですぐに活かせるような知識・技能の習得。満足度８割以上を目指す。

２．　学務：オープンキャンパスや公開授業などで、長崎女子短大での造形教育の楽しさを学外にも伝える。

３．　研究：学生の造形に対する苦手意識を克服するための研究を行い、論文にまとめる。

４．　学外活動：幼稚園での造形活動の講師として学外活動を行い、自身の研究につなげる。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　実際に子どもに声掛けをするときや、導入の仕方など、具体的な事例を示しながら授業を行う。
学生の創造性の幅を広げるために、準備する材料の自由度をあげる。

２．　高校生の好む造形活動、一般の方の好む造形活動を、簡単かつ分かりやすい説明を心がけて実行する。

３．　学生へのアンケート調査をもとに造形への苦手意識の原因を探り、苦手意識を克服できるような授業を行う。アンケートにより成果を検証する。

４．　幼児造形研究につながるような、幼児を対象とした造形活動を計画し実行する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生の授業評価において、前期「子どもと表現」が 4.3、「子どもの絵と製作」4.7、後期「子どもの絵と製作」4.6 であった。学生の苦手意識の調査を行うことによって、苦手意識を軽減できるような授業内夜を検討し、実施することが出来たと考える。

２．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
造形表現に関する公開講座（1 回）・オープンキャンパス授業（1 回）・高校説明会（2 回）・女子高体験授業（2 回）を行い、それぞれ参加者からのアンケートなどで良い評価を得ることが出来た。

３．自己評価「 Ｓ・$\boxed{\text{A}}$・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生の造形表現に関する苦手意識について調査し、授業研究として造形授業に反映することが出来た。学生の造形表現に関する意識が良い方へ傾いていることがアンケート調査より明らかになった。

５．　自己評価「 Ｓ・Ａ・$\boxed{\text{B}}$・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍ということもあり、幼児を対象とした造形活動を積極的に計画することはできなかったが、12 月に幼稚園において造形活動を行うことができた。内容は、今後の幼児造形の研究に繋がるものであった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1.・今年度の授業をベースとし、学生が保育者になった際に実践できる、より具体的な授業内容を検討する。
・図工室の使い方や道具の配置の仕方を工夫し、効率の良い動線を作ることができるようにする。

2.・高校ガイダンスなど、短い時間で魅力を伝えることができる造形活動の種類を増やす。
・一般の方でも参加しやすい講座を計画する。

3.・現職の保育者の造形に関する意識調査を行い、課題を探り、授業研究に反映する。
・造形分野と他の表現分野との横断的アプローチについて研究を行う。

4.・幼児を対象とした造形活動を半期１～２回程度行い、研究につなげる。

令和２年度　「守山　優美」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　実習助手間での情報共有を密にし、状況を把握した上で対応する。

２．　レポートや課題等の未提出及び提出遅れがないよう徹底させる。

３．　授業が円滑に進むよう、準備・補助を行う。
（今年度は全ての担当授業で担当教員の変更があるため、密に確認を行う）

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　学生については、授業の様子、学生生活状況を随時報告し共通理解を図る。
行事等の業務においても進捗状況など密に報告し進めていく。

２．提出日時の周知を徹底し、意識付けを行う。
未提出者や遅れがちな学生には声掛けを行い、改善を促す。

３．計画書で授業内容に不明な点がある場合は、担当教員に確認を行う。
担当教員の変更で授業内容が再構成される場合があるため、自己判断せず担当教員の指示を仰ぐ。
授業中は周囲をよく観察し、教員や学生を補助し円滑に授業が進むように努める。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学生については、密に情報を共有しながら、教員、他助手との連携を取り対応することができた。
行事等の業務についは、今年度コロナ禍において変更点が多々あったが報告・連絡・相談を徹底し進めることができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
提出物については周知・連絡を徹底できた。未提出の学生には個人的な声掛けも行ったが、一部意識が低い学生が見受けられ改善がなかなか見られない現状もあった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
コロナ禍において授業変更を余儀なくされたり、学内での実習となるなど変更が多々あり担当教員等と密に確認を行っていても、準備、配慮が不足する部分があった。担当教員の変更に伴い、授業内容や役割の変更があり昨年度の思い込みから十分に対応できず迷惑をかける部分もあった。複数の教員が受け持つ授業においては、各教員との試作や打合せ等密に行い、円滑に進めることができたのではないかと思う。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　助手間での情報共有は密に行えており、教員との共通理解も得られているため今後も継続して行っていく。

２．意識が低い学生に対しては、早めに声掛けを開始し個別に対応を行う。合わせて意識の低い学生については担当の教員にも報告を行い、相談を行う。

３．計画書段階での把握に加え、各回の授業の前にも密に確認を行い授業内容の把握、準備を行う。

令和２年度　「黒田　真衣」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　調理実習の効率化
　　所定の授業時間内に実習を終えるようにする。

２．　学生の調理技術の向上

３．コース教員、他の実習助手とのコミュニケーションの徹底

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生がスムーズに作業ができるような環境を作る。
　　①授業内容の細かな確認を担当教員と行う。
　　②学生の授業内での動きを事前に頭に入れ、必要な道具や設備等整えておく。
　　③積極的に声掛けを行い、学生に素早い行動を促す。

２．　実習中に学生の調理作業状況を慎重に観察して周り、実際に実演しながら指導ができるよう心掛ける。

３．報告・連絡・相談を確実に行う。
　　①メモを残す、早めに行動に移して解決するなど、失念することがないように心がける。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　昨年度の流れを踏まえて器具などを準備しておき、調理室の環境を整えておいたため、ある程度スムーズに実習を進めることができた。学生への指示もその都度行っていった。しかし、個人的にまとめておいた申し送り事項で足りない部分があった。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[B]・Ｃ・Ｄ 」
　実習中は、示範の残りの工程を完了させて見本として提示するため、ほとんど見て回ることができなかった。また、示範時に使用した器具の片付けも、学生は実習後に授業が入っているためお願いするのは難しかった。様子を見る際には、教卓に近い班の学生にしか目がいかない。

３．自己評価「 Ｓ・[A]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
　伝達しそびれることがないようにメモを残すなど、気がけて行動をすることができた。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．打ち合わせのために毎週まとまった時間を確保するのは難しい。そのため、実習中に学生の様子を見ながら内容を見直し、その内容を次年度のための申し送りとして確実に残しておく。また、常に実習室は整理された状態にし、学生が使いやすい環境を維持する。

２．各実習内容において、学生への指導に回るべき工程を把握し、その部分を重点的に指導していく。１年生はほとんどの学生への指導が必要だが、２年生は特に観察が必要な学生を中心に、スムーズに作業を進めているか様子を見る。

３．今度も徹底してコミュニケーションを取っていく。

令和２年度　「内山　美保」年次報告書

区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）

部署名：栄養士コース	職名：実習助手

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．授業がスムーズに行われるように準備を行う。

２．教員や他助手との報告・連絡・相談を密に行う。

３．「栄養士実力認定試験のＡ判定 60%以上」というコースの目標を達成できるよう、主に資料準備等でサポートする。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　昨年度の記録を基に、授業日から逆算し計画的に行動する。また、新しい内容の実験や昨年度から変更になった点については、記録を確実に残しておく。

２．日頃から目配りを心掛け、授業に関することや学生の様子など気になった点は報告・連絡・相談する。

３．実力認定試験前の対策講座や模擬試験等でサポートにあたる。また、各自の得意・苦手分野を把握できるようなデータを作成する。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
授業の準備・授業内容の記録等はしっかりと行うことができた。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大による休校で授業日程の変更があったが、休校期間中には担当教員と一緒に予備実験を行うなど、時間を有効に活用することができた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
日常において気になることや提出物の遅れが目立つ学生についてなど、担当教員や他助手と定期的に情報を共有することを心掛けた。学生に対しては個人的な声掛けを行ったが、それでも提出が滞る学生もいた。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
栄養士スキルアップ特講にて実施した模擬試験では、模擬試験毎に各問題の正答率を出し、学生がどの分野や問題を苦手としているかを確認できる資料を作成し専任教員に配布した。正答率が 30%以下の問題にはマーカーを引き、見易い資料作成を心掛けた。12 月中に 2 年生が受験した栄養士実力認定試験では、Ａ判定が全体の 53.6%（15 名／28 名中）という結果で、目標の 60%以上は達成できなかった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　よりスムーズに実験が進められるよう、引き続き記録の徹底や授業中の気配り等を心掛けたい。

２．気になる学生に対してより早い段階で声掛けを行いたい。また、教員間・助手間における「報告・連絡・相談」は今後も徹底して行いたい。

３．学生の苦手分野の分析は今後も続けていきたい。分析を行ったり学生から話を聞いたりする中で、「生化学」「解剖生理学」に苦手意識がある学生が多いということが分かった。この 2 つの分野は、栄養士実力認定試験においては 15 問／85 問中と出題数が多く、また管理栄養士国家試験受験においても基礎となる分野である。現在、同授業の実験・実習において担当助手をさせていただいているため、分析した結果を教員に直接お伝えすることも学生の苦手意識を低下させる一つの手ではないかと考える。

令和２年度　「前田　功」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務局長
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　円滑な事務局の運営のために各種取り組みを推進する。特に新型コロナ感染症対策として一人も感染者を出さないための取組を行う。 ２．　教務システムを完成させる。 ３．　ＳＤ研修の計画的実施と朝礼及び週計画表の活用	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．円滑な事務手続きの実施に向けて各職員の仕事内容を精査し、担当替えを行うための適性を見るとともにコロナ感染者を出さないために工夫できるところは工夫していく。 ２．　システム開発先と連携を強化し、システムの完成をめざすために常に情報交換等を行い、更新すべき点は更新していくように強く求めていく。 ３．課題解決に向けたＳＤ研修会を実施するために、朝礼での情報交換を強化し、個々の事務職員のレベルアップにつなげる	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 各職員の仕事内容の精査を行うために、業務の洗い出しを行って適性を見るよう努めた。またコロナ感染者を出さないためにできることをやるという観点から、マスクの購入配付や消毒液・容器の購入を行った。 ２．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 システム連携先との連携は担当を通じて行い、十分であるとは言えないながらも効果が上がったと思われる。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 朝礼における情報交換は積極的に行ったが、各担当からの現在の進捗状況等についてはその情報交換が不十分であった、と言わざるを得ない。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　次年度は担当替えというよりも、複数で担当するという考え方から、兼務者を増やしていく方向で検討している。 ２．　システム先との連携は時間がたつにつれて、より深まっていると思われるのでこのまま担当者を通じて連携を深めていく。 ３．　SD 研修会を実施していくためには事務局内の局員たちがお互いの仕事内容を理解するとともに、不在の場合等考えると複数の仕事を担当していくということが大事であると思われるので、兼務者を増やすなりしていくことで対応していきたい。	

令和２年度　「髙井　達司」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：入試広報室長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．新規採用職員への指導と業務支援に努めたい。
２．「コロナ問題」に伴う広報活動の業務停滞を最小限に抑えるとともに、これを機に、新規広報媒体への取組みを検討する。
３．プロジェクトメンバーの一員としての意識を日常より持ち続ける。前年の繰り返しではなく、新たな取組みや変革を常に意識することが、自身の役割と認識する。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．新卒職員（入試広報室）への業務指導は、性急を避け本人の特性を見極めながら着実に進めている。
高い能力を有しているだけに、１年間を目途に計画的指導を実行したい。
２．今回の状況を前向きに捉え、これまで着手しなかった媒体についても、積極的に対応できるよう準備、研究を進めた。（ダイレクトメッセージ、動画配信、SNS 等）
３．以下の３点につき発案し、実施に至った。
（１）大村地区シャトルバス通学補助制度の立案と立ち上げ
（２）「個別進学相談会」を、オープンキャンパス後の毎週土曜日に実施した。
（３）大学共通テストへの参画を発案し、教授会の理解を得た。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
概ね当初計画通りの指導ができた。但し繁忙期が年間を通して継続したため、オーバーワークと感じる場面が時折り見られた。
２．自己評価「 Ｓ・Ａ・(Ｂ)・Ｃ・Ｄ 」
全ての項目に積極的に取組んだが、効果測定が難しいことから成果の検証には至らなかった。然しながら、これまで未着手であった動画作成による広報展開は、あらゆる場面で有効活用がなされた。加えてオンラインによる進学説明会やピアノレッスンに対し、説明用素材を福井講師協力のもと急遽作成した。志願者への広報媒体として大きな役割を果たした。
３．自己評価「 Ｓ・(Ａ)・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
（１）実際の申請者は予想を遙かに下回ったが、当地区の志願者増には繋がった。
（２）年間 11 週に亘り実施。12 名（実数）が申込み、内 10 名と面談し全員が出願する。内４名がビジネス・医療秘書コースであったことは、本コースの学生募集の一助となった。また４名が社会人選抜に出願したことから、社会人出願への大きなきっかけ作りとなった。
（３）学校推薦型選抜以降の志願者が年々減少。一般選抜の志願者が極端に少ない現状を改善し、新たな志願者層を模索するため、大学共通テストへの参加を提案する。若干の意見は見られたが、教授会の理解を得た。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．業務量は年々増しているが、次年度より兼担職員による業務分担が見込まれるため、これを有効に活用するため、業務負担の組み換えを行いたい。
２．オンライン系の学生募集活動（オープンキャンパス、進学説明会等）については、コロナ禍の如何に関わらず準備を進めていきたい。
３．大学共通テストへの参加を、県内外の高等学校に広く周知させることに傾注したい。このことにより、一人でも多くの志願者増加に繋がることを目指したい。また「大村地区の通学費補助」については、R3 年度出願状況を見た上で、次年度の改善作業に着手したい。

令和２年度　「原田　実輝」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・　事務局等　・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．学生のニーズに合ったキャリア支援に努める。

２．新型コロナウィルス感染症対策として、センター内において３密を避ける環境づくりを行う。

３．学務システムを活用して、業務の効率化を図る。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．学生が知りたい情報を得られるよう、過去の資料等をまとめて見やすい閲覧ファイルを作成する。

２．換気・消毒を徹底し、学生が密接しないよう配慮する。状況によっては事前予約制、人数制限等も検討する。

３．システム運用の問題点をこまめに業者に連絡して改善を図り、システム一本化による業務の効率化を目指す。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
前もって準備しておくことが出来ず、学生からの要望に応じて慌てて作成する状況であった。

２．自己評価「 Ｓ・[Ａ]・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
換気には十分に気を付け、学生達に時間をずらして利用するよう促したり、密にならないように心掛けた。
アクリル板を設置したことにより、安心して利用できる環境となった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
求人データ、証明書作成においてはシステム化したことにより業務効率がはるかに上がった。
一方で就職に関するデータ作成に関しては個人データが適切に入力されていることが大前提であり、個々の学生の入力ミスや未入力等の為、結局必要なタイミングでデータ活用できず、一件ずつ誤りを修正していくという作業に時間を費やした。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．学生の知りたい情報をまとめた、見やすい資料作成。

２．引き続きコロナ対策を徹底し、安心して利用できる環境整備。

３．システム運用上の問題点を洗い出し、改善策の検討。

令和２年度　「宮﨑　伸一郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務主任
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．会計課業務の計画的および正確・効率的な業務遂行。 ２．事務局内情報共有。関連担当部署だけでなく、事務局全体において業務分担や連携ができるよう体制の強化 ３．学生支援に係る業務の理解、遂行	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．毎月、毎期の計画的かつ早期の処理。補助資料の作成・活用。 ２．朝礼による連絡・報告、および事務職員の減員をカバーするため協力体制の確立。 ３．新規の学生支援制度の確認、理解。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 現在個人として担当している会計業務については、スムーズかつ合理的に処理を行えたと感じている。 会計課としては伺書、起票など効率化を進めなくてはならないところがあると思われる。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 事務局内の情報共有が不十分と感じられ業務分担や連携が難しい。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 それぞれの担当で内容の理解をしあい、スムーズに業務がなされた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
本年度の計画を継続し、実行・検証を行い、また事務局内における不具合（情報共有）の解消に努め、よりパフォーマンスを上げれるよう心掛けていく必要があると考える。	

令和２年度　「一瀬　章子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　監査提出資料の見直し ２．　会計業務マニュアル作成 ３．　他個人業務マニュアル作成	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．提出資料の内容を把握するとともに、変更箇所等を加える ２．　会計業務マニュアルというよりは証票綴に注意点など詳細を付記する、また綴りを見ればわかるような綴じ方にする ３．他個人業務マニュアルは文書化し、流れがわかるカレンダー（見出し）をつける	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」 修学支援制度が始まり、資料に組み込むこととなったため、再度検討が必要となった ２．自己評価「 Ｓ・Ⓐ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 証票綴にはタグをつけ一目でわかるようにしている、詳細も綴じるか付記することを心がけた ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ⓑ・Ｃ・Ｄ 」 例年と異なる行事が多く、状況も踏まえたマニュアルが必要だと感じた	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　監査に関係する伝票入力の統一を図る ２・業務・PC スキルアップを図る ３・月次、年間スケジュール(カレンダー)を作成する	

令和２年度　「森口　和美」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　課内だけでなく事務局内の情報共有と連携を密にし、より円滑な業務遂行を図る ２．　他課の業務把握 ３．　学務システムについてより良いものになるよう、開発元とのより密な打ち合わせを行う	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．学務システムや朝礼を活用し、事務局内の現状を把握する。 ２．他課業務の流れを把握する。 ３．各学科コースの教員から要望等を聞き、スケジュールを見ながら定期的な打ち合わせの場を設ける。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ Ｃ ・Ｄ 」 年度途中より復職したため、課内のみの職で精一杯であった。事務局内の情報共有等まで至らなかった。 ２．自己評価「 Ｓ・ Ａ ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 他課の業務内容を把握し、担当者が休んだ際に、業務が滞ることなく円滑に進むよう努めた。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・ Ｂ ・Ｃ・Ｄ 」 適宜教務課からの要望は、開発元に伝えることはできたが、各学科コース教員からの要望は伺えなかった。要望等伺えなかったため、定期的な打ち合わせの場を設けることができなかった。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．課内の連携を密にし、より円滑な業務遂行を図る。他課の業務を把握し、サポートを行い、事務局内のフォローアップ体制の強化に引き続き努める。他課担当者が休んでも業務が滞ることなく、円滑に進むようにする。 ２．学務システムについて、さらなる改善と業務の効率化を図る。優先順位を明確化し、要望の整理を行う。	

令和２年度　「林田　翔太郎」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　高等教育の修学支援新制度（以下「修学支援制度」という。）の対応に向け、事務局内での情報共有や連携をより密にして業務を遂行する。

２．　課内タスクや業務遂行スケジュールを必要に応じて見直し、計画的かつ円滑な業務の遂行を図る。

３．　学務システム開発元との定期的な打合せの実現。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　給付型奨学金関係の情報（採用区分や適格認定等）共有を図る。

２．　タスクは昨年度を基本として、学年暦の変更等による柔軟な対応が可能となるよう、早目の実行を心がける。

３．　後期の実現に向けて開発元担当者や教職員とのスケジュール等のすり合わせを行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
本年度は、修学支援制度に係る業務に従事することができなかったため、学生課との情報共有も行えなかったため、成果はなし。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
新型コロナウイルス感染症拡大による全学休講措置並びにそれに伴う学年暦及び時間割等の変更には、臨機応変かつ柔軟に対応することができたと考える。具体的には、年度当初に示した授業回数が変更になったことによる授業回数の再検討、感染症対策としての教室変更、非常勤講師の授業スケジュール変更等への対応に尽力した。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」
学務システム開発元と教職員との定期的な打合せについては、教務・IR 委員会で提案を行ったが、対応を急ぐ（定期の打合せまで依頼を待てない）ものもあると考えられることから、学内で要望を募り、逐次先方に依頼するという対応でよいとの判断がなされた。この決定に従い、学務システムに対する要望書を作成の上、スタッフメールで要望を募った。結果として要望は集まらなかったものの、学務システム開発ための意見収集窓口を広げるという点においては十分に役割を果たしたと考える。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　事務局内業務への理解及び他の職員への担当業務の共有（不在時でも他の職員が対応可能となるような体制作り。）。

２．　教務関係の規程等の見直しを行う。

３．　学務システムの更なる機能拡充を図る。

令和２年度　「櫻井　縁」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　事務局内での情報共有を密にし、協力して業務ができる環境を作る。 ２．　複雑化する奨学金業務の内容把握。窓口対応をスムーズにできるレベルまで引き上げる。 ３．　国の修学支援制度の事務手続きを理解する	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．お互いに声をかけやすい雰囲気を作るため、あいさつ等基本的なビジネスマナーを意識して行動する。 ２．毎日 JASSO の HP を確認し、変更点がないか確認をする。奨学金関係の業務タスクを１日の初めにリスト化し、その日のタスクはその日のうちに片づけるようにする。 ３．初年度で業務の内容がつかめないので、マニュアル等の理解に努める。	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 基本的なコミュニケーションは取れたかと思うが、まだ事務局全体で声をかけやすい雰囲気かといわれると疑問の残る結果であった。自分自身、誰が何の仕事をしているかはっきりと理解できておらず、声をかけにくいと感じることが多々あったように感じる。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 昨年に引き続いて、奨学金関係は変更の多い年になったが、学生の対応においては臨機応変に JASSO に問い合わせをしたりして対応することができた。実際に対応をしている中で、まだ JASSO の制度としても整っていないような事例もいくつか出てきたので、それに関しては JASSO と細やかに連絡を取ることで対応をすることができた。自作した JASSO への FAX 質問状がうまく機能してくれて、連絡が取りやすくなったのも大きな進歩であった。 ３．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 かなり難解かつ学園の交付金申請に係る重要な業務であったため、文部科学省や私学事業団との連絡体制を整えて、慎重に行った。初年度のためわからないことが多く、スムーズに業務を遂行できたとは言えないが、交付金の申請自体は問題なく行うことができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　来年度は事務分掌の見直しが大きく入ってきているため、より積極的に他部署の仕事を経験し、理解を深めていきたい。 ２．奨学金関係の物理的なファイルを整理し、対応中の案件を分かりやすく管理する必要がある。対応しなければならない奨学金の種類が多いため、スケジュール管理のやり方も再度見直して、日々の業務の流れを分かりやすくしていきたい。 ３．今後は学生の休・退学等に関係して、より複雑な事例が発生してくることが考えられるため、制度自体の理解も深めたい。また、この業務は学園に対する交付金の支給に関わる重要な業務であるが、途中から申請作業のほぼすべてを自分ひとりで行ったため、ほかに内容をきちんと理解している人が少ない。これは大きな問題点である。そのため、事務局長をはじめ他の職員にも情報を共有して理解を促し、よりスムーズに申請作業を行えるようにしたい。	

令和２年度　「作本　栞里」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報・庶務）

ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。

１．　業務の内容を誤って理解することのないように、疑問を感じたらすぐに周囲に相談する。

２．　業務に優先順位を付けて整理し、一つ一つ確実に行う。

３．　高校生や学生と年齢が近いこともあるため、学生との距離感を大切にして信頼関係を築きたい。

ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。

１．　まずは、業務引継書を確認するなど自力で解決する。難しい場合は入試広報室、庶務課それぞれ周囲の方の助言を求める。

２．　出来る業務から早めに取り掛かるなど、計画的な業務遂行に努める。

３．　積極的に学生に話しかけたり、笑顔で接することで相談しやすい事務局の雰囲気作りに努めたい。また、学生はSNS の利用が高いので、学生目線でどういう情報を欲しているのか判断し、より充実した広報活動を行う。

ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。

１．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
疑問や分からない点を周囲の方に聞き、協力いただくことで、解決できたこともあるが、気持ちに焦りを生じると周りが見えなくなることがあり、結果として業務の悪循環を招いた。

２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・[Ｃ]・Ｄ 」
間近のスケジュールを把握し、優先順位をつけて業務に取りかかることができたが、長い目でスケジュール管理ができていなかったため、準備に時間を要するものへの対応が不充分であった。

３．自己評価「 Ｓ・Ａ・[Ｂ]・Ｃ・Ｄ 」
学生時代に知り合った学生とは、気軽に会話等できていたが、主に新２年生とは、適度な信頼関係を気づけ
なかった。また、学生（または高校生）が欲している情報を見ることができるSNS として「LINE」の運営を試みたが、予想以上にアカウントの開設・運営が滞ってしまった。

ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

１．　業務が忙しい時ほど、冷静に考える。周囲の方への「報告・連絡・相談」を心掛け、業務の円滑に務める。

２．　この１年間で行ってきた行事等を改めて見直し、早めに準備をしていくことを心掛ける。

３．　新２年生には、学生アンバサダーもいるため、気軽に話しかけられるような自身の雰囲気作りや声掛けを行いたい。また、「LINE」に関しては、令和３年度から情報を積極的に送ることを心がけ、本格的に運営できる体制を整える。

令和２年度　「伊藤　理恵子」年次報告書	
区分：　学科コース　・　委員会等　・ 事務局等 ・　教職員個人　・　その他（　　）	
部署名：図書館	職名：司書
ＰＬＡＮ（計画）：　査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
１．　学生・教職員のニーズに合わせた図書館サービスの改善を行う。（図書館規定の見直しなど） ２．引き続き保育園・幼稚園や高齢者サロンなどでのおはなし会を開催し、絵本や紙芝居を通じて地域貢献活動を行う。 ３．　学生・教職員による利用拡大のための大小イベントの開催	
ＤＯ（実行）：　目標の達成に向けて計画を遂行する。	
１．図書館規定や、逐次刊行物（雑誌）ラインナップの見直しなど ２．保育園・幼稚園や、認知症カフェ・高齢者サロンでのおはなし会の実施 ３．毎年恒例の学生選定図書や長崎県大図協のライブラリーラバーズ、新規の小規模イベントの開催	
ＣＨＥＣＫ（検証）：　成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
１．自己評価「 S ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 館内で使用できる、筆記用具等の小物を入れるための透明バッグの貸出を開始。また　これまで禁止としていた紙芝居や大型絵本の学外貸出・飲料の持ち込みを、それぞれ貸出可能・蓋つき飲料に限り持ち込み可能とした。新型コロナウイルス感染症の影響により各コースの学外実習が変則になったため、実習貸出の貸出可能冊数を通常の 5 冊→10 冊へ変更。 教員から聞き取りを行い、定期購読雑誌のラインナップを変更。要望のあった雑誌を購入することとした。 図書館サービスの一環である環境整備として、閲覧室および書庫の 2010 年以前の消耗図書 225 冊を破棄し、新刊図書スペースを確保した。 ２．自己評価「 Ｓ・Ａ・Ｂ・ C ・Ｄ 」 本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、非常に残念ながら学外での地域貢献活動を行うことができなかった。 ３．自己評価「 Ｓ・ A ・Ｂ・Ｃ・Ｄ 」 緊急事態宣言下での休学措置もあり、閉館日数が多くなって必然的に入館者数も減少した。そんな中でも、図書館ﾏｽｺｯﾄｷｬﾗｸﾀｰ募集を行って、ｷｬﾗｸﾀｰを決定したり、例年行っている長崎県図協キャンペーンにおいて独自で 2 週間クイズイベント開催した。 学生による図書選定も、例年通り行うことができた。	
ＡＣＴ（改善）：　課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
１．　新型コロナウイルス感染症が終息するまで感染防止対策を取り、安心して図書館を利用してもらえるように、図書館の環境整備に努める。 ２．新型コロナウイルス感染症の影響を見ながら、学生・教職員のニーズに合わせた臨機応変な図書館サービスを行う。（図書館規定の見直しなど）	

令和２年度

「研究活動報告書」

専任教員の研究活動状況表（職位順）								FD・SD研修会参加状況		
平成28年度（2016）～令和2年度（2020）（過去5年間）								令和2年度（2020）		
氏名	職位	研究業績				国際的活動の有無	社会的活動の有無	FD･SD研修会参加実績		頁
		著作数	論文数	学会等発表数	その他			学内（2回実施中）	学外（Webを含む）	
森　弘行（L）	教授	0	8	0	0	無	有	2	0	78
織田　芳人（Y）	教授	0	6	1	0	無	有	2	0	79
中澤　伸元（Y）	教授	0	1	0	2	無	有	0	0	80
松尾　公則（Y）	教授	3	11	2	0	無	有	1	0	81
福井　昭史（Y）	教授	20	2	1	0	無	有	2	0	82
武藤　玲路（L）	准教授	1	15	6	0	無	有	2	4	83
濵口　なぎさ（L）	准教授	0	8	1	0	無	有	2	0	84
島田　幸一郎（Y）	准教授	0	4	0	0	無	有	1	0	85
中村　浩美（Y）	准教授	0	4	1	25	無	有	1	0	86
本村　弥寿子（Y）	准教授	0	9	2	0	無	有	2	1	87
光武　きよみ（Y）	准教授	3	15	1	7	無	有	1	0	88
古賀　克彦（S）	講師	0	8	0	0	無	有	2	0	89
荒木　正平（Y）	講師	0	9	6	2	無	有	2	0	90
福井　謙一郎（Y）	講師	0	9	3	0	無	有	2	0	91
蛯原　正貴（Y）	講師	2	10	2	0	無	有	2	1	92
太田　美代（S）	講師	0	3	0	1	無	有	2	0	93
江頭　万里子（L）	講師	0	7	1	0	無	有	2	0	94
船勢　　肇（Y）	助教	1	4	1	4	無	有	2	0	95
桑原　倫子（S）	助教	0	4	0	0	無	有	2	0	96
桑原　真美（S）	助教	0	4	0	0	無	有	2	0	97
山中　慶子（Y）	助教	0	3	0	0	無	有	2	0	98

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　【職名】教授　【氏名】森　弘行

【研究の題目】情報処理教育に関する研究

【研究の概要】

・ 学修支援のためのデータベース構築

2013 年より、学生の学修支援のためのデータベース構築を継続している。学務システムと相互にデータ移行作業を行うことで、業務を補完するような形態で運用している。

本システムはこれまで Windows 2008 サーバー上の仮想計算機（Oracle Virtual Box）で運用していたが、Windows 2008 のサポートが 2020 年 1 月で終了したため、学内 PC の更新により廃棄された PC を活用し、CentOS を導入することでデータベースシステムの移行を行った。

・ SAS University Edition の導入

本学に学務システムが導入され、蓄積されたデータを分析し、学生支援に活用することが求められている。現在、データ分析には Excel が多く利用されているが、多量のデータを効率的に処理するには本格的な統計処理システムが求められる。しかしながら、これらのシステムの多くは高額であり気軽に購入して試したりすることはしづらいのが現状である。そのような中、統計処理システムの一つである SAS によるプログラミングの相談を受け、調査していたところ、SAS システムの基本部分にあたる University Edition1)が無償公開されていることが分かり、利用してみた。

学内で広く使用されている Windows PC でも利用できるが、Linux OS の Web サーバーで稼働するため、Oracle Virtual Box や VMware といった仮想計算機の環境が必要であり、先述のデータベース構築の経験が大いに役に立った。Excel ファイルをインポートして分析する機能もあり、学務システムなどから抽出したデータの分析等に活用できる。

・ COVID-19 重症化リスクの分析

中村長崎大学名誉教授、野瀬九州大学名誉教授他との共同研究。

日々COVID-19 の PCR 検査陽性者の情報が各都道府県から Web で公表されている。この情報を分析することで重症化のリスク要因を分析し、政策に反映させることを目的としている。このうち、都道府県のウェブサイトの情報を自動的に収集し、統計処理可能な形式に整える変換作業を担当した。

都道府県や時期によって公表される項目や方法がまちまちであり、全てを自動収集することは困難であった。HTML 形式のデータおよび XML 形式に変換可能な PDF データから大阪府、奈良県、北海道発表分についてはかなりの件数を変換することができた。現在、大阪府のデータを中心に分析を行っている。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　教授　　【氏名】　織田芳人

【研究の題目】

(1) 保育で使われる漢字の収集と分析（Ⅱ）

(2) 保育学生に対するプログラミング教材としての知育玩具の活用（Ⅱ）

【研究の概要】

(1) 前年度（令和元年度）における保育で使われる漢字に関する研究を、本年度も継続して行った。本年度は、教育実習で学生が記述した実習日誌を取り上げ、計量テキスト分析ソフトによって、どのような語が頻出しているか、どのような語と語の組合せが多いか等を検討した。研究対象とした実習日誌は、保育実習（保育所実習）、教育実習（幼稚園実習）を終えた本学幼児教育学科2年生6名が教育実習（20日間）で記述していた実習日誌である。実習日誌には「子どもの活動」「実習生の活動」「今日の課題と反省」「今日学んだこと・感想・反省など」等がある。本年度は、学生個々の漢字力が現れやすいと推測される「今日の課題と反省」「今日学んだこと・感想・反省など」を対象とした。

「今日の課題と反省」における頻出150語と「今日学んだこと・感想・反省など」における頻出150語を一見する限り、出現回数の差はあるものの、大きく違いがあるようには見えなかった。そこで、それぞれの頻出上位50語を並記して、比較しやすいようにしたところ、「今日の課題と反省」にあって「今日学んだこと・感想・反省など」にない語の一つとして「目標」があった。「課題」を記述する欄のため、「目標」という語が用いられたと考えられた。「観察」という語も「今日学んだこと・感想・反省など」には見られず、実習生にとって「子どもの観察」が重要な課題であるとの認識が現れていると推測された。

本研究に直接関わるものではないが、「今日の課題と反省」と「今日学んだこと・感想・反省など」の２項目に関して、出現回数が多い漢字のグループを比較すると、大きい違いがあるように見えなかった。その理由として、２項目ともに「反省」という語を含んでいるので、実習生が記述する際に内容が重複しても止むを得ない状況にあったことが十分推測された。したがって、本学幼児教育学科で使用している実習日誌の記述項目に検討の余地があると考えられた。

(2) 前年度（令和元年度）における保育学生のためのプログラミング学修に関する研究を、本年度も継続して行った。本年度はヴィジュアル・プログラミング学修成果を昨年度よりももう少し細分化して評価した。アンケート調査も項目の文言を少し変更して実施した。当該アンケート調査結果の分析等は、次年度以降の課題とする。

関連する国内外の研究動向を調査したところ、国内では CiNii での検索によると、近年、保育学生対象のプログラミング教育の可能性や必要性を指摘した研究が発表されてきたが、その数はまだ少ない。国外では、Google Scholar による検索範囲ではあるが、教員養成におけるスクラッチや教育ロボットによるプログラミング教育の研究や、保育学生対象のスクラッチ Jr によるプログラミング教育の研究が見られる。しかし、保育学生対象のプログラミング教育に関する研究は国内と同様、数少ないと推測された。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　教授　【氏名】中澤　伸元

【研究の題目】未来をつくる保育者育成の方法
～　個性を伸ばす意識改革の実践　～

【研究の概要】保育士を目指す学生たちに必要なのは、真の表現力や想像力であり、それを支える人間力である。音楽表現は心の思いを伝える手段であるが、自分が伝えたいことを自分らしく伝えるためには、音楽技術以前に、豊かな感性がポイントとなる。

これまであらゆる指導方法を試みてきたが、十数年の実践と研究の結果最も重要だと感じているのは、学生の意識改革である。学生が人間らしさを持って表現できるようになるためには、まず本人の人間としての意識改革が必要不可欠である。一人一人の学生が持つ個性を活かして自分を表現できるよう、音楽表現指導の中で意識改革を行った。

1. 個人としての意識改革
保育士を目指す学生たちは、人間らしさ溢れる表現者であることが求められる。ところが多くの学生は、少なからず不安や悩み、苦しみを抱き、自分に制限をかけて生きている。まずはこの点から改善すべきと考えた。

1-1　自分らしさを確立する
他人の批判や評価を気にせず、本来の自分らしさを発揮できるようにする。

1-2　潜在意識を変える

1-3　効果の高い実践内容
1)　モチベーションを上げる声出し
2)　7 つの氣「七大氣」で声出し
ⅰ七大氣を読み上げる
ⅱ七大氣がないとしたらそれは自分の問題であると自覚する
ⅲ七大氣があるということを自覚する
3)　アファメーション言葉の声出し

2. 表現者としての意識改革
音楽表現を可能にするために、自分がリアリティを感じ、それを伝えられるようになることを目的とする訓練を行った。
2-1　想像力と臨場感の実践
2-2　イメージを声に乗せる実践
2-3　ミュージカル制作

3. 保育者を育てる者としての意識改革
これまでの教育は、学生を不完全なものとして指導する傾向が強いが、マイナスの解釈からは、「できない」「無理だ」とマイナスな要素しか生まれず、可能性は生まれてこない。学生の意識改革を促すために、教員にも学生達はみな完全であるいう視点が必要で、意識改革をしていくことが重要である。

今後の展望
AI と共存していく新しい時代の流れに伴い保育者の役割は重要であり、新しい発想力、考え方、捉え方、心に触れるコミュニケーション力など、人間らしい役割と技術が求められる。今後も音楽表現を通して「その人らしさ」を表現できる保育士の育成を続けていきたい。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任教授　　【氏名】松尾公則

【研究の題目】

①長崎特別支援学校で実施しているカエルの授業の改善を図る。

②日本では対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルの卵塊調査を実施し個体数の減少を証明する。

③長崎県におけるヤモリ類の分布調査

【研究の概要】

①長崎特別支援学校で実施しているカエルの授業の改善を図る。

長崎特別支援学校のカエルの授業は昨年まで 3 年連続で実施している。今年度も、例年通りに学生主体による授業を計画していたが、新型コロナの影響で実施が不可能になった。中止とするつもりであったが、支援学校の強い要望により何らかの形で実施することになった。話し合いの結果、学生たちの劇はＤＶＤに収録してモニターで見せることとなり、本物のカエルは、事前に担当の先生方に指導をしたのち、教員で触れ合うこととした。ＤＶＤは約 15 分の長さで、絵本の読み聞かせやカエルの歌、動物等の紹介などとした。担当教員の指導は、事前に研究室に来ていただき、持って行く 9 種の動物について触れ合い方を教えた。カエルの授業は、令和 2 年 7 月 3 日の 10:30～12:00 の時間帯で実施した。授業は小学部 4 年生の 5 名を対象に、担当教諭や保護者、マスコミなど 10 数名の見守る中で実施した。このことについては、長崎女子短大紀要第 46 号に報告している。

②日本では対馬だけに生息するチョウセンヤマアカガエルの卵塊調査を実施し個体数の減少を証明する。

長崎県には 13 種のカエルが生息しており、その中のツシマカガエルとチョウセンヤマアカガエルは日本では対馬だけに分布している。対馬の 2 種のカエルは環境省の絶滅危惧種に指定されているが、そのランクは最も低いものである。長崎県で両生類を調べている者として、チョウセンヤマカガエルの個体数が激減していることを危惧し、卵塊数による個体数調査を行い、環境省に対してランクを上げることを提案したいと思っている。平成 28 年度から調査を開始し、今年度も 2 月 23～25 日の三日間で、5 年連続の継続研究が終了した。今回の調査には、環境省と絶滅危惧種選定委員にも同行していただき、現状を見て頂いた。

調査結果によると、毎年産卵する湿地や池のような場所においては、極端な産卵数の減少は見られず、年により多少の増減が見られる程度である。しかし、水田地帯においては、水の供給量が安定しておらず、産卵のある年とない年の違いが顕著である。また、水田に産卵された卵塊は、そのほとんどが乾燥死していると思われ、変態まで成長できる個体はかなり少ないであろう。今回の調査では、14 カ所の地点で卵塊を確認することができた。昨年度確認した 20 地点のうち、今年度も確認できたのは 8 地点だけであった。確認できなかった 12 地点の大半が水田であり、現在の水田状況が産卵に適していないことが分かった。新しく 6 地点の産卵を確認したが、それらは、水のたまった水路や新しく発見した湿地である。

5 年間の調査により、チョウセンヤマアカガエルの減少は確実であり、その原因は、冬季に産卵し幼生が育つ水場の不足であるということが証明された。この結果は、長崎県生物学会で発表したいと思っている。

③長崎県におけるヤモリ類の分布調査

長崎県には 4 種のヤモリ属が分布している。家屋を主な生息域とするニホンヤモリ、海岸の岩場を生息域とするニシヤモリ、ある特定の島だけに分布する南方系のミナミヤモリとヤクヤモリである。今年度、ニホンヤモリとニシヤモリの雑種を発見し、2 種間の交雑が可能であることが証明された。長年の調査により、ニホンヤモリの勢力拡大が進んでおり、海岸の岩場にも多くのニホンヤモリが発見されるようになった。数地点において、ニシヤモリからニホンヤモリへの転換が確認され、危惧しているところである。

今後も、分布調査を継続し、ヤモリ界の変化を解明していきたいと思っている。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】教授　　【氏名】福井　昭史

【研究の題目】音楽教育の指導方法と教材の研究

【研究の概要】

子どもから成人に至る各段階における音楽教育の今日的課題を踏まえ、各々の指導の在り方、教育方法やその評価に適した教材の研究を行った。

保育者養成における音楽教育では、子どもの音楽表現を支援できる知識と音楽表現の技能の育成が目標である。それに関する今日的、最大の課題がピアノ演奏や歌唱などの実技の指導である。中でも、音楽経験の少ない学生に対しての指導は難しいため、そのことに重点を置いた教育研究に取り組んだ。

担当している授業「子どもの歌と伴奏法」と「保育と音楽表現」では、ピアノ初心者を対象とする教材の開発に努めた。具体的には、子どもが歌う「さよならのうた」「うれしいひなまつり」「かたつむり」「ぞうさん」などの歌の簡易伴奏の作成すること、学生が演奏を希望する楽曲の「切手のないおくりもの」「まっかな秋」「星に願いを」などを演奏者の技能に合わせて編曲することなどを行った。また、授業の課題の一つとした学生によるピアノ連弾においては、学生が演奏を希望する楽曲が映画音楽、ニューミュージック、ポピュラー音楽など多岐にわたり、それらが必ずしも楽譜化されておらず、また、楽譜があったとしても難易度が高いものが大多数である。そこで学生の技能でも演奏が可能となるような編曲を試みた。

ピアノ初心者を対象とする教材の開発については、その結果を論文にまとめ研究紀要に掲載した。

前年度に引き続き、小学校、中学校等の音楽授業での鑑賞教育に用いる教材楽曲の研究を行った。

数年間にわたり連載している音楽教育雑誌、季刊「音楽鑑賞教育」には、歌劇「カルメン」の中から「前奏曲」「ハバネラ」などの楽曲、日本民謡の「八木節」や「江差追分」などの楽曲を取り上げ、それらの成立した社会や歴史などの背景、楽曲の構成や音楽的な特徴などを研究した「教材研究ノート」を掲載した。

日本音楽の入門書である著書「よくわかる日本音楽基礎講座」（音楽之友社）については、出版から 10 年余りが経過したことから、この間の音楽や教育を取り巻く状況の変化に対応した修正を施し、増補改訂版を出版した。改訂の主な内容は、平成期の教育課程の改定に伴う内容の追加、諸学校の音楽教科書に掲載されている楽曲の増加や変化に対応した新しい楽曲や演目の追加などである。また、近年のグローバル化に対応して、日本の音楽や芸能と関連する諸外国の民族音楽を加えた。具体的には、日本の音楽に用いられる楽器の大部分が大陸伝来のものであることから、日本の楽器と同族のアジアやヨーロッパの楽器を掲載したこと、日本の民謡の起源が仕事、祭りなど生活や文化と深く関わっていることから、そのような文化としての音楽の視点から、さまざまな起源をもつ世界の民族音楽を紹介したこと、音階やリズムなどの音楽の要素について日本と諸外国の音楽を比較して掲載したことなどである。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース　　【職名】准教授　　【氏名】武藤　玲路
【研究の題目】女子短大生の学習意欲に関する研究（２）
【研究の概要】

１．本稿の要旨

本稿は、筆者が継続的に取り組んでいる「女子短大生の学習意欲に関する研究」（武藤、2020）の一環として実施した調査報告である。今回は、前回の調査で学生が「最もやる気が出た活動」にあげた「アルバイト」への動機づけについて調査し、女子短大生の学習意欲を促進する学習プログラムや教授法の開発の一助とすることを目的とした。

その結果、最もやる気が出る活動は「趣味・特技」で、次に「アルバイト」「資格・認定・検定のための授業・学習」「演習や実習系の授業・学習」の順であった。今回、趣味・特技のやる気が高かったのは、行動の要因が内面に湧き起こった興味・関心や意欲などの自発的な刺激による「内発的動機づけ」が影響しているのではないかと思われる。

また、最もアルバイトにメリットや魅力を感じる要因は「金銭的（物理的）な報酬があるため」で、次に「向上心のため（スキルアップ・適応力・社会性）」「やりがい・達成感・充実感を味わえるため」の順であった。従って、アルバイトのやる気の促進には、行動の要因が評価・賞罰・強制などの人為的な刺激による「外発的動機づけ」の影響が大きいことが示唆された。

以上のことから、女子短大生のやる気には、趣味・特技に含まれるような「内発的動機づけ（内的要因）」の要素と、アルバイトに含まれる「外発的動機づけ（外的要因）」の両方が重要であることが示唆された。

２．学習意欲の３つのレベルの構成要素

桜井（1997）は、児童の学習意欲が発現するプロセスには、「認知・感情」、「学習行動」、「欲求・動機」の３つのレベルがあるとした。そして、「(1) 認知・感情」レベルの構成要素には「⑩おもしろさと楽しさ、⑪有能感、⑫充実感」、「(2) 学習行動」レベルの構成要素には「④情報収集、⑤自発学習、⑥挑戦行動、⑦深い思考、⑧独立達成、⑨協同学習」、「(3) 欲求・動機」レベルの構成要素には「①知的好奇心、②有能さへの欲求、③向社会的欲求」が含まれるとした。

これらの構成要素の多くを満足させることができれば、学習意欲の促進にもつながると思われる。学習意欲の構成要素の詳しい説明は、以下通りである。

(1)「認知･感情」レベルの構成要素

①「おもしろさ・楽しさ」: 結果に依存しない感情で、失敗したとしても感じることができ、知的好奇心が活性化していれば得られる感情。

②「有能感」: 学習行動がうまくいったとき、成功したときに感じることが多い感情。ほめられることにより、高まることがある。

③「充実感」: 向社会的欲求に基づく動機が達成された場合に感じることができる感情。

(2)「学習行動」レベルの構成要素

④「情報収集」: 主に知的好奇心によって、興味・関心のあることについて情報を集める行動。

⑤「自発学習」: 自ら進んで学習に取り組んだり、計画を立てて学習をしたりする行動。

⑥「挑戦行動」: 今よりも少し難しい問題に挑戦する行動。

⑦「深い思考」: 問題の解決法を複数考えたり、よりよい解決法を考えたり、仮説や考えを自分なりに吟味したりする行動。

⑧「独立達成」: できるだけ自分一人の力で問題を解決しようとする行動。

⑨「協同学習」: 友達と協力して問題を解決する行動。

(3)「欲求･動機」レベルの構成要素

⑩「知的好奇心」: 未知のことや珍しいことに興味・関心をもち、それらを探究したいという欲求。

⑪「有能さへの欲求」: より有能になりたい、より賢くなりたいという欲求。

⑫「向社会的欲求」: 社会や人のためになりたいという欲求。思いやりの気持ちとも関連する。

３．今後の展望

今後は、より的確で有効な学習プログラムや教授法を構築していくために、実際の授業に中で「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」を取り入れた手法を用い、その効果を測定し可視化して、さらなる検討

資料としていきたい。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース　【職名】　准教授　【氏名】　濵　口　なぎさ
【研究の題目】能動的学修の実践に関する研究
【研究の概要】
(1) 目的
　担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法
①「ゼミナール」では４年連続で「長崎と猫」をテーマとし、猫に関わる地域の問題を解決する方法として、調査研究した結果をリーフレットとしてまとめた。

②「登録販売者試験」受験対策講座の実施

(3) 結果
①新型コロナの影響で年度当初に休校期間があったが、この期間にゼミのテーマに関わる図書を読んでくるようゼミ生に指導したことで、５月以降の活動再開時に、学生たちがある程度の知識を持っている状態となり、スムーズに研究活動に移行できた。
　しかし、学外での活動が制限されたこともあり、前期は書籍やインターネットによる情報収集が主となり、活動計画の変更が余儀なくされた。
　５月以降、教員は授業のはじめに今日のポイント確認、終わりに次回までの活動内容の確認を行い、調査研究活動の軌道修正を主とし、学生が見落とした点の修正に徹したが、昨年度の学生に対する指導の反省を生かし、今年度の学生に対しては、事例の提示や情報収集の方法など具体的な指導を行った。
　夏休み以降、学外での取材が可能となり、取材先の方々から過去の先輩たちが作成したリーフレット「にゃがさきまっぷ」の継続を望む声が直接聞く機会があったことで、学生たちのモチベーションが上がり、バージョン４の作成に着手することができた。これまでと同様、猫関連グッズを販売する店や看板ねこの紹介を掲載したが、今年度は新たに地域猫活動を行う団体の代表者へのインタビューができたことは収穫であった。動物管理センターと譲渡会の取材ができず、学生たちが行政の対応を知る機会が減ってしまったことは心残りである。
　学生達は自主的に役割分担を行ってはいたが、３名ずつの２グループで活動しており、グループ間での情報共有が不十分で、リーフレットや報告書をまとめる際に支障が出た。しかしながら「最後までやり抜いた達成感」は全員が５段階評価で５、総合評価でも５人は 100 点満点で 85 点、１人が 70 点とゼミ活動に積極的に取り組んだと評価していた。
　なお、昨年度の課題としていた、年度当初の自己評価を行わなかったため、次年度はぜひ実施し、最終回で同じ項目の自己評価を行うことで、ゼミ活動によってどのような力が身に付いたのか学生・教員双方が確認できるような取り組みを実行してみたい。

②今年度は栄養士コースの古賀先生、桑原真美先生と協力して、「登録販売者試験」受験希望者を対象とした対策講座を実施した。４月の時点では１L が４名、2S が４名参加した。昨年度受験し、不合格となった 2L の学生は参加しなかった。
　今年度も導入時は試験区分ごとに講義形式で概要を解説した後、課題として模擬問題を渡し、次回答え合わせをしながら、要点を深く確認するという方法を取った。最終的に６名が受験したが合格者はいなかった。
　残念ながら不合格となった学生たちの自己採点の結果などから、やはり最も分量の多い「主な医薬品とその作用」について重点的な指導が必要である。また、2S の学生は栄養士実力認定試験と実施時期が重なっていることもあり、指導時間の確保も課題である。
　次年度は、対策講座の実施回数を増やし、「主な医薬品とその作用」については古賀先生を中心として講義によって学生の理解を深める方向で指導計画を立てる予定である。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　特別専任准教授　　【氏名】島田幸一郎

【研究の題目】

特別な教育・保育的ニーズのある子どもに対する「合理的配慮」について
～5 年間の学生の実習後アンケートの分析をとおして～

【研究の概要】

1.　目的

インクルーシブ教育・保育の進展と共に、「合理的配慮」に繋がる支援ニーズへの対応は喫緊の課題である。本学学生の過去 5 年間にわたる教育実習・保育実習後のアンケート分析をとおして、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもに対して、どのような配慮がなされているのかを、3 歳児以上の子どもを対象に幼稚園・保育所での取り組みを比較検討して、「人的な配慮」「特性に応じた配慮」「物理的な配慮」「連携による対応」に区分して考察する。

２．方法と内容

⑴ 方法

過去 5 年間の本学幼児教育学科 2 年生の教育・保育実習後に、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもの在籍状況、また支援ニーズに即した必要な配慮の実施有無と配慮があった場合その内容について、学生が担当した 3 歳児以上のクラスを対象にしたアンケート調査を分析する。

⑵ 内容

障害のある子どもは、「発達障害」「身体障害」「知的障害」「病弱「その他」に大別し、気になる子どもについては、「落ち着きがない、多動等」「対人関係が築けない等」「言葉の遅れ、指示が通らない等」「身辺自立が遅れている等」「忘れ物が多い等」「その他」に大きく区分する。配慮事項の内容については、「人的な配慮」「特性に対応した配慮」「「物理的な配慮」「連携による対応」の 4 点に大別する。

３．結果

幼稚園、保育所別に過去 5 年間のアンケート集約と分析に取り組んだが、データ整理に手間取り分析が十分にできなかった。しかし、幼稚園、保育所ともに特別な教育的・保育的ニーズのある子どもの受け入れが進んでいること、また物理的な配慮（スロープ等）の整備には経済的な面で課題が多いが、人的な配慮（支援員の配置等）や特性に応じた配慮（スケジュール表の利用等）については各園で独自の工夫をしていることが理解できた。更に、連携による対応も次第に増えていることが分かった。

４．まとめ

近年、特別な教育的・保育的ニーズのある子どもに対しては、徐々にではあるが理解が進んできている。しかし、教育・保育現場で子どもにかかわる際十分な「合理的配慮」がなされているかは疑問である。インクルーシブ教育・保育の実現を目指し、継続して子どもの教育・保育的支援ニーズへの配慮について研究を進めていきたい。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　准教授　【氏名】中村浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行のもととした発声法と、それに伴う歌曲やオペラアリアを含むクラシック楽曲の音楽表現、演奏法、と演技法。また、ミュージカルにおけるミックスヴォイス等の発声法と歌唱法、演技法について。
2. 保育者養成校の音楽教育における授業無し用、指導法、教材研究について。

【研究の概要】

1. 今年度はコロナ渦で上京してのレッスンは勿論こと、コンサート出演も１本もなかった。
レッスンやコンサート本番での演奏は、研究課題に繋がるとても大切な要因であり、この時間によって、研究課題が成り立つことと言える。
しかしながら、この研究課題は卒業研究授業である「幼児とうた表現」に精通しており、学生への指導によって、学んできたミックスヴォイスや、音楽表現、演技法を初心にかえって見つめ直すことができた。
楽曲が「子どもの歌」でもその詩の解釈や、人に歌わる「歌唱法」「表現力」はどの「歌」でも同じことが感じられ、自分にだけではなく学生への説得ある指導にも繋がったと考える。
「子どもの歌」の楽曲は地声やミックスヴォイス、ほんの少しのファルセットを使って歌えるが、「オペラアリア」と「イタリア歌曲」「フランス歌曲」「ドイツ歌曲」の楽曲は、当然のこと、ファルセットや胸声発声を用いての歌唱となるため、授業での歌唱法とは全く異なり、授業で慣れてしまった発声法から、クラシックに用いる発声法に転換しながら歌うことに少し無理な時期があった。毎年ではあるが、授業で立て続けに「子どもの歌」の楽曲での「歌唱法」や、講義する「声」の出し方によって、クラシック楽曲で使う高音域のファルセットが、息の流れない窮屈な声になるのが殆どで、授業がない夏休みや春休みに少しずつ戻り、窮屈になりにくい息の流れが感じられる声になる。この時期に研究課題に取り組むのがベストであった。
しかし今年度はコロナ渦での授業とあって、マスク着用と学生との距離を空ける事で、聴こえるための声を出す事で、かなり声帯に負担がきていた。アリアも息の流れがスムーズにいかず、２点Ｇ・２点Ａを出すのもやっとで、出せても全くもってアリアとならない声であった。以前は当たり前のように 2 点Ｇ・２点Ａそして２点Ｂ・２点Ｈが問題なく出ていたので、次年度は日頃よりこ「声」を大切に、声帯を疲れさせないよう、高音部で声帯が正常に密着してかすれ声にならないよう、中間音からブレスとポジションを意識しながら、力を抜いてどこの筋肉を使うべきかを、いろいろ試しながら達成させたい。
その効果があることと、その効果によって課題研究の成果が少しずつでも表せればと、今まで以上にコンスタントに練習を重ねていくことが一番と考えている。

2. 今年度は昨年度を上回る初心者が多く、音楽基礎知識の理解も約８割がない状況のため、授業外でお互い余裕ある時間を都合して個人レッスンを行った。しかしコロナ渦で、狭い研究室ではかなりの注意を払ってレッスンを行い、時間によっては音楽室を使用する事が多かった。研究室で一対一の演習のため、まずは緊張状態を緩和させること、学生の性格を早く把握するように努めた。性格を早く知ることはその学生のピアノ技術の進度や音楽的な感受性をどのようにして引き出せるかにおいてとても重要である。これまでの経験によって今年度も性格を早く知り各学生の指導方法、内容、言葉かけに注意をはらった。学生の性格を知ることだけではなく学生と教員との信頼関係を構築した。メンタル面の強化も指導の一環として重要視したが、メンタルが弱く、ピアノレベルも低い学生に限ってプライドが高く、慎重な言葉と選曲にとても気を遣った。練習をするのではなく練習の仕方のノウハウを丁寧に、繰り返し指導していくことを継続した。今まで積み重ねて努力することが少ない学生には苦痛でもあったと思うが確実に上達していることを学生自身も感じることができていたようだ。時として厳しくても愛情を持って心から応援する気持ちで指導することで、学生もなぜ厳しく指導されたのか、なぜ上達したのかを理解してくれた。今後もさらに学生に愛情ある指導をしていきたい。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】准教授　　【氏名】本村　弥寿子

【研究の題目】保育実習生に求められる力について

【研究の概要】

1　目的

保育者を目指す学生が本学において身に付けておくべき力を明確にし、就職直後から自信をもって保育に携われることができるようにする。

2　方法

平成 30 年度、令和元年度、令和 2 年度 3 年間分、人数にして 309 名分の保育実習評価票の洗い出しを行った。「保育実習Ⅰ」と「保育実習Ⅱ」が各 10 日間ずつ実施されるが、「保育実習Ⅱ」の評価票は、「保育実習Ⅰ」からの学生の成長をふまえて記入している実習園がほとんどである。そこで、主に「保育実習Ⅱ」の評価票の洗い出しを中心に行った。

3　結果

実習園より、努力が必要と指摘された課題の項目と指摘を受けた人数は、以下のとおりである。

評価項目	人　　数（名）		
	H30 年度（100 名中）	R1 年度（111 名中）	R2 年度（98 名中）
勤務状態 〔体調及び自己管理・遅刻・欠席〕	0	0	0
指導を受ける態度 〔素直さ・積極性〕	32	26	34
保育者としての態度 〔挨拶・笑顔・明朗さ・言葉遣い〕	15	14	14
責任感 〔報告・連絡・相談・提出物〕	0	2	1
計画性 〔指導案・保育準備・教材研究〕	0	0	0
保育技術 〔子ども理解・子どもとの接し方〕	9	14	13
観察力 〔記録内容・書き方・自己評価と振り返り〕	17	29	14

4　まとめ

結果より、評価項目「指導を受ける態度」「保育者としての態度」「保育技術」「観察力」での指摘が多いことが分かる。まずは、保育者としての知識や技術の前に、「学ばせてもらう」「保育をさせていただく」という気持ちで積極的に実習に臨むということが大切であることを学生に伝えて付けることが大切である。この気持ちを持ち続けることで、保育技術や観察する力も伸びると思われる。ただ、観察したことや考えたことは、記録として適切に文章化する必要があるが、本学学生は文章化が苦手である。これに関しては、学内での授業の中で訓練することが必要であると考えられる。考えを文章化することや正しく言葉を表記することは、様々な授業の中で意識して取り組んだり、授業内容の一部として取り上げたりしていくことが必要と思われる。今後、本学学生が保育者としての必要な力を身に付けるために、どのような内容をどのように学ぶべきかを、各教員の専門分野に限らず模索・検討していくことが必要であると考える。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科　　【職名】　准教授　　【氏名】　光武　きよみ

【研究の題目】保育学生の養護技術の課題について

【研究の概要】

今年度は COVID-19 の流行により、密を避けながらの子どもの保健演習を行った。その中で、演習科目の理解度の確認と実習での課題を明確にするために、幼児教育学科２年生にアンケート調査を実施した。

今回の調査により、ほとんどの学生が学内の講義・演習では理解できていたと感じていたが、実習では難しさを感じた養護技術があったというのが現実である。理解していたと思っていたが、実習では焦り等もあり、適切な養護技術の提供ができなかった学生もいた。また、実習中は授乳・食事、着脱、排泄などに特に難しさを感じていたことが調査により明確になった。学内では人形や学生同士での演習となり、実際の乳児と触れ合えないのが１つの要因ではないだろうか。３歳未満児の保育は、目覚しい発育・発達が見られる時期で、生活上の養護が主となり基本的な生活の世話を保育者が丁寧に行い、やがて自立に向けて支援をしていく必要がある。それを行うためには、発達段階や各園児の詳細の把握が大切である。実習中の学生は発達段階の見極めなど情報収集に時間がかかり、どこまで支援したらよいのかの判断に迷い、適切な養護技術の提供が困難であったと考えられる。今後は、実習前に実際に乳児と関わることができる機会を提示する。または模擬保育などの機会を設けることにより、乳児との接し方や関わり方を学ぶことの検討が必要であると考える。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　講師　【氏名】　古賀　克彦

【研究の題目】

本学における新型コロナウイルス感染症の発生に伴う栄養士学外実習の対応についての検討の実施

【研究の概要】

令和２年度は新型コロナウイルス感染症の流行のため、学外実習先である高齢者福祉施設や病院において、例年通りに栄養士学外実習が実施できない状況に陥った。この新型コロナウイルス感染症の発生により医療や福祉の現場で学外実習が出来ない状況に対し、文部科学省と厚生労働省から連名で『新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について（令和２年２月 28 日付)』の事務連絡がなされ、本学は『実習施設の変更を検討したにもかかわらず、実習施設の確保が困難である場合』に該当したため、学外実習Ⅰは学内の実習に変更し、学外実習Ⅱは依頼していた施設で実習が出来ない場合は実習先を変更し学外実習を実施した。このように学外実習を学内実習に置き換えて実施するのは初めての経験であり、また令和３年度以降もこの状況が続くと予想されたため、学内外での実習内容を総括し改善するため学外実習Ⅰ及び学外実習Ⅱの終了後に学生を対象にアンケート調査を行い、学内で実施した学外実習Ⅰおよび従来通り学外施設で実施した学外実習Ⅱについて評価を行った。

学内で実施した学外実習Ⅰでは学生を４つのグループに分け、グループ毎に教員が各内容を指導する形で実施したが学生の満足度は高い結果となった。また、同じグループで５日間各実習を行ったため、アンケートの自由回答欄ではチームワークの重要性を学ぶことが出来たとの意見が多く見られた。当初はグループ内で意見の対立等も散見されたが、学生間で話し合い行い解決方法を見つけるなどの経験は学生にとって良い経験になったと思われ、グループワークの重要性を知る機会にもなった。この経験は普段の授業にも活かしていきたい。アンケートの自由回答欄には学外で実習を行いたかったとの意見もいくつか見られた。新型コロナウイルス感染症の流行が続く限り、以前と同様の実習を行うことは難しいと思われるが、可能になれば年２回の学外実習を再開させたい。また、実習の内容に関しては詰め込み過ぎとの意見もあり、栄養士コース教員間で検討し改善していきたい。

学外実習Ⅱに関しては、実習中止の依頼があった病院や高齢者福祉施設の７施設 13 人分の新たな実習先を見つける作業を、緊急事態宣言が解除され、世間が落ち着きを取り戻した６月中旬以降に行った。今年は実習先の確保が最優先課題であったため、一部の学生の希望実習先と実際の実習先が一致しないこともあった。来年度も病院や高齢者福祉施設での実習は難しいと考えられるが、可能な限り学生の希望に沿った実習先確保を行っていきたい。また、学外実習実施が難しく断念する学校も多く存在する中、実際に学外で実習を行った結果、学生からは短大で学べない多くのことを学ぶことが出来たり、栄養士のイメージが改善したりしたとの意見が多く見られた。学外実習は栄養士の学びだけではなく、職業観や学生生活の満足度にも影響を及ぼしていることが改めて裏付けられた。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　講師　　【氏名】　荒木正平

【研究の題目】

対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

（1）本年度の研究成果としては、まず、前年度から開始した「障害のある子ども、気になる子ども、特別の支援を必要とする子どもの、教育・保育場面における“育ちあい”の支援に向けて」の継続研究という形で本学紀要に発表した論文があげられる。

前年度の成果も踏まえ、教育・保育現場においてその対応が急務とされておりかつ、実際にその数も増えてきていると指摘される、（発達障害を含む）障害のある子ども、気になる子ども、特別な配慮を必要とする子どもとのかかわりと、“育ちあい”の支援に向けた環境整備のための考察を、本学卒研所属の学生の研究に関する取り組みのプロセスと成果をメタ視点から捉えなおす形での分析・考察を行った。

前年度の課題として、家族支援・家庭支援の意識がより重要性を増すことが考えられるとしていた。近い将来において幼児教育の担い手となる学生の意識についてのアンケート等を用いた検討と、その保護者の意識との比較を行った研究のプロセスを検討した今年度の研究成果からは、前年度の家族の意識に関する気づきに加えて、（当然家族を含むが）それ以外の周囲も含めた支援者（例えば職場）の「認知」と「理解」との重要性について指摘することができた。また、特別支援教育の現場や、放課後等デイサービス等で支援にあたる職員への聞き取りを実施することができ、それぞれ非常に有意義な成果が得られた。

さらに前年度指摘した、インクルーシブ教育・保育への要求の高まりと、具体的な実践の現場における取り組みの現実とをいかに結びつけていくかについてであるが、これについても別の論文で一つ形にして報告することができた。論文においても学会発表においても、キーワードとして「遊び」が重要となることを指摘し、幼児教育・保育現場のスタッフの思いについて実施した個別のインタビュー調査等の結果も踏まえる形で考察を進めた。この課題への取り組みも引き続き継続したいと考えている。

（2）「子育ての社会化」（社会的養護のあり方に関する検討を当然含む）と家族のあり方に関するテーマと、介護実践現場におけるコミュニケーションのあり方についてのテーマは、すでに（1）で触れた問題意識と重なる部分も多い。というよりもむしろ、児童分野、障害分野、介護（認知症高齢者をめぐる課題を含む）分野といった、広義のケアに関する研究群がそれぞれに課題としての独自性を当然抱えつつも、同時にある面では課題を共有していることを強く意識しながら考察を進めること自体に意義があると考えている。そこでキーワードとなると考えているのが、上述したように「遊び」である。これについては、今年度行った 2 つの学会報告のいずれにおいても、テーマの一つとして表明した。これまでに集積した各分野の成果・課題や、それぞれのケア実践の当事者に協力いただきながら実施したインタビュー・データをいかしつつ、引き続き執筆を進める予定である。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】　福井謙一郎

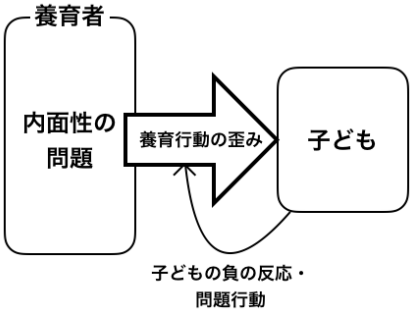
【研究の題目】

養育行動とその世代間伝達に関する研究の動向と展望

【研究の概要】

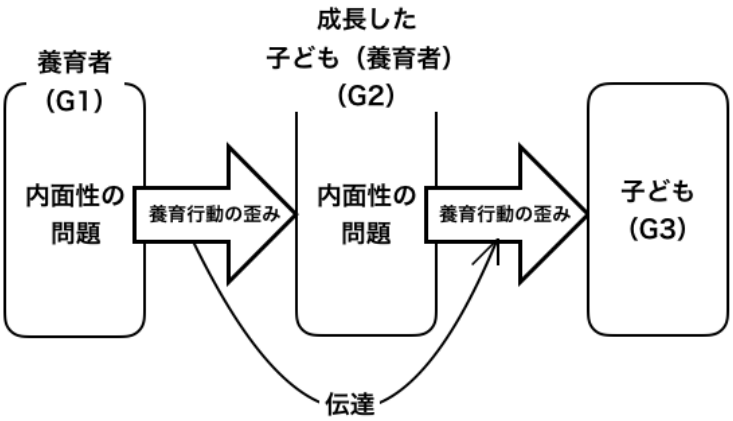
（1）養育行動とは

養育行動とは、養育者と子どもの相互作用から起こる養育者の行動や態度のことである（小山、2008）さらに類似した概念として養育態度が挙げられるが、この定義は養育者が子どもを育てるにあたって、意図的あるいは無意図的にとる一般的な態度・行動とされており（原田、2008）、その内容は様々な研究の中でほぼ同義として扱われることがほとんどである（伊藤ら、2014）。本研究では、養育を行動的側面から捉えるため、親の子どもに対する態度・行動を「養育行動」として扱うこととする。



（2）養育行動が子どもの内面性に及ぼす様々な影響

さらに養育行動については、養育者から子へ伝達すると言われている。これを厳密には「愛着の世代間伝達」という（数井ら、2000）。これは個人の愛着スタイル及び対人関係のテンプレートとなる内的ワーキングモデル(Internal Working Model；IWM)の世代を超えた伝達を意味する。IWM は、祖父母となる第一世代（G1）から第二世代（養育者；G2)、そして第三世代（子；G3）まで引き継がれていく（遠藤、1993；数井ら、2000；田邊ら、2009；大村ら、2001)。例えばCrowell & Feldman（1988）は、母親と子どもの相互作用について、愛着を軽視したタイプのかかわりをもつ母親の子どもは母親に対し抑制的で冷めた態度をとること、とらわれ型（自己観がネガティブで他者観がポジティブな愛着スタイル）の母親に対しては、怒りを表面化しやすい行動を示すなど、母親の愛着スタイルが子どもの愛着スタイル（行動）に対し様々な影響を及ぼすことを指摘している。このように、世代間伝達を説明する際、愛着スタイルそのものが第一世代（G1）から第二世代（G2)、そして第三世代（G3）へと受け継がれていくことを示す場合が多い。一方、客観的に観察される親の養育行動そのものが伝達するという見方も存在する。木本・岡本（2007）によると、被虐待相当経験を持つ母親の方が、被虐待相当経験を 持っていない母親よりも虐待相当行為を生じさせている確率が 2.5 倍以上であり、虐待のような負の養育行動が次世代の養育行動に伝達される可能性が高いとしている。また横張（2010）は、青年期の女子学生に対し、母親からの養育行動に対する学生自身の予期養育行動（学生自身が自分の子どもに対してとる予期的な養育行動）の関連を調査し、親のネガティブな養育行動が学生（娘）のネガティブな養育行動は影響を与えており、その伝達を媒介している要素が学生自身の親に対する認知であることを示唆している。



令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】　講師　【氏名】　蛯原　正貴
【研究の題目】　伝承遊びが保育者効力感に与える影響
【研究の概要】

保育現場において幼児に親しまれている遊びの一つに伝承遊びが挙げられる。伝承遊びとは、子どもの遊びの中で自然発生的に生まれ、代々共有されてきた遊びであり、子どもの社会の縦横の繋がりによって、大人から子どもへの経路を通して伝え受け継がれてきた遊びの総称であるとされている。
幼児期の様々な発達に有効とされる伝承遊びであるが、近年は若年保育者を中心に実施率が低下しているとの指摘がなされており、若年保育者を中心として、研修会等で遊びに関する経験を積んだり、知識、技能を高めたりすることが求められている。

しかしながら、伝承遊びに関する知識や技能を高めるということは、子ども達のためだけではなく、保育者にとっても有益であり、保育技術の向上はもちろん、保育者効力感といった保育者としての資質の部分の向上にもつながるのではないかと考えられる。

保育者効力感とは「教師効力感（teacher efficacy or teachers’ sense of efficacy)」をモデルとした概念であり、“保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念”と定義されている。保育者効力感の変容を報告している研究の多くは実習の経験に焦点をあてているものの、実習経験が保育者効力感に与える影響は一貫しておらず、実習前後の変容を捉えるためには、実習中にどのようなスキルを身につけたか、またはどのような知識を身につけたかという「実習中の学び」に焦点をあてる必要があると考えられる。

実習中の学びには子ども、保育者、保護者等とのやりとりに関わる対人的（社会的）スキル、実習記録や指導案作成等に関わる表現的スキル、保育場面での指導法やピアノ演奏技術等、保育技術そのものに関わる実践的スキルといった様々なスキルが挙げられるが、最も成長や成果が可視化しやすいと考えられるのが実践的スキルである。実践的スキルの変容と保育者効力感の高まりとの関連性を明らかにすることで、実習中のどのような学びが保育者効力感を高めるのかということを解明する一助になるのではないかと考えた。
これらのことから、本研究では実践的スキルを習得することが保育者効力感を高めるという仮説を立て、その仮説を検証するため、保育者養成校に通う短期大学生 90 名を対象に、伝承遊びの技能習得が保育者効力感及び「健康」保育者効力感に与える影響について検討した。

選択した伝承遊びは、一定の技能が必要とされるお手玉（両手、片手)、あやとり、こま、竹とんぼ、竹馬、けん玉の６種類（７種目）であった。

分析の結果、技能習得前後において、各伝承遊びと２つの保育者効力感との間に相関関係は認められなかった。しかしながら、各尺度の変化量を算出して分析したところ、お手玉（片手）及びけん玉の技能変化量とそれぞれの保育者効力感との間に正の相関が認められた。また、２つの効力感を被説明変数とする重回帰分析を行ったところ、それぞれの保育者効力感に対し、お手玉（片手)、けん玉の２種目から正の有意なパスが引かれた。

以上のことから、伝承遊びの中でもお手玉やけん玉といった技能習得が難しい、つまり、主観的困難度が高いと感じられる課題に取り組むことで、保育者効力感を高められる可能性が示唆された。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　【職名】講師　【氏名】 太田　美代

【研究の題目】　学生の主体的な学びに向けての試み

【研究の概要】　大学・短期大学の大衆化に伴い、学生の多様化が拡大し、入学者の学力にも幅が見られる。本学においても例外ではなく、学生の実態に応じて基礎学力の格差に配慮した授業の在り方を検討する必要に迫られている。

一方、これからの社会が求める大学教育は、知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修、いわゆるアクティブラーニングへの転換が求められている。（２０１２年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」）

さらに栄養士養成課程においては、２０１９年に新たな「管理栄養士・栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」が日本栄養改善学会から提言されている。

以上のことを背景に、「主艇的・対話的で深い学び」特に学生の主体的な学びを実現するための方策を、授業でいくつか試みてみた。

１　講義

○ワークシートの活用　ノートのサンプルとなる内容で作成したワークシートと、スライド資料を利用した書き込みプリントを使ったが、学生の意見ではワークシートの方が良いという評価だった。

○現物に触れる体験　　学生の意欲を喚起することができた。

２　実習

○場の設定　グループワーク、Think-Pair-Share(個で考える→隣と話し合い→全体で共有)
　　ピアインストラクション(教えあい)、KJ 法　など、課題に応じて

○自己決定　いくつかのテーマの中から、自分たちで課題を選択して取り組む

○自己評価　自己評価表やチェック表を利用　リハーサルで記入した自己評価表を本発表でも使うことで、各自の学習成果が自覚できるようにした

○個別指導

○他者への説明　アウトプットを意識した学びで理解の深化を図る

３　カリキュラムマネジメント

○学びの実践化　・長崎食育学の学びを生かす場として、実技試験の課題を「県産魚を使った料理」や「郷土料理」とした
　　・公開講座のテーマを「地元のさつま芋を使った料理とおやつ」とし、デモや説明を学生の出番とした
　　・卒業研究では、郷土料理のアレンジレシピの作成に取り組み、フィールドワークを行って学びを深めた

今回の授業実践では、講義系の授業をいかにして学生が主体的に学びに向かう授業にしていくかが課題の一つとなった。やはり良い問いを作り出すことが重要であると感じた。

実習系の授業は本来体験を通して学ぶ授業であるので授業評価においても学生の学習意欲は高い。しかし、その授業でどんなことを理解し修得するのか意識していなければ「活動あって学び無し」の状態になりかねない。その点、レポートで振り返りを行うことは学生の意欲や理解の程度を把握するためにも有効であった。

今後は、レスポンスシートやリフレクションシートなど短時間で書くことができるペーパーを準備して個々に授業内容の要約や振り返りを行う機会を増やし、本時の授業の意義を理解して次時の意欲につなげることも実践したいと考えるが、学生の実態を考えるとそのための書き方の指導も必要となる。

また、新型コロナウイルス感染防止に配慮しながらグループワークやペアワークをどのように取り入れていくかは重要な課題である。

基礎学力を身につけさせることは本来義務教育の使命だと考えるが、必ずしも学力が十分とは言えない学生も在籍する中で、どのように意欲をもって取り組ませるしかけをするかは今後も追究すべきテーマとなり得るものと考える。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　ビジネス・医療秘書コース【職名】特別専任講師【氏名】江頭万里子
【研究の題目】敬語の指導法の一試み
【研究の概要】敬語の知識と運用力を身に付けるために、敬語の間違いを正し、間違いの理由を説明する課題を与え、取り組み前後の敬語のテスト結果からこの指導法の効果を検証した。

１．研究の背景：昨年度実施した本学１年生に対する敬語の知識・運用力に関する調査から、入学時において敬語の仕組みについての知識が少なく、敬語の運用力も高くないことがわかった。

２．方法：敬語の間違った遣い方をしている秘書の言葉を訂正し解説を書く課題（２～３問）を自宅学習する。当番（2 人）が授業前（休み時間）に教員に解説し、教員から指導を受けた後で、他の学生に説明する。他の学生はその説明を聞き、自分の回答をチェックする。疑問点はその場で質問し、必要があれば教員が解説する。課題は毎回回収し、教員がチェックし必要に応じてコメントを書いて返却する。以上を８回実施する。１回目の授業時と最終回に同程度の難易度のテストを行う。１回目と２回目のテスト結果の比較、授業時に敬語の仕組みの説明を行い、この取り組みは行わなかった１年生のテスト結果との比較により授業法の効果を検証する。１年生の１回目のテストは、言葉遣いの授業に入る前に行う。

対象：	ビジネス・医療秘書コース	２年生２８人	授業科目：秘書実務２（令和２年前期）
	ビジネス・医療秘書コース	１年生２３人	授業科目：秘書概論（令和２年前期）
	栄養士コース	１年生２２人	授業科目：マナー学（令和２年前期）

３．結果：２年生の１回目のテストの平均点は 56.1 点、取り組み後のテストの平均点は 72.3 点で２回目の平均点が 16.2 点高かった。この差は、ｔ検定を行った結果、有意水準１％で有意差が見られた（$t(27)=5.28$, $p<0.01$）。ビジネス・医療秘書コース１年生の１回目のテストの平均は、46.1 点、２回目の平均は、68.9 点で、２回目が 22.8 点高かった（$t(22)=8.51$, $p<0.01$）。栄養士コース１年生の１回目のテストの平均点は、48.4 点、２回目のテストの平均点は 67.7 点で２回目が 19.3 点高かった（$t(21)=4.99$, $p<0.01$）。１回目と２回目の平均点の差は、優位水準１％で有意な差が見られた。ビジネス・医療秘書コース２年生の２回目の平均点とビジネス・医療秘書コース１年生、栄養士コース１年生の２回目の平均点には、共に有意差は見られなかった。

４．考察：ビジネス・医療秘書コース２年生、ビジネス・医療秘書コース１年生、栄養士コース１年生全て、１回目の平均点より２回目の平均点の方が高く、実施した授業は敬語の知識・運用力の取得には効果があったと思われるが、２年生の２回目のテストの結果と１年生の２回目のテストの結果に有意差が無かったことから、今回の取り組みの有効性を示すことはできなかった。しかし、今回の取り組みに対する学生の感想としては、

・敬語の成り立ちについて理解することにより、尊敬語と謙譲語の使い分けができるようになったと思う。
・先生が一つ一つチェックしてコメントをくれたので、正しいことを覚えられました。

など敬語の仕組みの理解に役立ったとの感想が多かった。

今回の結果を踏まえ、今後は、より効果的な指導法を検討していきたい。

【研究題目】秘書検定の学習意欲と自己調整学習に関する研究（共同研究）
【研究の概要】「秘書検定の合否を左右する学習意欲の規定要因には、自己調整学習の構成要素が関連している」という仮説を立て調査を行ったが、この仮説は指示されなかった。しかし、自己調整力の高い学生は、低い学生より調査期間を通して頑張れたと思っていることがわかった。また、自己調整力が低くなければ、秘書検定の受験対策を自己調整学習で行うことは、効果的であることが示唆された。詳細は、本学紀要　第 46 号に記載

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　　【職名】　助教　　【氏名】　船勢　肇

【研究の題目】

国民国家論の成果をふまえた歴史教育について

【研究の概要】

高等学校の日本史における国民国家論の成果を踏まえた授業実践について述べた。国民国家論といわれる研究潮流はおよそ１９９０年代に歴史学で隆盛した。それは、西川長夫などに代表されるが、国民国家や様々な文化装置・カテゴリを自明の前提としないという視点を提供してきた。一人一人の個人が、いかに出来合いの国民国家の枠組みにとらわれているのか、という観点を示したのである。

新自由主義が強力に働く現代においても、民族や国民国家のカテゴリが決してなくなったとはいえない。これらのカテゴリを、なんらかの福祉の文脈で用いる主張が後退し、格差を隠蔽するために用いる主張がある。つまり、自身が満たされない要因を、自身が所属すると考える民族や国民国家の外部の存在に求める傾向である。ちろん、国民国家の内部で〈敵-味方〉の分断が生じることもあるが、その外部を敵視したり攻撃したりすることで、内部の格差が問題として不可視化される場面もみられることになる。このようにみれば、民族や国民国家が出来合いのものであり、排除を伴うものであることは依然として確認し続ける必要があろう。中等教育の期間に多くの生徒がそうした見識を得ておくことは重要である。

国民国家論の視点は、学問上決して新しい視点というわけではないが、中等教育の現場において『要領』にいう「多面的・多角的」になるためには、あらためて重要な視点と考えるべきである。『要領』を広くみたとき、日本政府の見解を単純に「正当であると理解できるようにする」ことは困難というべきである。いいかえれば「固有の領土」という概念それ自体を疑う視点を得ることは、学習指導要領に一定程度則していても不可能ではないともいえる。

本学『紀要』に掲載された拙稿では、筆者が通信制高等学校でおこなった授業を元にして論じた。実際におこなった本授業の生徒は、各時代のおおよその推移も理解できていない者も少なくなかった。そこで、小学校からの歴史の復習ということも踏まえつつ、とりわけ領域の問題なので地図や年表を頻繁に活用し、話をすすめる必要があった。

授業の内容は、松尾芭蕉が現代の北海道に足を運ばなかったという事実から始め、芭蕉が平安歌人の枕詞の地をたどったことを説明し、古代日本の領域が芭蕉の旅程を拘束したことを理解してもらい、「日本」の領域が政治的産物であると認識してもらう、というものである。

この授業を通しては、それまで授業でふれた内容をほとんど逸脱することなく、既習の知識を構成し直すことでも新たな視野が開けるという点に面白さを感じてもらう。そして、その結果として、境界がいかに流動的なものなのかを理解してもらう。このようにすることで、バラバラの情報の羅列ではなく、時代を超えて関係し、現代にまでわれわれを拘束する問題に気づいてもらう。これによって、一見無関係な情報をつなぎあわせて論理的に構成する力の育成につながるであろう。また、時代を超えて授業をおこなうということは、すでに授業を終えた時代の復習の機会ということにもなる。

しかし、残された課題としては、人と人とが支え合う社会を目指すなかでどのような授業実践に結びつくのか、というものがある。これは、国民国家論がひたすら個人に分節化していくとの批判をうけていることによる。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　栄養士コース　【職名】　助教　　【氏名】桑原　倫子

【研究の題目】**若年女性の生活習慣と体格に関する研究**

【研究の概要】

現代の若年女性においては必要以上の食事制限や、偏った食生活による低体重者が少なくない。 一方、偏った食事や低体重者では体脂肪が少ないだけではなく筋肉量や骨密度の低下、さらにはビタミンやミネラルの欠乏による栄養障害がみられることがある。また若年女性において運動量は個人差が大きく、本邦では運動習慣のある者の割合は 20 歳以上の人口で、男性 35.9%、女性 28.6%であるが、20 代女性においては運動習慣のあるものは 11.6%ときわめて少ない。また健康な女子大学生の調査において 26.5%に四肢骨格筋肉量の低下（5.7 kg/m^{2}未満）がみられたという報告もある。

若年時の筋肉量の低下や骨密度の低下は将来的なサルコペニアや骨粗鬆症の危険因子となり、フレイルや健康寿命にも影響するといわれている。現在平均寿命の増加とともに、健康寿命が問題となってきている。健康寿命に影響を及ぼす因子として身体活動量の低下があげられる。近年サルコペニアという老化による筋肉量と筋力の低下及びそれに伴う身体機能の低下状態が定義された。サルコペニアは日常生活の質（QOL）の低下、転倒やフレイル（老化に伴う筋力や活力が衰えた状態）、骨折のリスクが高く、観察研究でも身体機能の低下、歩行速度低下、入院、死亡のリスクを高めるとされる。

若年時の筋肉量の低下や骨密度の低下は中高年以降のサルコペニアや骨粗鬆症の危険因子とされ、若年時の運動習慣、食習慣と筋肉量の関連を調べることで、将来的なサルコペニア予防につながる可能性がある。

本研究では、若年女性の体組成および筋力を測定し、運動習慣や食生活などの生活習慣との関連を調べ、低体重、筋肉量低下、筋力低下の有無とその危険因子を検討する。

【対象者】

① 長崎県立大学女子学生　32 名

② 長崎女子短期大学女子学生（生活創造学科栄養士コース）　50 名程度

【測定項目】

(a) 筋肉量・筋力の測定　体組成計：生体インピーダンス法（InBody)を用いて正確な四肢骨格筋量・体脂肪量・体重、BMI を測定する。筋力は握力を左右それぞれ 2 回ずつ測定し、最大値を採用する。

(b) 食習慣関連調査　BDHQ（食事歴法・食物摂取頻度調査法質問紙）を用いた食事調査を実施する

(c) 栄養、成長、運動習慣に関するアンケート調査

若年時の運動習慣（小中高時の部活やスイミングなどの習い事)、現在の運動習慣（1 回 30 分程度の運動を週 2 日以上、1 年以上継続)、出生体重、月経の状態、喫煙歴、飲酒歴、サプリメント服用の有無を調査する

(d) 骨密度（超音波)、内臓脂肪（Dual scan）の測定

(e) 栄養・代謝関連マーカー（インスリン、C-ペプチド、レプチン、アデイポネクチン、血糖、血糖、Alb、CPK、中性脂肪、コレステロールなど）の測定

10 時間以上の絶食下（空腹時）で対象者の採血を行い測定する。

＊このうち長崎女子短期大学学生については、(a)(b)(c)のみ実施（長崎女子短期大学にて行う）

長崎女子短期大学女子学生においても上記のような調査を行い、大学生活と体格に関するデータを収集する予定であったが、COVID19 感染症拡大の影響を受けて実施できなかった。その為、次年度に調査予定で準備を進めている。

現在は 2019 年に先行研究として収集を行った長崎県立大学女子学生 32 人分のデータを用いて、隠れ肥満と生活習慣、食習慣の関連について解析し、論文作成中である。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース　　【職名】助教　【氏名】桑原　真美

【研究の題目】栄養士実力認定試験対策としての栄養士スキルアップ特講の効果

【研究の概要】

1.はじめに

栄養士実力認定試験とは栄養士養成施設校の学生の資質向上と均一化及び自己の栄養士としての実力を認識させることを目的として平成 16 年度から栄養士養成施設協会が実施している試験であり、本学栄養士コースでは 2 年生が毎年受験している。過去 10 年間の栄養士実力認定試験の評価の推移を見てみると、平成 22 年度～26 年度は評価 A の学生が 50 %以上であったが、平成 27 年度以降は 40 %台を推移している。また、平均正解率については平成 27 年度以降において短期大学平均を下回った年が多くみられる。毎年 2 年次後期に任意参加の栄養士実力認定試験受験対策講座を設けて模擬試験を実施していたが成果は出せていなかった。本年度から、栄養士スキルアップ特講を選択科目として新設し栄養士実力認定対策を行うこととした。その効果を検証するとともに、学生の栄養士実力認定試験受験に対する意識を調査することでより効果的な受験対策方法を探ることとした。

2.方法

1）栄養士スキルアップ特講の内容および評価

栄養士スキルアップ特講の日程および内容を表 1 に示す。1 コマ 90 分の全 8 回とし、専任教員 4 名の講義を計 4 回、模擬試験を計 4 回実施した。専任教員の担当科目は複数に渡るため、学生が苦手とする科目や出題数の多い分野・項目等を厳選し講義を実施した。模擬試験は栄養士実力認定試験の過去 5 年分の問題を改変して出題し、問題数は実際の試験と同様の 85 問とした。また、最終模擬試験問題についてはそれまでに実施した模擬試験の問題を中心に過去問題と併せて出題した。成績評価については受講態度 20 %、最終模擬試験結果 60 %、栄養士実力認定試験結果 20 %とした。

2）学生の栄養士実力認定試験に対する意識調査

栄養士スキルアップ特講の内容について、「授業実施回数、講義回数および模擬試験回数」「開講時期の希望とその理由」を尋ねた。学生の栄養士実力認定試験に対する意識として、「試験へ向けての学習を始めた時期」「栄養士実力認定試験 1 か月前、最終模擬試験前 1 週間および栄養士実力認定試験前 1 週間の 1 日平均学習時間」「勉強方法」を尋ねた。また「栄養士実力認定試験を受験することについてどう思うか」についても併せて尋ねた。

3.令和 2 年度栄養士実力認定試験結果

本学の受験者数は 28 名であり、評価 A は 53.6%(15 名)、評価 B は 42.9%(12 名)、評価 C は 3.6 %(1 名)であった。昨年度と比較して評価 A の割合が 9.2 ポイント増加、評価 B の割合は 5.2 ポイント減少、評価 C の割合は 3.8 ポイント減少した。平均点（得点率）については全国平均が 51.1 点(60.1 %)、短期大学平均が 46.5 点(54.7 %)であり、本学の結果は 52.9 点(62.2 %)で全国平均を 1.8 点(2.1 ポイント)、短期大学平均を 6.4 点(7.5 ポイント)上回る結果となった。昨年度と比較すると全国平均は 3.9 点(4.6 ポイント)上昇、短期大学平均は 4.3 点(5.1 ポイント)上昇しておりやや問題の難易度が低かった可能性が考えられる。本学は昨年度と比較して 10.9 点(12.4 ポイント)上昇しており、全国および短期大学を上回った。

4.学生の栄養士実力認定試験に対する意識調査の結果

回数についてはおよそ 80 %の学生がちょうどよいと回答していた。開講時期については 85 %の学生がちょうどよい、15 %の学生が遅いと答えた。約 90 %の学生が 9 月以降に栄養士実力認定試験へ向けての学習を始めており、全体の約 56 %の学生においては 11 月中旬以降に開始したことが分かった。多くの学生が、試験に向けて学習時間が長くなっていたが、数名の学生においては最終模擬試験前 1 週間よりも実力認定試験前 1 週間の学習時間が短くなっていた。ほとんどの学生が過去問題を利用した学習方法であり、何度も繰り返し解く、理解できない問題については調べて暗記するなどが挙げられた。また、ほとんどの学生が栄養士実力認定試験を受験することに対して肯定的な意見であった。

5.考察

今年度は前年度と比較して、評価 A の学生が増加した。また、平均点についても、短期大学平均および全国平均を上回った。栄養士実力認定試験受験に対する学生の意識は予想していたより肯定的な意見が多くみられた。資格取得に直接関係する試験ではないため、受験へ対しての動機づけは次年度も丁寧に行う必要がある。また学習開始時期が試験の 1 か月前であった学生が 56%であり、十分時間をかけて対策が行えていないことが示唆される。今後は学習開始時期と得点の相関について調査を行いたい。

令和２年度（2020 年度）研究活動報告書

【学科名またはコース名】　幼児教育学科　【職名】助教　【氏名】山中　慶子

【研究の題目】　保育学生の造形表現における苦手意識克服のための授業実践
－造形表現に関する意識調査からの考察を通して－

【研究の概要】

幼児教育において、保育者が造形活動にかかわる割合は高い。保育者が、子どもたちの育ちや興味関心に寄り添って工夫をしながら活動を行えることは、領域表現のねらいの達成に必要不可欠であると考える。まず、保育学生が「造形活動を好きである（になる）」ことが保育者養成校における造形表現指導において基本となる事項であり、そのうえで幼児造形に必要な知識・技術の習得を目指す必要がある。

1. 目的

本研究は、2 年間で保育士としての造形に関する知識・技能を習得し、表現することを楽しいと思える保育士の育成が目的である。そのために以下の順に研究を進めることとした。

① 造形表現に関する意識調査を行い、造形に関して保育学生が抱える課題を挙げる。また、苦手意識の要因となっている事項を探り、今後の保育学生への造形指導にどのように活かしていくか示唆を得る。

② 調査結果から考察された事項を考慮し、学生自身が自ら考え、工夫し、表現しようという意欲・姿勢を育てる授業を実践し結果を得ることを目的とする。

2. 学生の造形表現に関する意識調査結果

図工・美術の嗜好については、4 割以上の学生が「大好き・まあまあ好き」と答えているのに対して、約 2 割の学生は「好きではない・嫌い」という回答結果となった。また、意識調査により以下のことが明らかとなった。

(1) 学生の苦手意識の要因として 3 つの要因が明らかになった。ⓐ具現化における上手下手の概念に基づく要因。ⓑ設定課題や授業内容に関する要因。ⓒ他者からの評価や本人のコンプレックスに関する要因。

(2) 造形表現に関する「苦手意識」は、保育者として造形表現活動を行うときの不安にも繋がる。その不安は「自身の造形技術に関する事項」「子どもたちの指導に関する事項」の 2 つの側面がある。

3. 授業実践

ⓐ～ⓒを解決するために保育学生への調査から苦手意識を解決する手立てを考察し、造形表現授業を行う上で考慮すべき 8 つの点を挙げ、授業を実施し、学生のアンケートを授業評価とした。

4. 結果

1 年生、2 年生ともに、「大好き・まあまあ好き」と回答した人数は増加し、「好きではない・嫌い」と回答した人数は減少した。

5. 考察

(1) 技法遊びを題材にし、素材の工夫によって表現の幅を広げることは、「上手・下手」の概念によって造形を苦手と感じている学生の表現しようという意欲に繋がる。

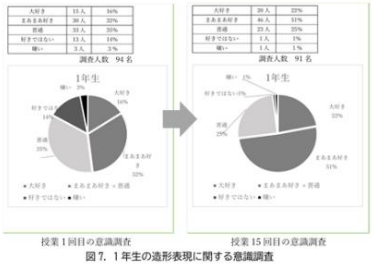


図7. 1年生の造形表現に関する意識調査

図8. 2年生の造形表現に関する意識調査

(2) 見本を数パターン提示し、他者の作品を見たりしても良いことは、イメージの手助けとなる。全てを模倣するのではなく、自分の表現を加え、更に納得のいくものにしようという姿勢が見られた。

(3) 作品を、全体の一部として壁面に飾られることには抵抗を感じることは少なく、壁面装飾としての掲示は、表現方法やアイデアの多様さに気づくきっかけとなると考える。

(4) 苦手意識の要因を考慮しながら授業を行うことで、学生が自ら考え、工夫し、表現しようという意欲・姿勢が、アンケート結果より見て取れた。

保育学生への調査から苦手意識を解決する手立てを考察し、授業を実施することで、保育者養成校の造形表現指導で考慮すべき点が明らかとなった。

KAKUMEI
GAKUEN

SINCE 1896